深夜に咲く可憐な花

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜に咲く可憐な花

【Nコード】

N7197R

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

東南アジアでの仕事終えた傭兵、シヨウは風が吹いたためヨーロッパのフランス首都パリへと足を運んだ。

そのパリをかつての相棒は“排世所”と言い何処か思い出さなくな
い過去の場所のように彼には聞こえた。

そんな所へ彼は足を運び、一件のBAR「カサブランカ」が目
に止まり足を運んだ。

そこには一組の男女が居り女が肩を震わせていたのを見てシヨウは相棒を思い出した。

去り行く女を片目にシヨウはカウンター席に座る男を見た。

そこに座っていたのは、かつての相棒。

不死身の名を持つ男だった。

傭兵の国盗り物語でコラボした「何でも屋ローランドへようこそ」のコラボ小説です。

こちらはどちらかと言えば不定期更新の為、いつ更新するかは不明ですのでご了承ください。

序章：腐れ縁の始まり（前書き）

これはなんでも屋ローランドと傭兵の国盗り物語のコラボ小説で、二人が別れてからさほど時間が経過していない頃の話です。

まったくの別物として楽しめる作品ですのでご安心ください。

序章：腐れ縁の始まり

頭を掠める大量の銃弾の雨。

その雨を地面に伏せて避ける俺と相棒、そして依頼人。

依頼人は悲鳴を上げながら地面に顔を埋め、両手で頭を抑えていた。

俺にとっては下手に逃げ回ったりしないので都合だ。

下手に動かれて狙い撃ちなんて御免被りたい。

しかし、それにしても撃ち続ける敵だと俺は思う。

まったくここは戦場じゃないのに、こんだけ撃ち続けるとは・・・
何処のバーゲンセールだよ？

「たつく。お前と組むと碌な事にならないな」

俺はスタームルガーM14をセミオートで撃ちながらぼやいた。

暗闇の中で闇雲に撃つたりはせず、銃が発射された時に僅かながらに光る銃口から相手の位置などを察して撃っているから無駄弾ではない。

こいつも悪くないが、やはりドラグノフが俺にとっては最高の恋人だ。

だが、デザート・イーグルもAK47もドラグノフもここには無い。

まったく寂しい限りだ。

恋人の3人全員が不倫旅行に行つちまっているのが哀しいぜ。

いや全員が不倫旅行に行つたんじゃないな。

・・・1人だけは直ぐ横で煙草を蒸かしている“ブルドッグ”に泣かされて入院中だ。

『ベッド以外では女は泣かせない』

とか偉そうにほざいていたが、真つ赤な嘘だ。

俺のホテルに送り届けられた恋人は見るも無残な状態で帰つて来たんだから・・・

あんなに傷め付けられたと思うと相棒とは言え、殴りたい気持ちだ。

だが、それを押し殺し別な言葉を吐いた。

「お前と組むと必ず碌な目にしか遭わないんだよな」

俺はこいつに愚痴を零した。

それに対してこいつは煙草を吸いながら笑ってみせた。

・・・悪役が様になるな。

こんなブルドック顔で悪役が様になる男がどうして女にモテルのか

知りたいぜ。

「どうやら俺はトラブルの女神に惚れられているようだ」

相棒はつくづく厄介な女としか縁が無いと嘆いた。

しかし、こんなブルドックみたいな顔の男が嘆いても気色悪いだけだ。

「おお、そんな素敵な女神に見染められるとは男冥利に尽きるじゃないか」

「冗談言つな。しつこい女は嫌われるんだぜ？」

「贅沢言つてんじゃねえよ。お陰で商売には事欠かないだろ？」

今の状況だってトラブルの女神が居るからこそだ。

厄介だろうが、俺らみたいな商売人には有り難いし願ったり叶ったりだ。

とは言え、ここは戦場じゃない。

それに今回の仕事はどちらかと言えば穏便に事を運びたかったんだけどな。

何せ場所は戦場ではなく何も無い辺鄙だが平和な田舎町だ。

そんな所で銃撃戦を映画みたいにしたら物の数分で警察が来るのは明白だろ？

だが、かれこれ1時間以上は続けているんだが一向に来る気配が無い。

となれば、恐らく向こうが予め手を回したという事だろう。

この国は俺と相棒が居た国よりも強固な官僚国家だ。

そいつ等の何人かと懇ろな関係を取れば、この程度の事など揉み消せるし誤魔化せる。

まったく国つてのは何処だろうと必ず“膿”があると痛感させられるぜ。

「しかし、しつこいな」

相棒は短くなった煙草を銜えたままウィンチエスターM1300ポンプアクション式を撃ちながら溜め息を吐いた。

散弾銃だから、射程距離なんて高が知れているが弾が飛び散るのを考えれば役立つ武器だ。

それに散弾銃なら少なからず狩猟シーズンだからカモフラージュ出来るかと踏んだんだろう。

それにして何でこんな状況になったか？

それは今から96時間前に遡らなくてはならない。

— —

パリの四月は冬が始まった時のように肌寒い。

近くのカフェに行き、エスプレッソを飲みたいと思うが、そんなに寒くはないと思いつまる。

かと言って、温かい飲物を飲まずに居られるかと言われたらそうでもない。

中途半端な季節に俺は舌打ちを漏らしながら久し振りに訪れた芸術の都、パリの風景を眺めた。

相棒と別れてから俺はヨーロッパに足を運んだ。

別に行きたい国がある訳ではない。

ただ、南に風が吹いたから来ただけという有り触れた理由だ。

傷だらけになって帰ってきた可哀そうな俺の恋人は入院中で丸腰状態だが、素手でもチンピラ程度なら俺には敵じゃない。

話は変わるが、俺が居る国はヨーロッパでも随一の観光国家であり官僚国家として知られているフランス。

そして花の都と言われるパリだ。

パリという名は聞こえが良い。

お洒落で上品な街並みと芸術家たちが集まる都。

とまあ、こんな言葉だと聞こえは良いだろう。

だが、俺の相棒は

『芸術とか花の都とか聞こえが良いのを売りにしているが、裏を見れば卑猥な店はあるし偏屈な野郎どもが屯ってるし犯罪もある。まるで糞が溜められる排泄所みたいな所だ』

と言ってみせた。

ここまで捻くれた言葉を述べる相棒を見て何か嫌な事でもあったのかと俺は思っていた。

そんな所に足を運んだ俺も俺だが、な。

普通に歩いていると日本人が多い。

だが、その表情は何処か面喰らっており、理想とは違つという顔だった。

やれやれ。

碌に調べもしないで、来たからこうなるんだよ。

パリは観光地として名高いが、思い描いていた所と違つ為に帰国後軽くショックを受ける客が多いと聞いている。

戦場で言えば、偵察を碌にしないうで行つてみたらスズメバチの巣だったってな感じだ。

まあ、俺には関係ないが。

肌寒い風が頬に当たり、僅かに痛みを感じた。

何処かで軽く一杯やるか。

俺は手近に行けそうな店を探し始めた。

目に止まったのは、英語で“カサブランカ”と書かれていた。

カサブランカ・・・白黒映画の王道を突っ走るメロドラマじゃねえか。

映画は余り見る方ではない俺だが、この映画は知っている。

何せ相棒が耳に胼胝が出来るほど煩く言っていたからな。

ブルドックみたいな男だが、映画鑑賞が趣味と言うから驚きだ。

しかも、メロドラマが好きだというから世の中不思議な物だ。

世界の七不思議に数えても良いかもしれない。

俺はカサブランカのドアを開けた。

カランカラン、とドアの上に付けた鈴が鳴った。

それと同時に店内からはピアフのヒット曲の演奏が聞こえてきた。

演奏しているのは黒人で些かアフロが掛った髪だった。

そしてカウンター席には一組の男女が座っていた。

男は濃紺、いや黒に果てしなく近い濃紺のトレンチコートを着ていた。

そのコートの上からは白い煙が出ていた。

明らかに煙草を吸っている。

男の傍らには琥珀色の液体を侍らせていたが、女は何もなかった。

女の肩が小刻みに震えている。

・・・泣かせたな。

何だか相棒みたいだな、と俺は思う。

そんな女を尻目に男は煙草を吸ってから溜まった灰を灰皿に捨てた。

そして口元を抑えて椅子から立ち上がると走ってきた。

俺は直ぐに避けるが、女は気付かずにドアから出て行った。

やれやれ・・・まるで俺の相棒じゃねえか。

ベッド以外で女は泣かせないとかほざいていたが、実際の所は何処だろうと泣かせ続けるんだからよ。

カランカラン

と再びドアが閉じる音と共に鈴が鳴る。

だが、俺が入った音と違い去り行く女を思ってたか、哀しそうな音に聞こえる。

そして男を見れば男は女が飲んでいたと思われるカクテルグラスに手をやっていった。

グラスを口元に運び飲み干すとバーテンに渡した。

それから俺を見た。

おいおい……嘘だろ？

俺は我が目を疑った。

俺を見つめている男は、不死身の王と言われた相棒……鷹見徹夜だった。

奴は俺を見ながら自分のグラスを掲げてみせた。

それから口端を上げてこう言ってきた。

「よお、元気そうじゃねえか？ 獵犬」

これが俺とあいつの再会であり、これから延々と続く腐れ縁の始まりでもあった。

第一章：運び屋稼業

俺はカウンターの席に腰を降ろし、バーテンに“バカルディー”を注文した。

奴の方はバーボンのストレートからドライ・マティーニにした。

カクテルの王と言われるマティーニは種類が豊富であるが、ドライ・マティーニがベターと言える。

これを頼む時に奴は「モンゴメリーで頼む」と言った。

これを聞いたバーテンダーは少し驚いた顔で居ながらも頷き、慣れた手つきでシェイクして奴に渡してきた。

このモンゴメリーは、アフリカ戦線の連合軍総司令官だった四角頭で知られるモンゴメリー将軍がドイツ軍との戦力比が15対1以上にならないと決して攻勢を開始しなかった事に引っ掛けているんだ。これを知っている者は数少ないが、どうやらバーテンダーはその知っている者のようだ。

「・・・また女をベッド以外で泣かせたな」

俺は煙草を取り出そうとしたが、生憎と空だった為に相棒にくれと強請った。

「人の恋を見るのはお上品じゃないな」

相棒は俺にジタンを渡しながらぼやいた。

女神の抱擁でない事に若干の驚きを覚えながらも俺はそれを受け取り銜えた。

「誰が好き好んで他人の色恋沙汰を見るか。ただ・・・目に入っただけだ」

俺はジタンを口に銜えてジッポーで火を点けた。

「そっかい」

相棒は短く頷くとマティーニを口にした。

「で、今まで何処に居たんだ？」

俺はジタンを吸いながら相棒に訊ねた。

「あれから国を出た」

もう決着は着いた国に居る必要は無いからだろうな。

それから別の国で一仕事終えてここに来たらしい。

「自分で排泄所と言った所によく来れたな？」

「南風が吹いたからだ。別に来たいとは思わなかった」

俺にとってここは排泄所以外の何でもない。

特に思い入れがある訳ではなく、ただここに向かって風が吹いたから来ただけだと言う。

「なるほど。まあ、俺も似たような物だが、な」

「だろうな。それでお前はこれからどうするんだ？」

「どうもこつも金が余り無いんだ。適当な日雇い仕事を探して気長に次の仕事を探すさ」

「それなら俺とまた仕事をしないか？」

相棒はジタンを灰皿に押し付けて消しながら俺に提案を申し込んできた。

「あるのか？」

「ああ。外人部隊に居た頃の友人が、仕事をくれたんだ」

今は弁護士をしているらしく、相棒ともよく連絡をしては仕事をくれるようだ。

「俺に事務職をやれと言うのか？」

「違う。ある人物をリヒテンシュタイン公国まで運ぶ仕事だ」

報酬は現金で10万ユーロ。

「運び屋としては結構な額だな。てことは……トラブルがある可能性が高い訳か」

「ああ。だから、お前みたいな奴が欲しいんだよ」

俺一人では力不足だ、と相棒は言った。

「別に良いぜ。で、支払いは？」

「前金で5万。後払いで残りの5万を貰う」

リヒテンシュタイン公国に着き次第、ベルギーの銀行に金を振り込む手はずだと言う。

スイス銀行と並びベルギーの銀行は秘密主義であり守秘義務で銀行界では通っている。

例え警察が相手だろうと口を割る事は無い。

そしてスイス銀行は預金残高がある程度ある奴でないと講座を作る事は出来ないがベルギーの銀行なら預金残高がある無しに関わらず講座を作れる。

俺も相棒も金には縁が無いからこれは有り難い。

「良いぜ。その話、乗った」

「決まりだな。所で、彼女は居るか？」

「生憎と全員が不倫旅行だ」

お前は？と俺が問えば相棒は「一人だけ」と答えてきた。

「羨ましいぜ」

「そうでもない。ここは9mmの方が愛されている」

相棒の銃は45口径。

アメリカなら大歓迎だが、ヨーロッパでは余り歓迎されない。

まあ、9mmの産まれはヨーロッパだから強ち無理もない。

だから、弾を補充し辛い。

「どつするんだ？」

「その手の事に関しては知り合いが居るから安心しろ」

「また女か？」

「いや。男だ」

「で、出発は？」

「4日後。それまでは待機だ」

運ぶ相手がアメリカに居るらしく帰って来るのが4日後だからだ。

「その運ぶ人物はどんな奴だ？」

「株主だ。何でもリヒテンシュタインで会議を行われるんだが、そ

れを妨害しようたくらんでいる奴が居るらしい」

「なるほど。で、その人物が来るまではどうする？」

「俺は準備があるし家がある。お前さんは何処かの安宿に泊れ」

「そちらは女か？」

「いや。こっちは俺の伝手で手に入れた家だ」

「何処にあるんだ？」

「モンマルトルの方にある」

「泊めてくれ」

「生憎と女専用だ」

「堅い事を言つなよ。これから一緒に仕事をするんだからよ」

「・・・分かった」

相棒は出来るなら泊めたくない、と顔で言っていたがそれでもOK
してくれた。

やはり持つべき者は友だなと変な事を思いながら俺は久し振りに再
会した相棒と乾杯した。

カサブランカを出たのは夜中の午前0時ジャスト。

外に出ると肌を打つような寒い風が俺の頬に当たる。

相棒は黒いトレンチコートにハンチング帽という出で立ちだった。

「ソフト帽じゃねえのか？」

トレンチコートと言えばソフト帽だと俺は思っていたが、相棒はハンチング帽と言う事に違和感を覚えたので訊ねた。

「生憎と女に持ってかれた」

「そうか」

ソフト帽を持って行くとは……随分と物好きな女だと思いがながら俺と相棒は夜のパリを歩き始めた。

歩く事2時間。

相棒の家があるモンマルトルに到着した。

その頃には酔いは冷めちまった。

ここはパリ1卑猥な町として知られている。

何せ到る所にアダルト店が立ち並んでいるんだからな。

映画のワンシーンにも使われた所だが、今では見る影もない。

「よくもまあ、こんな所に家を構えてられるな」

「こつこついう所の方が情報を得やすいんだよ」

こつこついった排泄所の中でも特に薄汚いと思われる場所にこそ情報と
いうのは流れて来る物だと相棒は言った。

ヨーロッパはそれほど詳しい方ではない俺にとっては勉強になる。

相棒の家はレンガ造りの2階建ての家だった。

だが一目で俺は第二次世界大戦で使用された家だと感じた。

こつこつ因果な商売をしていると自ずとその手の事に関しては分かる
んだよ。

良いかどうかは別の話だな。

それを相棒に言えば「その通りだ」と返ってきた。

家の中に入ると、思っていた以上に小奇麗だった。

「お前さんって綺麗好きだったか？」

「こつこつ見えて綺麗好きだ」

「その顔で綺麗好きとは・・・世界の七不思議に数えられるぜ」

「うるせえ」

相棒は軽く怒りながら中へと入って行きコーヒーを淹れ始めた。

「豆は何を使用しているんだ？」

「コロンビア産だ」

「コロンビア？あのハイテクゲリラからの送り物か？」

「違う。黄金の三角地帯に住む住民から送られた物だ」

黄金の三角地帯は黄金の三日月地帯と並ぶ麻薬の産地として知られているが今では三日月地帯の方にお株を奪われている。

その理由として政府が勝っている事と、日本人が麻薬の代わりに梅などを栽培する方法を教えた事にある。

同じ日本人として何処か誇らしいと思ってしまう。

何だか今日は豪く感傷的だな、と思いながら相棒が淹れてくれたコーヒーを口にする。

「ここってどんな仕掛けがあるんだ？」

「地下があり脱出口もある。未だに利用可能だ。それに第二次世界大戦でレジスタンスが地下で使用していた地図もある」

その地図によればパリ中の地下通路が記されていると言う。

「便利だな。それは」

「ああ。お陰でここ最近は何事にも巻き込まれずに済んでいる」

「その口ぶりから察するに、また要らぬ世話を焼いたのか？」

「いいや。向こうが勝手に世話を焼いているだけだ」

それはお前にも原因があるだろう、と俺は思いながらコーヒを飲んだ。

こいつの性格からして要らぬ厄介事を自ら呼ぶ。

しかも、自覚しながら直そうとしないのだから救いが無い。

「相手は分かっているのか？」

「フランス人の傭兵だ。名前はシャルル・ペス」

「ドゴールと犬をくっ付けたような名前だな」

「ああ。だが、本人は誇りとしている」

フランス人らしいな、と俺は思う。

俺が知る限りフランス人ほど自国に対して誇りを持つ輩は居ないし自分を過大評価もとい過大とも言えるほど売り込める奴は居ない。

傭兵が仕事にありつくには前の戦場で戦った戦友や何かしらの伝手でその組織に紹介してもらったりするのがある。

またはかなり古い未だに広告で暗号めいた文章で募集なんてのもある。

それ以外だと、要は最初だ。

最初は伝手や戦友も居ないからその国に行き、直談判で自分を売り込むしかない。

その点で優秀なのはフランス人だ。

フランス人は自分を売り込むのに過度とも言えるほど上手い。

逆に日本人は持って生まれた性だろう。

謙虚だ。

美徳ではあるが、こういう所では役に立たない。

だから、よくフランス人に仕事を取られる事も多々ある。

だがな、この過度な誇りが逆に仇にもなる。

俺が知っている奴には「フランスは一度も戦争で負けた事が無い」と豪語している奴が居る。

しかし、歴史の紐を解けばフランスは負け戦が多い。

百年戦争ではイギリスに劣勢だったし、第二次世界大戦ではナチスに負けてパリでお出迎えしただろ？

それなのに奴等はそれすら認めようとしていない。

ここまで来ると驕りだ。

よくもまあ、そこまで誇りが持てると思えるほどにな。

「で、そのフランス人がお前を怨んでいるのか？」

「ああ。ここを根城にしてフランスと公言している奴だ」

「へえ、実力は高いのか」

「いいや。敵前逃亡ばかりしていた奴だ」

ただ、自分を売り込む事にかけては天才とも言える奴らしいのだが、そんな事をしていれば直ぐに分かる。

だから、今では誰も相手にしていないらしい。

「逆に俺の方にオファーが来る」

組織の仲介人から戦友たちまで。

とにかくそいつと比べたら相棒の方が断然、仕事が舞い込んで来
らしくそいつに逆恨みされているようだ。

「モテ過ぎるのも問題だな」

「まったくだ。しかも、男にモテルなんて反吐が出る」

「確かにな」

俺は笑いながらコーヒを飲んだ。

それから7日までどう過ごすかについて相棒は説明を始めた。

「俺はこれから個人でも売ってってくれる商人と会う」

「武器商人にそんな奴が居るのか？」

武器商人と言えば、数百丁以上の武器や弾薬以外は取引しないと聞いていたが、違うのか？

「昔馴染みの奴だ。そいつが俺の為に調達してくれる」

これも外人部隊の伝手らしい。

「随分と外人部隊の伝手があるんだな」

「傭兵の間では外人部隊が多い。俺の仕事も大抵だが、外人部隊の誘いや推薦で受ける」

なるほど・・・それはそれで良いことだ。

「で、手持ちの武器は？」

「その本棚を横に動かしてみろ」

俺は背後にある本棚を言われるままに動かしてみた。

本棚はあっさりと横に動いた。

そしてその後ろには大量の銃器が隠されていた。

「シユマイザーMP40じゃねえか。それに9mmパラベラム弾の箱が3つに“ポテトマツシャー”まであるとは……………」

「本棚の後ろにはシユマイザーMP40に9mmパラベラム弾の箱が3つにポテトマツシャーという異名を持つM24型柄付手榴弾まであった。」

「ナチスから奪い取った奴だろう。ステンガンよりマシだ」

「確かにな。これは使えるのか？」

「ああ。持ち主が手入れしていたんだだろうな。新品同様だ」

大した持ち主だ、と俺は思いながら武器商人とは何時、会うのか訊ねた。

「今日から6日後。前日だ」

「何を注文したんだ？」

「注文はしていない。あいつ等が安く売ってくれるんだ。文句は言えない」

確かに、と俺は思いながら残りのコーヒーを飲み干した。

そして眠る事になるんだが、俺は台所で寝る羽目になった。

相棒の話によれば「ベッドは女と寝る為にある」らしく、俺も相棒

もソファーなどで寝る事になった訳だ。

それにしても何で台所何だ？と思うだろうが、俺が料理できるからという納得できて出来ない理由からだ。

まあ、しかし、それでも戦場で寝るよりはマシだな。

そんな事を思いながら俺は堅い床に身体を伏せて目を閉じた。

第二章：パン屋の仕事

翌日、俺は朝の5時に目を覚ました。

ソファーを見れば相棒はまだ寝ていた。

「やれやれ。お前はソファーで俺は堅い地面かよ」

居候させてもらった身とは言え、少し理不尽過ぎると思いつながら俺は冷蔵庫を開けてみた。

「卵、ベーコン、ジャガイモ・・・随分と買い揃えているな」

冷蔵庫の中には色々な材料が入れられていた。

どう考えても目の前で惰眠を貪っている相棒が買う訳が無い。

料理は出来ると聞いていたが、こいつの性格だ。

コンビニに売っているような弁当で料理とほざいているに違いない。

となれば女か。

俺はあの女以外にも泣かせたんだろうな、と思いつながら朝食の準備を始めた。

先ずベーコンをこんがり焼き上げて、そこへ卵を掛けた。

半熟でだ。

焼き終えたベーコンと卵を皿に置いて今度はジャガイモを熱くした鍋の中に放り込んで茹でた。

その間に相棒は目を覚ました。

「起きたか。相棒」

俺は皿をテーブルに置きながら相棒に話し掛けた。

「ああ。ふぁーあ。何を作ったんだ？」

「ベーコンと半熟卵、後は茹でたジャガイモだ」

「そうか。おっと時間だ」

相棒は腕に嵌めた洒落た時計を見てソファから立ち上がった。

「何の時間だ？」

「注文してるんだよ。パンと牛乳を」

それがこいつの朝飯らしい。

「冷蔵庫にこんだけ食材があるのに買い食いかよ。食材まで泣かせるなよ」

「昼と夜にはそれを使う予定だった」

相棒は欠伸をまたしながら枕の下から恋人を出した。

黒い銃身に武骨な外見が特徴で多分、会ったら挨拶代わりに頬を引っ叩かれそうな女、と思うだろう。

まあ、強ち間違いではない。

初対面だろうがお構いなしに挨拶として平手打ちを喰らわす女だからな。

しかし、惚れた男にはとことん尽くす、という良い女でもある。

コルトM1911A1軍用拳銃。

団栗みたいなズングリムツクリな45A・C・P弾を使用するオートマチック拳銃にしてモーゼルと並び軍用拳銃界の王と謳われる拳銃だ。

それが相棒の恋人だ。

未だに軍隊で使用されているが、今では極僅かだ。

理由として9mmの方がどちらかと言うと普及し始めたからだな。

それでもアメリカでは未だに民間用として高い人気を集めている。

逆にヨーロッパでは45口径は余り好かれていない。

だから、弾の補充が面倒だし足が付き易い。

相棒はシヨルダー・ホルスターにコルトを収めると左腋に吊るし、

その上から黒のジャケットを着込んだ。

それからドアの方に行くとピンポンと可愛らしいインターホンの音が鳴った。

相棒は壁に背を預けて「誰だ？」と訊ねた。

間違ってもドアの前で立つような真似はしない。

ドア越しにアサルトライフルを撃たれる、なんて事もあるからな。

「おじちゃん。開けてー」

ドア越しからこれまた可愛らしい声が聞こえてきた。

子供が届けに来たのか。

昔ならいざ知らずこんな時代でも子供が朝早く働くとは珍しいな。

そんな事を思いながら俺は茹で上がったジャガイモを鍋から取り出して皿に乗せて、傍らにバターを置いた。

そしてテーブルに乗せると相棒がバスケットを持って入って来た。

「子供が宅配人か？」

「ああ。ここでパン屋を営む姉妹の弟だ」

「こんな猥雑な町でパン屋を営むとはその姉妹に同情するぜ」

「まあ、あんな小さな子供の教育的には良くないからな」

幼い頃からこんな所で育つては危ないな、と俺は思いながら相棒が持って来たバスケットの中身を覗いてみた。

“お堅い御婦人”を思わせるフランスパンと、そのパンとは対照的に赤ん坊の手みたいに白い牛乳、それからラップに包まれたサラダが入っていた。

しかも、手紙付きだ。

「誰からだ？」

「パン屋の姉妹からだ」

相棒に断ってから手紙を読んできた。

『おはようございます。ムッシュ・ベルトラン”。毎日、私たちのパンを買って下さってありがとうございます』

綺麗な文字で書かれている文字。

書いた相手はきつと爽やかな女性だろうな、と俺は柄にもなく思った。

そしてベルトランという字である人物を思い出した。

“鎧を着た豚”なんていう酷い渾名を持った男だが、俺的にはこちらの方が合っている気がする。

“プロセリアンドの黒いブルドッグ”

このフランスでは名将と言えば“長靴を履いた猫”を画に描いたような男を浮かべると俺らの故郷では思うだろう。

だが、そうではない。

あんな奴より名将と呼べる男が居る。

ベルトラン・デュ・ゲ克蘭。

百年戦争でフランス軍として戦った英雄だ。

若い頃は馬上槍試合を好んでいた性格で、その容姿は醜く「レンヌからディナンまで一番醜い」とも言われていたらしい。

しかし、それでも2回も結婚した。

戦術的には真正面から戦うより夜戦、奇襲、焦土戦など敵が嫌がるような戦いをして劣勢を挽回してみせた。

国王からの信頼も厚く死んでからはフランス王家代々の者のみか眠るサン・ドニ教会の墓所に埋葬されるという待遇を受けたんだ。

話を戻すと、俺の相棒もベルトランみたいに「ブルドック」な顔だ。

そしてフランス外人部隊ではフランス名と国籍を与える事がある。

「お前さんのフランス名って、ベルトランか？」

「ああ。ベルトランだ」

こいつの上官だった男がこいつを見るなり「ベルトラン」と命名したらしい。

………良い趣味してるぜ。その上官は。

などと俺は思いながら手紙を読み続けた。

『何時もパンを買って下さるのは嬉しいですが何時も同じ物では飽きるでしょうし、たまには栄養ある物を食べて下さい』

こつという所を心配する時点で爽やかで尚且つ優しい、と決まったなと俺は思いながら更に手紙を読み続けた。

『だから、今日はサラダをサービスしておきますね』

なるほど……サラダはこいつの為か。

「その顔でどうやったら女を物に出来るのか是非とも教えて欲しいな」

「色男がほざくな」

相棒は鼻で嗤いながらマスキットからパンと牛乳、そしてサラダを出した。

俺から手紙を取り上げると引き出しの中に仕舞った。

しかし、一瞬だが何枚も重なっている所を見た。

「ぜんぶ取っているのか？」

「悪いか？」

いや、別に悪いとは思わないが……

随分と……可愛らしい所があるんだな、と俺は気色悪い事を思った。

そんな気色悪い事を考えるのを早々に止めて椅子に座った。

「で、これからの事だが今日はどうするんだ？」

まだ6日ある。

運ぶ人間もまだ来ないし武器もまだだ。

これからどうするのか俺は訊ねた。

「今日はこのパン屋の仕事だ」

仕事？

「何をするんだ？」

「パンをトラックで配達する」

相棒はベーコンと卵をナイフとフォークで綺麗に切り口元に運びながらぶっきら棒に答えた。

何でも姉妹の両親は既に死んでおり姉妹とも運転免許は持っていないらしい。

だが、車はあるしパンを買いたくても理由があり直接買えない客も居る。

そんな客たちの為にも配達をしなければならぬ。

アルバイトを雇う金も無いからどうしようかと困っているらしい。

そこへ天の助けとばかりにこいつが手伝いに行くらしい。

「優しいな」

「別に。いつもサービスしてくれるから借りを返すだけだ」

「……素直に姉妹を助ける為と言えないのか。」

天の邪鬼が。

俺は心の中で悪態を吐きながら、フランスパンを食べてみた。

「!!!な、何だ、これは……!?!」

口の中に広まり、頭を支配するのはライ麦畑だ。

そしてその畑の中には美しい女性が居た。

口元まで見える女性は僅かに笑ってみせた。

それから一気に口の中で弾けた。

こ、これは……………

「今まで食べて来たパンの中でも一番の味だ!!」

「…………料理の評論家になれ」

相棒は俺を見ながら嘆息してパンを飲み込んだ。

第三章：豊穡の女神

俺は相棒と共に家を出てモンマルトルを歩いていた。

格好はスーツではなく私服だ。

俺も相棒も黒で統一した格好で、良いかどうかと訊かれると分からないな。

そんな事を思いながら歩けば歩くほど思う。

『パリー猥雑な街』

これがモンマルトルの街を表した言葉だが、その通りだ。

ここは何処を歩いてもアダルト店が立ち並んでいて、何処を見てもそればかりだ。

お陰で目のやり場に困る時もある。

間違っても、こんな所で幼い子を育てようなどとは思わないし勧める気は欠片も無い。

「何で、こんな場所にパン屋を作ったんだ？」

「昔は芸術家たちが集まる街と言われていたからな。その時に建てたんだ」

それが今ではこんな街へと変わった……歴史って皮肉

だよな。

俺は煙草……ジタンを相棒から貰い吸った。

こいつはゴロワーズと並びフランスでは人気を二分する煙草なんだが、俺的には余り好みじゃない。

味が薄いというか、余り感じないのが理由だしどうも洒落た感じがして好きになれない。

だが、これしか相棒は持っていないからこれで我慢する。

煙草を吸いながら俺は街を見まわして口を開いた。

「しかし、幾ら両親が残した遺産の為とは言え……こんな街でよく暮らせるよな」

「金が無いからな。それに生まれ育った街……故郷だ。その故郷を出る、というのはやはり抵抗があるんだろう」

「豪く感傷的じゃねえか」

こいつなら生きる為なら故郷など捨ててしまえ、とか言いそうなのに。

「あの娘の瞳を見れば感傷的にもなる」

「……惚れたか？」

こいつがこんな言葉を言うから、強ち惚れているのか?と思った。

「惚れた所で俺がパン屋の主になれると思うか？」

こいつがパン屋の主・・・こんな顔で「いらっしゃいませ」なんて言われた時には子供が泣き出すな。

それを思うと・・・・・・・・

「無理だな」

「だろ？」

俺の言葉に相棒は頷いて見せると足を更に進めた。

パン屋はモンマルトルのピガール区にあった。

ここはパリー猥雑な歓楽街であり風俗街で有名だ。

モンマルトル全体がそうではないが、ここが余りに有名過ぎてモンマルトル＝猥雑と思われる、と相棒は言った。

金が無いとは言え、こんな所でパン屋を営むとは・・・・・・・・健気だな。

俺は煙草を携帯灰皿に捨てた。

道端に捨てるのは子供の教育上、良くないし俺らみたいな奴等は証拠品は髪の毛一本だろうと残さないのが鉄則なのさ。

だから、煙草にも細心の注意を払っている。

道を進んで行くと、アダルトな店が立ち並ぶ中で唯一まともな店が見えた。

些か古臭い感じは否めないが、それが逆に歴史を感じさせて味がある店だ。

2階建てで恐らく2階が居住となっているのだろう。

表はガラス張りでパンなどが並べられている。

内装も清潔感で溢れているから店としては合格点だ。

名前はフランス語で「黒猫」を意味する Le Chat Noir だった。

黒猫が店名とは昔は芸術家が集まる街と言われた所から取っているのだろうな、と俺は思った。

今は猥雑な街と言われているが、昔は芸術家たちが集まる街だった。

それを思わせる店名に俺は心惹かれた。

窓ガラス越しには焼き立てのパンが並べられていたが、客は居なかった。

「繁盛していないのか？」

あれだけ美味しいパンなら行列が出来ても可笑しくないのに……

「味は美味い。それは確認済みだろ？」

相棒は確認するように訊いてきた。

確かに、あの味なら遠い所からだろうと足を俺は運んでも買いに
来るだろう。

それだけ美味かったんだ。

「だが、ここを見れば幼い子を連れて来れる場所ではないのは明白」
相棒の言葉を聞いて俺は納得した。

・・・なるほどね。

こんな所では進んで買いに来れる訳ないな。

それに今は昼間だ。

ここは夜こそ商売が出来るし繁盛する。

だから、客は見えないし来ない訳だ。

俺は納得したから次の事を質問した。

「で、家族は？」

「姉、妹、弟の3人暮らした」

3人でこんな所に住んでいるとは……いやはや、何とも。

「さあて、行くか」

相棒は黒のハンチング帽を深く被り直すとサングラスまで掛けた。

「強盗でもやる気か？」

これでスカーフかマスクでもすれば立派な強盗の出来上がりだ。

「違う。眩しいからサングラスはしたただけだ」

相棒の言葉を聞いてもサツパリ分からなかったが、直ぐに俺は理解した。

店のドアを開けると、鈴が鳴った。

カサブランカの鈴よりも洒落ており何処か幼い音色に聞こえた。

そして中に入ると……

「いらっしゃいませ。ようこそ、ル・シャ・ノワールへ」

店内から明るい声が響くと同時に目の前が光に包まれた。

「な、何だ！！この光は！？」

閃光弾か？

いや、閃光弾なら筒が見えた筈だし、爆発する音だった筈だ。

それがしない。

どう言う事だ？

俺は片手で顔を覆いながらも隙間を作り覗いてみた。

光に包まれていたのは、女性だった。

純白色のロングスカートに青を薄めた水色のブラウスの格好で、その上からビブ・エプロンをしていた。

ブラウスの袖は腕の関節まで託し上げており白い肌が見えた。

髪の色は神々しく育てられた小麦のように金色に輝いておりそれを頭の上で纏めていた。

だが、生き生きとしており淡い水色の瞳の色もまた生き生きとしていた。

芸術家は永遠に美を追求していると誰かが言っていたが、その芸術家たちが追求して行き着いたのが、目の前に居る。

そんな女性だった。

『名のある芸術家たちが手を入れて長い年月を掛けて完成させた清楚な美人の像だな』

そしてもし、題名を与えるなら『豊穡の女神』という題名が相応しい。

この題名が俺の中に浮かんだ。

まさに目の前に居る女性は、この言葉が一番合うと思う。

「相変わらず神々しくてまともに見れないぜ」

相棒が何で帽子を深く被りサングラスをしたのか理解できた。

こんな光り輝いていては直視できない。

だから、サングラスをしたんだ。

「ベルトランさんっ」

豊穡の女神が俺・・・もとい相棒に近付いてきた。

近づいて来て余計に眩しいが、何とか見えるようになった。

改めて見るが年齢は俺より年下・・・まだ20にもなっていない。

「今日は連れも一緒だ」

相棒は俺を親指で指すと俺を紹介した。

「こいつはシヨウ・ローランド。俺の仕事仲間の仕事では俺より先輩に当たる」

「ベルトランさんの仕事と言うとビジネスマンですか？」

ビジネスマン……こいつが？

幾ら何でもこの男がビジネスマンなんて有り得ない。

いや、ビジネスマンって言うなら他にもあるか。

かなり危ないビジネスマンだが。

というか、一体どんな風に自分を説明しているのか知りたい。

「今回、俺と同じくパリ勤務になってな。俺がここの仕事をすると言ったら是非ともあんな美味しいパンを作れるか教えてくれ、と言って聞かないんだ」

おいおい、俺を置いて勝手に話を進めてやがる！！

俺は急いで止めようとしたが、相棒は「黙ってる」と眼で言ってきた。

眼を見て、ここは仕方無いと俺は直ぐに悟り自己紹介を始めた。

「初めまして。俺……いえ、私はショウ・ローランドと言います。てつ……ベルトランさんとは同じビジネスマンをしています。今回、パリ勤務となりました新しい住まいを見つけるまでベルトランさんの家に住まわせて頂いております」

自分でもよく舌が回るな、と思えるほど俺は自己紹介をした。

そして言葉遣いにも細心の注意を払った。

「そうですか。私は、ここル・シャ・ノワールの店主でソニア・クリスチノフです」

年齢は19歳です、と名乗った。

19・・・まだ高校を卒業したばかりじゃねえか。

19で妹と弟を育てながらよく店を切り盛り出来るな、と俺は感心した。

そしてこんな美人に惚れられる相棒を見ながら、「どつやったらモテルのか知りたい」と改めて思った。

第四章：パンの配達

俺と相棒は店の奥にある厨房へと通された。

先ず自己紹介をするらしい。

妹と弟は学校で居ないからソニア嬢だけだが。

「改めて自己紹介をします。私はソニア・クリスチノフです」

年齢は19歳で高校は出ていない。

両親が15の時に・・・天に召されたから高校進学を諦めて働いているらしい。

「本当は演劇の学校に行きたかったんですよ」

幼い頃からオペラ座の舞台に立ちたいという夢があったらしい。

この子の容姿ならオペラ座の舞台に立つのも夢ではないだろうに・・・

だが、両親が残したパン屋の為、幼い妹と弟の為に夢を諦めたらしい。

そして借金もあるためパン屋の仕事をやる傍らで夜はBARなどの仕事を毎日、身をすり減らしながら金を稼いでいるらしい。

自己犠牲なんて一種の自己満足と置いていたが彼女を見てみると・・・

・滑稽な程に切なくなる。

……柄じゃねえが、思いたくなる。

妹は15歳で弟はまだ10歳だと言う。

「その若さで兄弟を育てるのは大変でしょうね」

俺は彼女を見ながらその苦勞を勞った。

「いいえ。妹と弟の為なら苦勞とは思いません」

ソニア嬢は泣き言を言わずに笑顔で答えた。

「……立派だね」

俺はソニア嬢の姿を見て、本当に美しい女性とは自分の足で立っている女の事だと思った。

おんぶに抱っこなんて言う我儘な姫様よりこちらの方が断然、美しいと俺は断言できる。

その横で相棒は壁に背を預けて腕を組んでいた。

壁に背を預けるのは一種の癖というか習慣だろうな。

まあ、俺も人の事は言えないが。

「あの、ベルトランさん……」

ソニア嬢が相棒を上目遣いで見た。

あんな上目遣いで見られたら男は……ワン・シヨット・キルされるな。

相棒はサングラスを外し、格好つけの積りかシャツに挟んでいた。

……チヨイ悪親父の積りか。

悪いが似合わないぞ。

と俺は思いながら相棒を見た。

「何だ？」

相棒はぶっきら棒な口調でソニア嬢に訊ねた。

「あの、今日のサラダはどうでしたか？」

「美味かった」

一言だけ述べる相棒。

もっと「味がサツパリしていて美味しかった」とか「塩加減が抜群だ」とか何か為になる感想を言えば良いのに、何でこんなぶっきら棒な感想しか言えないんだよ、と自分の事のように怒りを覚えた。

だが、こんな身も蓋も無い感想だがソニア嬢は水を貰い生き返った花のように咲き誇った。

・・・眩しいぜ。

俺は目を逸らした。

そんな俺を尻目に相棒はソニア嬢に配達予定のパンは何処かと訊ねた。

「もう既に車に入れてあります」

ベルトランさんにはお手数を掛けているので、と彼女は言った。

清楚で美人だけでなく気が利くな、と俺は思った。

「よし、それじゃ行って来る。ルートは何時も通りで良いのか？」

「はい」

「分かった。行くぞ、シヨウ」

「ああ」

俺はソニア嬢に一礼してル・シャ・ノワールの裏口から出た。

そこには中古品のルノー。カングーがあった。

乗用モデルはカングーだが、商用のモデルはカングー・エクスペレスと呼ぶ。

色は白で真新しい印象を受けるほど手入れがされている。

「随分と手入れがされているね」

俺はカンゲー・エクスプレスを見まわしてソニア嬢に言った。

「ベルトランさんが何時も手入れをしてくれているんです」

「・・・意外と器用なんだな」

「うるせえ」

相棒は些か怒りながら鍵を貰い、助手席に乗り込んだ。

つて、おい。俺が運転するのによ。

「早くしろ」

相棒は俺を急かしてきた。

俺は仕方無く運転席に乗り込む。

「では、いってらっしゃい」

ソニア嬢が俺らに頭を下げた。

「・・・行ってきます」

「ああ」

相棒は素っ気なく頷くと俺に出せ、と言った。

俺はクラッチを踏んでからキーを回しエンジンを掛けた。

そしてギア1・・・ロー・ギアに入れてゆっくりと発進させた。

「お前、もう少し愛想良くしたらどうだ？」

あんなに向こうは笑顔で挨拶して気を利かせているのに。

「これでも愛想よくしているんだがな」

「それで愛想よくしてる積りなら、無表情も笑顔に入る」

まあ、元から感情や表情に波風が無いからあれでもこいつなりに愛想が良かったのかもしれないが。

「で、先ず行く所は？」

「そこを右に曲がれ。そして真っ直ぐ行き信号を3つ渡った所を左に曲がれ」

そこが最初の場所らしい。

「あいよ、お前さん」

俺はハンドルをゆっくりと切り右に曲がった。

しかし、ヨーロッパの道路ってのはこんな狭くて角が沢山あるのか？と俺は思った。

こんな狭くて見通しが悪い所を車で走るなど俺的には怖い。

別に死ぬ可能性があるからではない。

戦場でも無いのに人様の命を奪う可能性があるから怖いんだ。

言われた通り右に曲がり直つ直ぐ進むが、自転車が直ぐ横を通り過ぎて後ろに車があるのに構わず右へと行った。

慌ててブレーキを踏んだ。

お陰で前のめりになった。

それなのに自転車は気にせず走り続ける。

「マナーがなつてない」

後ろ姿で判断すればまだ14、5歳の餓鬼だ。

未成年だが、あれで事故でも起こしたら俺らが悪い。

まったく酷い話だ。

「そのまま走れ」

相棒はハンチング帽を被り直して煙草に火を点けて蒸かし始めた。

そして窓ガラスを開けた。

何かやる積りだ、と俺は瞬時に悟った。

車を走らせていると奴は煙草のフィルターを残し、まだ燃えている煙草を器用に外すと餓鬼のシャツに放り投げた。

奴はあぢつ！！と悲鳴を上げて自転車から転げ落ちて壁に頭を打ち付けた。

だが、大した傷じゃない。

「熱めのお灸だ」

相棒はふんっ、と鼻を鳴らして新たな煙草を銜えてみせた。

「流石は人生の先輩。後輩に対して熱いお灸をしましたね？」

俺はふざけた口調で相棒を褒めた。

「マナーを守れない餓鬼は大人になっても最低限のマナーを守れない。だから、やったままでだ」

相棒は口端を上げて笑ってみせた。

完璧に悪役の顔だが、今は正義の味方に見えるぜ。

そして俺は少し速度を上げる為に、クラッチを踏みギアを2・・・セカンド・ギアに入れ速度を上げてから3・・・サード・ギアに入れた。

『・・・人様に迷惑を掛けると痛い目を見るんだぜ？坊や』

俺は顔も名も知らない餓鬼に人生の厳しさを言ってやった。

そして信号を3つ真つ直ぐ進んでから左に曲がると小さな建物が見えた。

「孤児院？」

名前を見て俺は首を傾げた。

「ソニアは・・・孤児だった」

天に召された両親は子供が出来ない事を思い悩んでいたが、念願の我が子を授かった。

しかし、難産で産まれた子は・・・息を引き取ったが母親は知らなかった。

それで夫は孤児院から赤子を引き取り、息を引き取った子の代わりに我が子として育てたらしい。

だが、そこから妹、弟が産まれた。

普通なら血の繋がっていない子より血の繋がった子を愛する筈だが、差別なく育てたらしい。

「・・・善人は若死にし、悪人は長生きするというが・・・本当だな」

俺らみたいに人を殺して金を貰う奴等が生きて、そんな人間が早死にする。

酷い話だ。

「それが現実だ。さあ、もう直ぐ着くんだ。小便漏らした餓鬼みたいな顔は止める」

あそこは笑顔で接するんだ、と相棒は言った。

「お前が笑顔になったら・・・子供たちは泣くぞ」

こんな男が笑顔で接してきたら遠慮したいし、半径50メートル以内には近づいて欲しくない。

「それだけ毒を吐けるなら十分だな」

相棒は笑いながら煙草を素手で揉み消して灰皿に捨てた。

ルノーを駐車場に停めて降りると、建物から子供たちが駆け寄って来た。

「ブルドック小父さん!!」

一人の子が相棒をブルドック小父さんと呼んだ。

「こら、俺はベルトランという名前があるんだ。ブルドックなんて呼ぶな」

相棒は近づいて来た子を軽く叱り付けたが、子供は怯えもせず、「だって顔がブルドックじゃん」と言った。

「子供は正直だな」

俺はしみじみ思いつつ、相棒に笑った。

「小父ちゃん、この人相が悪そうなおっさん誰？」

子供は俺を指差して相棒に訊いてきた。

人相が悪そうなおっさんって……

「子供は正直だな？相棒よ」

俺がさっき言ったばかりの言葉を相棒は言い返してきた。

「大人気ないぜ？大の男が言い返すなんて」

「青筋立っている奴に言えるのか？」

ぐっ……

俺は言葉に詰まった。

そしてあっという間に子供たちに囲まれてしまった。

わあわあ、と声を上げて俺らのズボンを引っ張ったりする子供たち。

「こらこら、貴方達。パン屋さんに迷惑かけちゃ駄目ですよ？」

子供たちを戒めたのは、ここの保母さんだろうと思われる女性だった。

「何時もすいませんね。ベルトランさん」

女性は相棒を見て軽く苦笑しながら頭を下げた。

「気にしてない。さあ、お前たち今日もパンを持って来たぞ？ちやんと手を洗って食材に感謝して食べるよ？」

はい、と子供たちは頷いて相棒と俺はパンを出して一人ずつ手渡しした。

車にあったパンの半分が子供たちに持って行かれた。

「これ、金は取るのか？」

などと無粋な事を俺は訊いてしまった。

「取る訳ないだろ」

だよな。

俺は無粋過ぎて尚且つ訊かなくても解かる事を敢えて訊いてしまった。

そんな自分に悪態を吐きながら、車へと乗り込む。

相棒の方は女性に何度も礼を言われていたが、相変わらずの無愛想な態度で受け答えをして乗り込んで来た。

「さあ、次は別の場所だ」

行け、と言われた俺はエンジンを掛けて走らせた。

第五章：フランスNO.1の傭兵

俺と相棒は孤児院からそれほど離れていない場所に来ていた。

ここは極一般的な住宅地で子持ちが多い家が多い。

ここでは販売をする。

「あそこに買いには行けない。だが、あのパンは欲しい奴等が多いんだよ」

だから、電話で届けさせるって訳か。

俺はなるほど、と頷きながらジタンを銜えた。

「所で、リヒテンシュタイン公国まで行く足……車はあるのか？」

まさか、電車やヒッチハイクで行く訳ないだろう、と思っていたが
敢えて訊いた。

「いいや。車も向こうが用意する」

何から何まで他人任せだな。

まあ、自分の車を使うよりそちらの方が、足が付き難いから良いが。

「車の方は“私は回る”を注文した」

私は回る……ボルボか。

「まあ、あれは頑丈だからな」

ボルボは世界の車メーカーの中でも頑丈さはピカイチだ。

俺は乗った事が無い。

だが、その噂は聞いているから信用できる。

そして住宅地へと到着した。

相棒はクラクションを1回だけ押せ、と俺に言ってきた。

俺は言われた通りクラクションを1階だけ押した。

するとドアと言うドアが開いて御婦人方が出て来た。

まるで、待ち伏せされた気分だ。

何せ御婦人方の眼は殺気立って居るんだからな。

「さあ、仕事だ。仕事」

相棒はドアを開けて降りた。

俺もそれに倣い、降りる。

そしてパンを取り出すと御婦人方がバア！！と駆け寄って来た。

まるで銃剣突撃みたいに気合いが入った眼つきで一瞬だが……

逃げたいと思つた程に。

あっという間に俺らは囲まれた。

本の数秒で囲まれたから、戦場なら二人とも殺されている可能性が高い。

御婦人方は相棒にパンをくれ、と言ひ相棒は一列に並んでくれ、と頼んだ。

するとこれまたバア！！と音を立てて一列に並んだ。

……軍隊経験者か？

などと俺は思いながら相棒と共にパンを売り始めた。

パンを買つた御婦人方は金を払うと直ぐに家の中へと戻って行った。

「……パリの女つてのは、ああいうもんなのか？」

「何を言つてんだよ。まだ序の口だ」

あれで序の口？

まだあるのかよ………

俺はあれで序の口と言われて、些か疲れを感じた。

戦場に居るより何だか疲れる感じだった。

それからまた別の場所に向かったが……ここは更に凄かった。

何せ奥様方が我先にと飛び出して来て俺らを取り囲んだのだから。

強烈な香水が鼻を突くし、やたら身体を触られて嫌な事この上ないが愛想良くした。

相棒はぶつきら棒な態度ながら、それが逆に奥様方には受けるのか色々と贈り物を渡されている。

もはや慣れたのだろう、という顔だった。

地獄のような……ある意味、戦場より地獄だった場所から何とか脱出する事に成功した俺は心底、疲れ果てていた。

だから、今は相棒が代わりにハンドルを握っている。

「おっと、もう時間か」

車の内部に取り付けられたデジタル時計は既に午前12時になっていた。

「どれ、近くの“カフェ”で飯でも取るか」

俺は疲れ切った顔で頷いた。

カフェとはパリ周辺ではカフェの事を言うらしい。

まあ、こんな知っても余り為にならない事は頭の片隅にでも放っておく。

車を路上に停めて近くのカフェに腰を降ろした俺と相棒はコーヒーを頼んだ。

と言つてもフランスでコーヒーを頼むとエスプレッソが出るから、コーヒーを頼みたいなら“カフェ・アロンジエ”と言わなければならない。

俺も相棒もコーヒー党だが、気分を変えてエスプレッソにした。

数分して盆を持った男性の給仕 “ギャルソン” が現れテーブルに焼き立てのクロワッサンとエスプレッソを置き、更にジャムとマーガリンを添え付けた。

相棒は幾ばくかチップを渡してから何も付けずに食べたが、俺は先にエスプレッソを頂いた。

風味が濃くて何時も飲んでいるコーヒーとは違う味わいが印象的だ。

外で食べている為、些か寒い事は否めないが然して問題ではない。

相棒はクロワッサンを食べ終えてからエスプレッソを飲もうとしたが、そのカップに煙草が放り投げられた。

「てめえみたいなブルドックが、パリの飲物を口にするんじゃないよ」

俺は相棒の斜め横に立った奴を見た。

年齢は相棒と同じ位だが容姿は金髪に碧眼と一般的な容姿だったが、

顔は歪んでいて1度見たら忘れたい顔だった。

懐が僅かに膨らんでいるから拳銃を所持しているのも分かる。

「あんだ、誰だい？」

俺は男に訊ねると奴は鼻で嗤ってきた。

「てめえみたいな餓鬼に名乗るのもおこがましいが、冥土の土産だ。敢えて答えてやろう。その耳をかつぽじってよおく聞きやがれ！」

俺は誇り高いんだ、と付け足す男に俺は心底呆れ果てた。

それにこの言葉遣いは……………

『この世の土産だ。目ん玉をくらってよおつく拝みやがれ……………』

などと独自の言い回しをして右肩に彫られた桜吹雪を見せる某お奉行兼遊び人の言葉遣いと瓜二つだ。

まさか、この男が日本の時代劇を見る筈も無いから自分で考えたんだろうな、と俺は思う。

「俺の名はシャルル・ペス。シャルル・ペスだ！！フランスでNO.1の傭兵だ」

「……………」

どう見てもNO.1という顔つきじゃない。

顔で判断するのはどうかと思うだろうが、自分でNO・1と公言する奴ほど下から数えた方が速い奴らだ。

その上、自分でこつも公衆の真ん前で傭兵だと公言する馬鹿丸出し。

こんな奴がフランスのNO・1って言うならフランスの傭兵界も底が浅いと思う。

「何の用だ？せつかくのエスプレッソを台無しにしゃがって」

相棒は到って冷静な口調で犬みたいな名前を持つ傲岸不遜でナルシストな傭兵に訊ねた。

「言った筈だ。ここは俺の縄張りだ。てめえみたいな東洋人が来るな」

人種差別を惜しみも無く曝け出すシャルル・ペス・・・もうただのペス・・・犬の名前で呼んで良い。

この男は俺のエスプレッソにまで唾を吐いて来やがった。

・・・食べ物を粗末にしゃがって。

俺はカップを置いた。

「お前さんは俺の母親か？それともボスか？いいや違う。どちらでもない」

そんな奴が俺に命令できるのか？と相棒は訊ねた。

「耳が聞こえないのか？ここは俺の縄張りだ、と言っただ」

「縄張りなんて餓鬼みたいな事を言いやがって。俺らに縄張りも国境も無い。少しは勉強しろ」

「減らない口だな。その口を閉じさせてやっても良いんだぜ？」

懐に手を伸ばすペス。

ここまで馬鹿とは……………

こんな所で拳銃を抜けば直ぐに鬼より怖い警察が来るのを知らないのか？と俺は思う。

だが、それならそれで良い。

こんな男がどうなろうと俺の知った事ではない。

「やれるもんならやってみな。逆に俺が裁縫針で縫ってやるよ」

これに俺は吹いた。

相棒が裁縫針……………似合わねえ……………

だが、犬みたいな名前を持つ方はそうではなかった。

「……………人が下手に出れば付け上がりやがって」

懐から今度こそ拳銃を出そうとしたが、それを無視して相棒は立ち

上がった。

「ここは戦場じゃない。もし、やれば忽ち警官が来るぜ？」

また豚箱で“オカマ”にされたいのか？と相棒は言った。

されたいのか？・・・オカマに・・・誰かの“愛人”にされたか。

それとも“公衆便所”にでもされたか？

などと俺は思った。

そして相棒は俺に合図して金を置き、車に戻り始めた。

俺もそれに続く。

「・・・・・・・・てめえは必ず殺してやる」

「お前に出来るなら、な」

相棒と俺は喚き立てる煩い犬を放って車に乗り込み、次の配達場所へと向かった。

やれやれ、面倒な奴だと俺は思った。

第六章：懐かしい言葉

俺と相棒はその日の配達を終えて、ル・シャ・ノワールに着いたのは夕方になってからだ。

車を停めて降りた俺たちは裏口から中に入った。

「あ、お帰りなさい。ベルトランさん」

ソニア嬢が相棒を見て小走りで近寄って来た。

「配達が終わった。これが代金だ」

相棒は金をソニア嬢に渡したが・・・パンの売上ではない金も渡した。

あの香水の香りが強烈な奥様方は相棒に高そうな物を渡した。

それを相棒は帰ってくる間に質屋に行き、全部を換金した。

渡してきた奥様方に失礼では？と思うが、貰った物はもうこちらの物だ。

どう扱おうとこちらの勝手、と思えばそうでもない。

相棒から金を貰ったソニア嬢は「こんなに売れたんですか？」と訊ねてきた。

やはり、多過ぎたか？と俺は感じた。

「ああ。相棒の営業が良くてな」

おいおい。俺を出汁にするな!!

と思うが、ソニア嬢は俺に「ありがとうございます」と礼を述べて来た。

「い、いえ・・・あんなに美味しいパンならきつと売れると思いましたが。良い商品は沢山売って儲けないといけないので」

営業マンらしい言葉を俺は言った。

「そうですね。あの、ベルトランさん。今日の夕飯は、どうですか？」

「どうする？相棒」

何で俺にその質問を投げて来る。

と思うが俺は「お邪魔でなければ・・・」と取り敢えず御馳走になる、という意味合いを含めた言葉を口にした。

「では、直ぐに作ります」

ソニア嬢は可憐な笑顔を見せてきた。

ふと外を見れば、好色な笑みを浮かべた狼共が居た。

「・・・少し外に出て来る」

相棒は俺にそう告げると、堂々と表から外に出て行った。

あーあ、あいつら死ぬな。

俺はどうせ死ぬなら男らしく死ぬよ？と内心で言いながら、煙草を吸って良いかソニア嬢の元へ行こうとした。

だが、ドアが開く音がしてチラリと視線を向けた。

「ただいま・・・って、どなたですか？」

ドアを開けて中に入って来たのはソニア嬢より若干年下の女の子だった。

年齢は、14、5歳でソニア嬢と同じ髪の毛と瞳をしている。

だが、勝気な色が見え隠れしているから性格はソニア嬢より現代風と思う。

服装は白いブラウスの上に黒の肩の所で切られた女物のベストを着ていた。

スカートの方は・・・まあ、現代の女子なら制服を規定通り着ない。

普通なら膝丈だが、明らかに膝より上のミニだ。

どうせ、巻いて上げたんだろうなと思う。

スカートから見える足は健康そのもの。

同年代の餓鬼なら舐め回すくらい発育が良い。

俺から言わせればまだ青い。

悪く言うなら小便臭い。

「お兄ちゃん、だれ？」

女の子の影から出て来たのは、黒髪の男の子。

年齢は8、9歳くらいだ。

こちらは私服だ。

クリクリ、とした目がチャージングでもっと歳を取れば様になるだろうな。

「こんにちは。俺はショウ。君が朝、パンと牛乳を届けてくれたベルトランさんの家に居候している者だよ」

「おじちゃんの友達？」

「友達・・・んー、まあ、そう取って良いかな？」

俺は男の子に視線を合わせて膝を着いて答えた。

「ふうん。ねえ、おじちゃんは？」

「ベルトランなら外に居るよ。ちょっと用があると行っていたね」

「貴方、ベルトランさんの友達だったんですか」

女の子が俺を上から見下して訊ねてきた。

「ええ。そういう貴方はソニアさんの妹さん、ですよね?」

裏口から入るのだから、親類と見て良いだろうと俺は思う。

「はい。ソニアの妹でクラリス、と言います」

クラリス・・・ソニア嬢と同じく可憐な名前だ。

「そして、こっちが弟のベレンナです」

「初めまして。ベレンナです」

男の子、ベレンナはキチンと礼儀正しく一礼した。

良い子だ・・・何処かの礼儀知らずで熱い灸をやられた若造よりも
将来有望だな、と俺は思う。

「俺はショウ・ローランド。ベルトランより先にビジネスマンとな
ったが、歳では向こうの方が上だ。で、さっそくだけど煙草は何処
で吸って良い?」

「外で吸うなら何処でも」

俺はそれに頷くと外に出た。

そしてジタンを銜えて一服する。

「・・・やっぱり、愛用の煙草が欲しいぜ」

今度、何処かで探そうと俺は思った。

そこへ顔をボコボコにされた男が数人ほど見えた。

その後を追うのは言わずと知れたブルドックことベルトラン。

「おいおい、程々にしておけよ？」

もう直ぐ飯の時間だ、と俺は相棒に言った。

「安心しろ。飯の時間には間に合わせる」

相棒はそう答えると、男達を片っ端から叩きのめした。

やれやれ・・・顔に似合わずナイトでいらっしやる事で・・・

どう見ても姫を攫う黒騎士・・・悪党なのに、それが本当は姫を護る正義の騎士とは・・・

「世の中って複雑だよな」

と俺は一人で言いジタンの煙を空に向けて吐いた。

それから時間は過ぎて行き、午後7時。

飯の時間になった。

それまで俺は外で相棒を待っていた。

闇の中から相棒が現れた。

「片付けたのか？」

「ああ。全員、セー又川に放り込んだ」

今のセー又川は寒いだろうに……………

「随分と派手にやったな」

「あいつ等が俺の癪に障ったからだ」

淡々と答えた相棒は埃をパンパン、と叩いてからドアを開けて中に入る。

俺もそれに続いた。

2階に通じる階段を登って行くとテーブルに料理が並べられていた。

「お帰りなさい。ベルトランさん、シヨウウさん」

ソニア嬢が相棒と俺に「お帰り」と言った。

お帰り……………か。

懐かしい言葉だ。

俺と相棒は「ただいま」と返した。

そして手を洗いテーブルに腰を降ろす。

「ソフィ。悪いが、後もう少ししたら配達が出来ない」

相棒は食事をしながらソニア嬢をソフィと呼び、配達が出来ない事を伝えた。

ソフィは恐らくミドル・ネームか何かだろう、と俺は思いながら食事を進める。

「何処かに行くのですか？」

「友人を送り届けるんだ。まあ、4日くらいだ。それが終わればまた来る」

「分かりました。でも、急いで帰って来ないで下さいね？事故などしないように」

「安心しろ。ちゃんと安全運転で戻って来る」

お土産を持ってな、と相棒は付け足した。

まるで美女と野獣のカップルだ。

まあ、それはそれで良いが。

「ねえ、おじちゃん。何処に行くの？」

ベレンナ坊が相棒に行き先を訊ねる。

「さあて、何処だろうな？友人がアメリカから来るまで分からないんだ」

「ふうん」

「どうかしたか？」

「ううん。ただ、おじちゃん居ないと寂しいな、と思ったの」

「男の子が寂しいなんて人前で言うてはいけないぞ。男はどんな時があるうと、女の子を護らなくてはならないんだ」

俺とシヨウウが居なくなれば、お前がお姉さんを護るんだぞ？と相棒は言った。

「でも、僕、喧嘩・・・強くないし・・・」

「喧嘩が弱いならシヨウウに習え。こいつは喧嘩に強いぞ」

「おい、俺に教師をやれと言うのか？」

喧嘩・・・まあ、戦う事に代わりはないから相手を再起不能にする程度の事を教えやれなくもないが・・・

「シヨウウさん。武道の心得があるのですか？」

クラリス嬢が俺に話し掛けて来る。

「え？ま、まあ……………」

「それなら私にも教えて下さい。何でも良いんです」

最近は何騒だから自分も学校で武道……柔道と合気道を習っているらしい。

ヨーロッパは柔道が盛んと聞いていたが、こんな子まで習っているとは恐れ入る。

その上、合気道まで習っているとは……こりゃ一歩間違えれば凄いい女性になるな。

「でも、学校で習う柔道は規則で縛られた柔道であり要は競技用です」

それを痛感している、とクラリス嬢は語った。

合気道はそうでもないが、やはりあくまで受け身という事も考えないと疑問を抱かずにはいられないのだろう。

まあ、今時の武道なんて競技用で礼儀作法が主流だからな。

柔道も昔は違うが、今はどうかな？

しかし、俺たちは違う。

相手を確実に不能にし、規則など無い問答無用の本当の武道を身に付けている。

それを反射的にクラリス嬢は分かったのか？

分かった、と言うのなら凄い事だ。

「お願いです。ムツシュ・シヨウ。私とベレンナに教えて下さい」

「まあ、護身術程度なら教えられますが………」

「教えてやれよ。そのお嬢ちゃんは言い出したら聞かないんだ」

改めてクラリス嬢を見るが、正しくその通りだ。

了承するまで頼み続ける、と目が言っていた。

「分かりました。ただし、厳しいですよ？」

「構いません。ねえ、ベレンナ？」

「う、うん」

ベレンナ坊は姉に押される形で頷いた。

『こりや武道だけでなく、男としても鍛えた方が良かったかもな』

俺はそんな事を思いながら相棒を些か怨めしく思った。

第七章：武器調達

その日、俺と相棒は夜9時にソニア嬢の家を後にした。

「たつく。人に教師役を押し付けるなんて」

「そう言うな。俺より歳が近いお前の方が合うと思ったんだよ」

「口が達者だな？」

などと俺は皮肉を込めて言ってやった。

夜9時。

そろそろ街も活気づいてきた。

「ねえ、ブルドックさん。その子誰？」

一人の商売女が相棒に寄り掛かりながら俺を指さした。

「俺の相棒だ」

ぶつきら棒に相棒は答えると商売女から離れた。

「ねえ、今夜どう？」

「悪いが朝が早いんだ。また今度な」

商売女は「絶対よ？」と何度言ったか分からない言葉を言い次の客

に声を掛けていった。

「やれやれ。こんなだからパリー猥雑と言われるんだ」

「まあ、俺らから言わせれば体の良い隠れ蓑だ」

確かに、と俺は頷きながら家へと向かい続ける。

家まで後もう少しという所で足を止めた。

「……そろそろ出て来たらどうだ？」

相棒は暗い路地に声を掛けた。

俺も相棒も誰かに付けられている、という事は知っていた。

知っていたが何もしてこないの放っておいたが、流石に家まで付いて来るなんてのはお断りだ。

出て来たのはカフェで相棒のエスプレッソに煙草を放り投げて台無しにしたシャルル・ペスだ。

「何の用だ？さつきから俺らの後を付いて来やがって」

「てめえが俺の弟分を殴ったからだ」

弟分？

こんな犬みたいの名前を持つ男に弟分が居るのか？と俺は疑問に思った。

ペスの後ろから相棒が叩きのめした男達が出て来た。

「お前の弟分だったのか。流石は犬のような名を持つ傭兵だな。何振り構わず下の銃を暴発させるのは」

俺はジタンを口に銜えながら言った。

「餓鬼はすっ込んでろ。俺は、この男と話をしているんだ」

「餓鬼って名前じゃねえよ。それに相棒に手を出そうとしている奴は俺の敵でもある」

「……そうかい。なら、てめえもこの男と一緒に叩きのめしてやる」

「穏やかじゃないね。何時からパリの紳士は直ぐに拳銃を抜くようになったんだ？」

「黙れつ。てめえらみたいな東洋人がこのパリでデカイ面しやがって!!」

ペスは懐から銃を抜こうとした。

そこへ俺は火を点けたばかりのジタンを投げた。

そして二人で突っ込む。

一気に距離を縮めて俺はペスの脇腹に拳を連続で撃ち込んだ。

相棒の方は弟分と言われる野郎どもを片っ端から叩きのめした。

さつきより苛烈に、な。

物の5分ばかりで片付けた俺らは縄で縛りあげてセー又川に放り込んだ。

「良い掃除が出来たぜ」

「まったくだ。さあて寝るか」

「そうだな」

俺らは家へと戻り、落ちて火が消えた煙草を持ち中に入った。

捨て煙草は衛生上、良くないからな？

家の中に戻った俺らは酒を飲んでから寝た。

そして次の朝は昨夜と同じ通りル・シャ・ノワールに行き配達をした。

それからクラリス嬢とベルナンテ坊の教育だ。

クラリス嬢は学校で武道を齧っているだけあって飲み込みが早い。

その上筋が良い。

俺が教える護身術をスポンジのように吸収して行き物にして行くのだから。

その一方でベルナンテ坊は姉に引き摺られる形でやっているから些か覚えが悪い。

それを姉に叱咤されてやっているという感じだ。

まあ、こればかりはやる気があるかどうかで決まるから何とも言えないな。

要はこの子のやる気を引き出す切っ掛けが必要だ。

そして夕食を共にして帰って酒を飲んで寝る、という事を繰り返した。

一見、何の変哲もない日常と思うが俺らみたいな者達には懐かしく・
・温かみがある物だった。

あっという間にその3日間は過ぎた。

その日の夜、俺は相棒と共に第二次世界大戦で造られた地下通路に
来ていた。

第二次世界大戦に造られた地下通路は未だに利用可能だが、鼠がいたりして嫌な場所ではある。

しかし、武器の取り引きには持つて来いの場所ではある。

「・・・そろそろだな」

相棒は懐から銀製の懐中時計を取り出した。

「お前の趣味ってクラシックか？」

今時こんな骨董品を使う奴はそういない。

「まあな」

と相棒は述べた。

コツコツ、と革靴の足音が近づいて来る。

一人だ。

俺はカンテラ型灯油ランプを掲げてみせた。

薄暗い道からビジネス・スーツを着込んだ男が現れた。

相棒と同じ年くらいだが、ビジネスマンとしては相棒よりらしく見える。

「よお。ベルトラン」

男が相棒の名前を呼んだ。

「久し振りだな。ユーリー」

相棒はジタンを吸いながら懐中時計を見た。

「時間ピッタリ。流石はビジネスマンだな」

「何言つてんだよ。お前だつて時間厳守だろ？」

「女に関しては、な」

「相変わらずだな。で、そっちが相棒の猟犬か？」

「ああ。噂は知っているようだな」

「ああ。この世界で二つ名を与えられる奴はそう居ない。その点、シャルル・ペスは有名だな」

脱走王、臆病者、口先王など碌な名前が無い。

しかし、ヨーロッパの傭兵界では有名なようだ。

「で、商品は？」

「仕事内容と移動の事を考えて出来るだけ民間人が持つても問題ないような物にしておいた」

ユーリーは後ろに手を回すと台車を出してきた。

木箱の中に銃がぶつきら棒に入っていたがちゃんと埃が入らないように布などを被せてある。

「ショットガン、ハンドガン、セミオート・ライフルか。まあ、この程度なら何も言われないな」

仮に言われても金を渡せば見逃してもらえる。

「そういう事だ。拳銃はリボルバーにしておいた。狩猟に行くという名目でなら良いだろ？」

「流石だ。今は狩猟期間だからちょうど良い」

そこまで考えて用意した、と言うのなら大した商売人だなと俺は思った。

「触っても良いか？」

俺はユーリーに訊ねた。

「どうぞ。というか触ってみないと確認できないだろ？」

「確かにな」

俺は苦笑しながらセミオート・ライフルを手を取った。

全体的に木を使っており民間人が見ても刺激が少ない。

「“スチームルガー・ミニ14”か」

スチームルガーはアメリカの比較的だが新しい銃器メーカーだ。

元々は工作機械をレンタルして使用していた小規模な会社だったが、今ではS & amp; Wと並ぶ企業に押し上がった。

安い上に堅牢な銃は民間人から愛されている。

その半面で犯罪者にも使われているという所もあるが、な。

で、俺が持っているミニ14はスプリングフィールドM14に形が似ている。

まあ、システム的にはM1に近いんだがな。

口径は5.56mm NATO弾を使用する。

弾数は5、10、20、30とあり、7.62mm弾を使用するミニ30もある。

「そいつは良い銃だ。一応、年齢がまだ若いからな。先輩に連れられて初めて狩りに行く好青年を偽りな」

「まあ、そうしておく」

俺はこいつにする事にした。

ドラグノフの方が俺的にはじっくり来るが、こいつも捨てたもんじやないからな。

相棒の方はショットガンを持った。

ポンプアクション式の“ウィンチェスターM1300 デイフェンダー”だ。

12ゲージと20ゲージを使用する散弾銃で特にこれと言う特徴は無い。

何処にでもある散弾銃と言えばそれで終わりだが、安いという点は

特筆ものだ。

同じ散弾銃のモスバーグは米国で500ドルなのに対してこちらは350ドルという安さだ。

これ位だろうか？

特徴があると言えば。

で、このウィンチエスターM1300 デイフェンダーは警備とか護身に作られた短銃身で日本でも狩猟用に輸出されている。

「リボルバーはフランス製が良いと思って“MR-73”だ」

MR-73…… “GIGN”の使うリボルバーじゃねえか。

フランスのコルト・パイソンと謳われるMR-73。

38スペシャル弾と357マグナム弾を使用するがエレガントな印象は如何にもフランス産らしい。

「これで良いかな？」

「ああ。これで良い。で、車は？」

「もうお前さんの自宅に停めてある」

鍵は前輪の後ろ、とユーリーは言った。

「ありがとうございます。で料金は？」

「締めて15000ユーロだ」

弾代も合わせるともっと高くても良いのに随分と格安だ。

「ほら」

相棒は金をユーリーに渡した。

「ありがとよ。それじゃまた何かあったら呼んでくれ。お前さんに
なら格安で売ってやるからよ」

「ああ」

それだけ言うとユーリーは台車を押して消えて行った。

「さあて、武器も手に入った事だし帰るか」

「そうだな」

俺は頷いて相棒と共に元来た道に戻った。

第八章：依頼人と出発

パリ市街の北北東約23kmのロワシーアン＝フランスにある“シャルル・ド・ゴール国際空港”の前に俺と相棒は車を停めて相手が来るのを待っていた。

名前は言わなくても分かる通りあの糖尿病持ちでルーズベルトから忌み嫌われたドゴールから名付けられている。

俺と相棒が乗っている車は“私は回る”が言語のVOLVO。

堅牢に掛けては右に出る車は居ないとさえ言われる車だ。

だが、ただの車じゃない。

窓は全て防弾ガラスでタイヤにも防弾効果・・・正しく言えばパンクさせられても走れるように工夫されている優れ物だ。

あの武器商人ユーリーがサービスでやってくれたらしい。

正しく持つべき者は戦友だな。

武器はトランクの中だが、拳銃だけはちゃんと懐などに仕舞い込んでいる。

トランクに入れるのはどうかと思っただが、それ以外に隠す場所が無かったから仕方ない。

そんな事を思いながら俺は運転席でシタンを吸う相棒に乗せる相手

の事を訊ねた。

「どうやって相手だと分かるんだ？」

「胸に白い薔薇を付けている」

胸に白い薔薇、ね……

「狙撃手なら赤くて深い薔薇に出来るな」

「まあな。だが、相手がそうじゃないと嫌だ、と言っただよ」

「やれやれ。余程、的になりたいのかな？」

「だろうな。……来たな」

相棒はジタンを灰皿に捨てた。

「行つて来る。車を頼む」

「あいよ。お前さん」

相棒は運転席から出て一組の男女の方へと歩んで行った。

男の方は黒髪だが殆ど白い毛に覆われている。

しかし、身体付きは良いし眼光も鋭い。

少なくとも実業家というよりは数多の戦場を駆け抜けてきた老兵と言った方が皆、納得するだろう。

黒一色の服装でイギリス人が好んで被る山高帽を被り、胸には白い薔薇が飾られていた。

「……あれなら程度の悪い物でも当てられるぜ」

J・F・Kを暗殺したイタリア製のポルトアクション式でもあれなら当てられるほど目立つ。

もう一人は男物のスーツを着ていたが、明らかに女だった。

何で分かるのか？

伊達に獵犬という渾名を頂戴している訳じゃない。

鼻が効くんだよ。

だから、僅かに女物の香りがしたから判断できたし胸の方も見れば一目瞭然だ。

服装はダーク・スーツに水色のボタンシャツと黒いネクタイ。

その上からトレンチコートを着て、極めつけにソフト帽という出で立ちだ。

「……相棒じゃあるまいし」

この国は相棒みたいな奴等が沢山いるのか？と思ってしまった。

容姿は20代半ばという所で金系の髪は肩の辺りで切り揃えられて

おり青い瞳は鋭く周囲を警戒していた。

中々様になっているからあの女がボディ・ガードか。

男は相棒を上から下まで見て眉を顰めた。

眉を顰めたくもなる。

相棒の格好はトレンチコートにハンチング帽とサングラス。

あの顔だ。

何処からどう見ても「この男を探しています」と壁に張られている感じだ。

まったく目立ってどうする、と思うが俺も人の事は言えないが。

やがて相棒が2人を伴い車に近づいてきた。

そしてドアを開けて2人を後部座席に入れて自分は運転席に座った。

「君は誰だ？」

開口一番に男は俺を見ながら訊いてきた。

「先に名乗るのが礼儀だろ？」

「これは失礼した」

男は俺の言葉に害した様子も見せず薄らと笑みを浮かべてみせた。

・・・何処かの犬に比べれば遙かに大人の対応だ。

「私の名はウォルター。ウォルター・ネモリーズ。リヒテンシュタイン公国にある株式会社の筆頭株主だ」

今回、君等を雇った者だ、とウォルターは言った。

「どうも今回の件は怪しいので、保険を掛けたんだ」

荒事を専門に行う俺たちを雇ったのはその為か、と俺は納得した。

「君等なら4日間でリヒテンシュタイン公国に着く、と弁護士が言っていたからね」

「随分とあいつを買っているんだな？」

相棒が口を開いた。

「君の事を言っていたよ」

どんな仕事だろうと必ず完遂するプロ中のプロだ、と。

「そりゃどうも」

相棒は前を見たまま礼を述べた。

これに女の方は眉を顰めたが、ウォルターはまったく気にしていなかった。

そしてウォルターは隣に座る女を紹介した。

「こちらは私の秘書にして護衛のエレーヌ・ヴィンフリードだ」

「エレーヌ・ヴィンフリードよ。元フランス国家警察……“ジャ
ンダムリン”の“G I G I N”に所属していたわ」

随分と輝かしい経歴を持っているな、と俺は思った。

だが、ただそれだけだ。

俺らの世界では経歴も大事だが、その経歴が本当かどうかの方がど
ちらかと言えば大事だ。

経歴を偽りタンマリと儲けて雲隠れなんてよくある話だ。

ただし、そういう奴ほど“流れ弾”に当たって死ぬんだよな？

戦場ではない場所だ。

この女の経歴が本当かどうかはこれから分かるだろう。

「それにしても驚いたわ。凄腕の傭兵が日本人とは、ね」

「日本人の傭兵が珍しいのかい？」

相棒がジタンを銜えながら訊ねた。

「日本人なんて刀を未だに差して頭にピストルを付けているんでし
よ？」

何時の時代を言っているんだよ………

まあ、侍という言葉が世界中に広まっているから仕方ないが。

「刀もピストルももう無い」

相棒はシガー・ライターで火を点けながら言い返した。

「そうだったわね。……あの“成り上がり”に負けてから腑抜けになったんだわね」

「当たり前だ」

フウー、と煙を吐きながら相棒は頷いた。

「所で君等の名前は？」

ウォルターが俺らの名を訊ねた。

そう言えば、自己紹介がまだだったな。

「俺はシヨウ。シヨウ・ローランドだ」

「よろしく。で、そちらは？」

まだ名乗っていない、とウォルターは言った。

「ベルトラン。ベルトラン・デュ・ゲ克蘭だ」

「ほおう。あの百年戦争で大活躍した英雄の名前を持つとは……
いやはや、見た目通りの男だね」

「買い被り過ぎだ。俺は歴史に名を残す程の男じゃない」

「そうかな？歳を取っているとどの人間が歴史に名を残すのかわかるんだよ。君もシヨウ君も歴史に名を残すよ」

断言する、とウォルターは言った。

「どうかしらね？」

エレノアが話をぶち壊す……例を上げるならRPGでせっかく築いたばかりの陣地を木っ端微塵に破壊するように口を挟んできた。

俺らに喧嘩を売っているのか？

それともエリートである自分だけでは不安と思い、俺らを雇った事が気に入らないのかもしれないな。

しかし、こんな事で怒るほど俺も相棒も暇でも無い。

「さあて、行くか」

「そうだな」

俺と相棒はエレノアを無視した。

相棒はキーを回してエンジンを掛けるとクラッチを踏んでギアを口
ー・ギアに入れた。

そしてゆっくりと発進させてリヒテンシュタイン公国を目指した。
時刻は午前9時。

今から4日間でリヒテンシュタイン公国まで行かなくてはならない。

「所でムツシュ・ベルトラン。君はなぜ傭兵になったんだい？」

ウォルターが年代物のパイプを取り出しながら相棒に訊ねた。

「スリルを求めているからだ」

相棒は新しいジタンを銜えながら答えた。

「シヨウ君は？」

君付けで呼ぶとは……あんた位だ。

「俺も似たような物だ。失礼な言い方だが、余り傭兵の過去を聞かないでくれ」

傭兵になる者は何かしら後ろめたい……挫折を味わっている。

それを穿り返されるのは誰もが嫌がる事だ。

だから、俺らは必要最低限の事しか訊かないようにしている。

「これは失礼した。どうも、歳を取ると好奇心旺盛になってね」

「いや、良いわ」

どうも、このウォルターという爺さんは食べない。

ペースが乱れる、と言えば良いだろうか？

調子が狂うぜ。

「ブルドックさん。いつ食事をするの？」

エレエヌが相棒の渾名を言った。

まあ、顔で思ったんだろうな。

「さあな」

相棒は煙を吐きながら答えた。

「怒っているの？私がブルドックと言って」

「怒っていない。怒っていたら客相手の商売は出来ないからな」

尤もだ。

「じゃあ、どうしてそんな口調なの？貴方の口調は相手を不快にさせるわ」

あんたもな、と俺は思った。

「生憎と地なんだよ。食事はパリを出てからだ」

以上だ、と相棒は言つと煙草の灰を灰皿に捨てた。

俺はシートに背を預けながらサイド・ミラーで追跡車が無いか見たが無かった。

『暫くは・・・出ないか』

まあ、こんな所で狙うほど向こうも馬鹿じゃないか。

俺らを雇つたという事はそれだけ危険な仕事、という事だ。

だから、警戒していたが今は大丈夫かと思つた。

相棒は煙草を吸いながら安全速度で運転している。

「少し寝る」

相棒に断つてから俺は眼を閉じた。

昨日、クラリス嬢に夜遅くまで稽古をして些か寝不足なんぞな。

ウォルターといい、調子を狂わせる人間が多いなと俺は思いながら神経の一部を残して後は断つた。

第九章：休憩と刺客

どれくらい寝ていたのか分からないが俺は肩を揺さぶられて眼を覚ました。

「給油だ」

相棒はジタンを灰皿に捨てながら俺に話し掛けてきた。

「何処だ？」

「パリを抜けてトゥールだ」

トゥール、か。

第二次世界大戦でパリが陥落すると政府はそこに移動させたが、直ぐにポルドーへ退避した歴史がある。

まあ、俺らみたいな商売人じゃない限り観光地として訪れるし、観光地しか思わないだろうな。

「ここで飯も買う。お前さんは買い出しを頼む」

「分かった。ウォルターさん、何かリクエストはあるかい？」

「いや特に無い。君に任せるよ」

これに俺は些か驚いた。

筆頭株主なんて偉そうな・・・まあ、実際偉いんだがそういう奴らなら「キャビアを持って来い」とか言うと思っていた。

「私だって今の状況を理解しているよ。キャビアなんて頼まないさ」俺の心を読んだようにウォルターは笑ってみせた。

伊達に長生きしていないか。

恐ろしい事だ。

などと俺は思いながら車から降りて近くの店に向かった。

行く奴等は誰も俺を見ない。

観光地帯だから「こいつも観光客だろうな」という感じなんだろうな。

逆に田舎だと余計に目立つ。

それも考えてここで給油をしたのかもしれないな。

となれば・・・日持ちがする物も買うべきか？

一応、狩猟に行く最中に二人を拾った、というのが警察に質問された時の言い訳だ。

テントと寝袋などは用意していたが、缶詰なんかも用意しておいた方が余計に納得できるはずだ。

それを思つと缶詰などを買うべきだな、と俺は思い直した。

だが、今は取り敢えず直ぐに食べられる物が良いだろうな。

俺はパン屋とスーパーが一体化した店に入った。

給油場からそれほど離れていないし、上手い具合に缶詰とパンは窓ガラス越しに見える位置にある。

何かあれば直ぐに駆け付けられるから有り難いぜ。

店の中に入った俺は先ず缶詰を買う事にした。

適当に籠に入れて会計を済ませた後は直ぐにパン屋の方へと行きパンとコーヒーを買った。

パンはクロワッサンだ。

イチゴジャムとバターもサービスで付けてもらい悠々と店を出て車の所へ戻った。

既に相棒は給油を終えていたのか車の中に居た。

しかし、ふと見ればボディ・ガードのエレーヌが居なかった。

何処に行ったんだ？

ボディ・ガードの役目を忘れて居なくなるとは……………

俺は眉を顰めながら車に戻った。

「ボディ・ガードはどうしたんだ？」

「怪しい奴が居ると言って出掛けた」

相棒は気にしていない様子で答えた。

「俺は見なかったが・・・お前はどうか？」

「見なかった」

可笑しな話だ。

俺らはボディ・ガード専門ではない。

しかし、怪しい奴が居るなら気が付く筈だ。

それなのに気付かないとは・・・・・・解せない。

「失礼と思うが君等は戦いのプロではある。しかし、要人警護は君等は専門外だから気付かなかったのではないのかな？」

ウォルターが上質な葉巻を取り出して、シガー・カッターで切りながら話し掛けてきた。

「まあ、それもあろうな」

俺は相槌を打ちながらクロワッサンとコーヒーを渡した。

確かにその通りだ。

俺たちは戦いのプロだと自負しているが、要人警護専門ではない。だから、分からない部分もあるし気付かない点もあるだろう。

「ジャムとバターがあるがいるか？」

「大丈夫だよ。それにそのままの味で味わいたいんだ」

「そうかい」

俺は頷き相棒にも渡した。

相棒も何も付けずにクロワッサンを口にした。

「で、相棒。どの程度でリヒテンシュタインに着く予定だ？」

「1日分の余裕を持って着く筈だ。何も無ければ、な」

「何も無ければ、か」

「ああ。このルートを行けばそうなるが・・・難しいと思う」

先ほど携帯電話で弁護士から連絡が来たらしい。

何でもウォルターを狙って何人が動いたという情報だ。

「となると、怪しい奴等ってのは」

「お前と同じ考えだ」

相棒はコーヒーを飲みながら言った。

それから数分してエレーヌが戻って来た。

何人かの女がエレーヌに熱い視線を送っているのが見えた。

あの格好だから男に見えたのか？

まあ、見た目が中々に出来ているから不自由しないだろうな。

などと俺は思いながらコーヒーを飲んだ。

エレーヌはドアを開けて中に入ると懐から煙草を取り出した。

こちらはゴロワーズだ。

箱の色は赤で中央に白い兜に羽が生えた絵柄が描かれている。

このゴロワーズはジタンと並びフランスではポピュラーな煙草だ。

白い兜に羽が生えた絵柄は古代ガリア人が被っていた兜でフランスの伝統的な兜となっている。

1本を銜えるとカルティエの銀ライターで火を点けた。

何から何まで一々金が掛っているな、と思う。

衣服だって高級品だし腕時計もロレックスだ。

ロレックスなんて金持ちの代名詞と日本じゃ言われるが海外では金が無い場合に備えて選ぶ奴等が多い。

直ぐに質屋に入れて換金できるからだ。

それを考えると実用品を選んでいるのかもしれないな。

俺はエレノにクロワッサンとコーヒーを渡した。

「随分と安っぽい食事ね」

「お前さんの依頼人は愚痴一つ零さなかつたぞ」

相棒はジタンを灰皿に捨てながら呟いた。

「だから何？怪しい人物に気付きもしない人に言われたくないわ」

「その怪しい人物はどうした？」

相棒はエレノの棘が入った言葉を無視して訊いた。

「大人しくさせたわ」

これで、とエレノはスーツの左腋をずらした。

そこには革製のホルスターに収まったりボルバーがあった。

グリップの部分は木製・・・いや、良く見れば高級グリップであるウォルナット・・・胡桃を使用していた。

胡桃は高級木材と知られているが、銃のグリップにも使用されるとは殆ど知らないだろう。

だが、胡桃ほどグリップに適しているのは無いと俺は思う反面で金が掛ると思う。

胡桃のグリップは握り易いし反動も吸収され易い利点がある。

特にマグナム弾を使用する銃は反動が強い。

それを考えれば、胡桃のグリップを使用している事にも納得できる。

「リボルバーか」

「ええ。オートマチックは信用性に劣るし、5人以上を相手にしないわ」

現在のオートマチックでジャムは起こらない、と言っても良いだろう。

だが、起こる時は起こる。

しかも、起きて欲しくない大事な場面で起こる事があるから厄介だ。オートマチックでジャムったら一度スライドを引いて弾を排出しなければならぬ。

その点リボルバーはまた引き金を引けば直ぐに次弾を撃てるから有利だ。

敢えて欠点を上げるなら弾数が少ない事だが、エレエヌの言う通り一度に5人以上を相手にするなんてそれほど無い。

それを考えると、それなりに出来るなと判断できる。

「そいつは“思い出の品”か？」

「ええ。GIGN時代に使っていた物よ」

となればマニユーリンMR-73だな。

「インチは？」

「3インチ。38スペシャル弾と357マグナムの両方を持っているわ」

3インチか。

2.5インチ・・・俗に言うスナップ・ノーズ・・・獅子っ鼻だが、短すぎて狙いが定め辛いし装填も難しい。

4インチでは逆に抜き難い。

その間の3インチなら短すぎず長すぎない。

理想的な長さと言えるし、弾も357マグナム弾を持っているという所を考えると防弾ベスト用に備えているな。

「今度は私が質問するわ。貴方の獲物は？」

「45だ」

相棒は弾で答えた。

「あのずんぐりむっくりな弾を使う上に掴み辛いし反動も大きいコルト？」

「ああ」

「物好きな男ね。ここでそれを使うなんて稀よ」

「だが、サブレッサーを取り付ければ9mmより音が小さく出来るしジャンキー相手でも問題ない」

「それでも弾数が少ないし反動が大きいわよ？」

「拳銃なんて滅多に使わない」

確かにそうだ。

俺たちはライフルが主流で拳銃は殆ど使わない。

だから、拳銃はライフルに比べれば高いし持つ者は少ない。

まあ、いざという事を考えると持っていた方が良い。

「所でブルドックさん。弁護士さんから連絡は？」

「あった。怪しい奴が来ているだと」

「そう………」

エレベーターはそれだけ言うと黙った。

相棒も口を閉じて車を発進させトウールを後にした。

トウールを出た後は山を削り取られて出来たアスファルトの道路を走り続けるが、可笑しい事に一台も走っていない。

今日は平日だ。

とは言え、一台も走らないなんて事は余り無い。

何かあるな、と俺は直感で思った。

俺は懐から恋人の代用品であるMR-73 4インチを取り出した。

拳銃の射程距離なんて高が知れているが、無いよりはマシだ。

暫くは普通に走っていたが、後ろから猛スピードで車が来るのをサイド・ミラーで確認した。

黒のBMW車中は見えない。

「……………」

相棒は無言でギアをサイド……3ギアから一気にハイ・トップ……5ギアに入れるとスピードを加速させた。

すると、向こうもスピードを上げてきた。

当たり、と見て良いな。

「そいつは使うな。まだトウルからそんなに離れていない」

相棒は俺の手に握られた拳銃をチラリと見て言った。

「離せる自信は？」

「ある。問題ない」

少々手荒いが、と相棒は付け足した。

「お二人さん。シート・ベルトを付けた方が良いぜ」

ウォルターは直ぐにしたがエレエー又はいざという時の為にしない、と言った。

「後悔するなよ」

相棒はジタンを銜えながら言った。

BMWは追い付くと横に移動して体当たりをかまそうとしてきた。

それを急ブレーキでそれを避けた。

BMWはさっきまでボルボが走っていた場所を走る形となった。

そこへ相棒は後ろから追突して、スピードを更に上げた。

100は越えている。

逃げようとしても尻に張り付いて離れない。

大した技術だ。

映画では簡単に見えるが、実際は難しい。

技術と勘が必要だ。

相棒はブレーキを踏んで少し離れた。

BMWは安心したと思うが、どっこい。

直ぐに横に移動させられて、自分達がやるうとした事をやらされた。

そして壁に激突して終わった。

呆気ない物だ。

プスプスと煙を吐きながら高級車BMWはお釈迦となった。

もう追手が来たと考えると先が思いやられるなと思わずにはいられなかった。

その後ろではエレベーターが前につんのめる形で気絶していた。

後悔、先に立たずだぜ？

第十章：旧友の家

刺客を退けた俺たちは南東に向かって車を走らせ続けていた。

俺は地図を広げて相棒に指示を出している。

「その道を左に曲がって500km進んでくれ。そうすればスイス国境に近い場所に行ける」

本来ならスイス国境に近い場所を走らない予定だった。

だが、刺客の事も考えるとそのままの道に行くのは危険。

かと言って在り来たりな道では敵に気付かれてしまう。

だから、敢えてスイス国境に近い場所を走る必要性が出たんだよ。

「大した運転技術だね？ムツシュ・ベルトラン」

ウォルターが葉巻を蒸かしながら相棒の運転を褒めた。

「F1レーサーとしてもやっていけるよ」

「そりやどうも。しかし、あんたも大した爺だぜ」

あんな事をしたら普通は取り乱す筈なのに、この男は葉巻を蒸かしていた。

とてもじゃないが常人には出来る芸当ではない。

「これでも若い頃は無茶をしたものだ」

「と言うと？」

「WW?時代だが、これでも英国諜報部員として働いていたんだよ。その前は戦闘機乗りだった」

英国を救った救国戦闘機として有名な“スピット・ファイアー”に乗り“バトル・オブ・ブリテン”に出撃しドイツ軍を苦しめたらしい。

「後1機でエースにもなれたんだが・・・功を焦ってな」

世界で初めて“一撃離脱戦法”を前提に設計された“メッサーシュミット Bf 109”に撃墜されたらしい。

「お陰で翼を?ぎ取られた」

そこから諜報部員となったらしい。

活動場所は当たり前だがヨーロッパだ。

レジスタンスの協力から破壊工作に諜報活動・・・・・・・・・・

「まるで007だな」

「あんな軽薄な男と一緒にしないでくれ」

ウォルターは初めて怒気を含んだ声で喋った。

「これは失礼した。007はお嫌いか？」

「作者も元諜報部員らしいが、元同僚から言わせればお粗末にも程がある」

あれは諜報部員に対する冒瀆だ、とまでウォルターは言い切った。

ここまで毛嫌いするとは・・・かなり嫌いなようだ。

「そこまで嫌いとは恐れいる」

「いや、すまん。どうも、血が騒いだのかもしれないな」

「男つてのは何時まで経っても血が騒ぐ者だ。それに俺も諜報部員とは知り合いが居るんだが、皆口を揃えて007は大嫌いと言っていた」

諜報部員とも知り合いが居るとは驚きだ。

そこへまたRPGをぶっ放すようにエレヌが口を開いた。

「差別用語よ」

エレヌがポツリと漏らした。

「女だつて血が騒ぐわ。あなたの発言だと女は血が騒がない、と取れるわ」

「失礼した」

相棒はまた謝罪した。

誠意の欠片も込められていないが、まあ気にしないでおこづ。

「そんな顔と性格じゃ女には不自由しているでしょうね」

「それはあんたに関係ないだろ」

実際の所は女に不自由などしていない。

寧ろ掃いて捨てる程、女に困らないから凄い話だ。

「まあね。それで宿はどうする気？」

「野宿は覚悟できているんだろ？」

「野宿ですって？私に野宿させる気？」

「誰もあんたに言っていない。俺はウォルター爺さんに言っているんだ」

「私は構わんよ。昔は下水道で一夜を過ごした事もある」

野宿など造作もない、とウォルターは言い切った。

それにエレー又は眉を顰めながらも沈黙した。

こりゃ野宿決定か？と俺は思った。

別に嫌ではない。

寧ろ嫌と言うほど慣れ切った。

だが、それは違っていた。

野宿ではないということだ。

夜も間近という所で相棒はハンドルを左に切った。

地図でも左だから、問題ないと俺は思った。

しかし、それから暫く進んで行くと道路から外れて別の道に入った。

「何処に行くんだ？」

「昔馴染みの奴が居るんだ」

今日はそこに泊る、と相棒は言った。

「連絡しないで大丈夫なのか？」

「ああ。今も生きていれば俺らを匿ってくれる筈だ」

一体どんな奴だ？と俺は思いながら相棒が言うのだから任せる事にした。

暫く行くとボルボがやっと通れる位の小さな道に入った。

しかも凸凹していて安定した道ではない。

「もう少し、楽な道は無いの？」

エレーヌが苦言を漏らしたが相棒は「ここしかない」と言ってハンドルを握り続けた。

やっとの思いで到着した場所には一軒の家があった。

鶏小屋と牛小屋があり、牛の鳴き声が聞こえてくる。

家の方はもうそろそろ寿命では？と言いたくなるほど見るからに粗末だ。

相棒は車から降りてジタンに煙草を点けた。

すると、牛小屋からカシャ、という音がした。

散弾銃・・・ポンプアクション独自のスライドを引く音だ。

相棒は直ぐに懐からコルトを抜いて構えた。

それと同時にカウボーイ・ハットを被った中年の男が出て来た。

見るからに安っぽい服装だが銃だけは手入れが行き届いている感だ。

「・・・ブルドックか？」

男が相棒の渾名とも言える名前を言った。

「ああ。久し振りだな」

相棒はコルトを向けたまま男に頷いてみせた。

「たつく。相変わらず予告なしに来る野郎だな」

男は呆れながらもショットガンを肩に掛けた。

それを見てから相棒はコルトの撃鉄を親指で押した。

その時、人差し指で引き金を引いている。

既に撃鉄を起こした銃を戻す時は引き金をゆっくりと引きながら戻すんだよ。

「女以外には予告なしで来るって話しただろ？」

「そうだったか？まったく相変わらずだな。……追われているのか？」

男が俺たちの方を見て訊ねた。

「正確には違う。今晚の宿を探しているんだ」

「泊めろって事が。まあ、良いぜ。おい、ブルドックが来たぞ！」

するどドアが開いて小さな子供が5人も走って来た。

「ブルドック小父さん！！」

子供たちは相棒に抱き付いた。

「よお、大きくなったな？」

相棒は子供たちを一人ずつ抱き上げて笑った。

「こらこら、貴方達。ベルトランさんを困らせるんじゃないの」

苦笑まじりに出て来たのは、豊穰の女神が歳を取り更に大人になった感じの女性だった。

「久し振りだな」

相棒は口端を上げて笑ってみせた。

「そうね。それで車に居る方達は？」

「助手席に乗っているのは俺の相棒。後ろの二人は依頼人だ」

「依頼人？なるほどね。チャールズから頼まれたの」

「ああ。相変わらず耳が良いな」

「これでも情報屋としての腕は落ちていないわ。今は引退しているけど、今でも入って来るわ」

情報屋だったのか……………

「悪いが、泊めてくれないか？」

「構わないわ。貴方には命を助けられたんだから。さあ、入って」

「分かった。おい、行くぞ」

相棒は俺達に顎で合図した。

俺たちはボルボから降りて家に入った。

家の中は割と清潔感に溢れていた。

「テーブルに座ってて。ほら、貴方達は部屋に行く」

子供たちは「えー」と不平不満を漏らしたが、母親の言うことに素直に従った。

「子供たちはもう食べたから安心して」

「そうか」

相棒は簡潔に頷くと椅子に腰を降ろし俺達も做った。

「おい、ブルドック。酒は何が良い？」

「そうだな・・・“マール”はあるか？」

「ああ。あるぜ。そちらの方も良いかな？」

俺達にも訊いてくる男。

「俺は構わないぜ」

「私もだ」

「私は仕事だから遠慮しとくわ」

エレーヌだけ断った。

ただし、俺達に棘のある眼差しを送りつけて来た。

まあ、俺達も仕事だから咎めるのも無理はない。

男は俺達にグラスを渡すとマールを注いだ。

ラベルには会社名が書かれていた。

モエ・エ・シャンドン社の物だ。

マールは独特の味と香りが特徴の癖のある酒だ。

だが、この癖に嵌る奴は多い。

俺たちは注がれたマールを飲んだ。

「で、そちらは元軍人かな？」

男は上座の席に腰を降ろしてウォルター爺さんを見た。

「なぜそう思うんだい？」

「分からないようにしているが、独特の動きがあるし眼も鋭い。それに・・・臭いがあるからな」

血と硝煙が混ざり合った場所を生きて来た男だと。

「鋭いね。元英国諜報部員だよ」

「英国のか。なら、俺の上さんと同じだな」

「何と。あの御婦人も英国諜報部員だったのか」

「ああ。元M i 5だ」

「私の方はM i 6だ。いや、今はS I Sに名前が変わったんだな」

「ああ。年齢から察するにW W？世代かい？」

「その通り。昔は飛行機の操縦もしたが、負傷してから諜報部員となった」

「なるほどな」

男は納得したように頷いた。

そこへ女が料理を運んで来てテーブルに乗せて行く。

「さあ、食ってくれ。俺の上さん直伝の料理だ。残さず食べてくれよ。」

「分かっているぞ」

相棒はナプキンを挟みながら頷くとナイフとフォークを手にした。

俺達もそれに倣い食べ始めた。

食事を進めながら男は他愛ない話を俺達にしてきた。

仕事に関しては一切、話をしないのはプロとして優秀だ。

そこへ女も混ざり賑やかになった。

そして眠る時間となった。

しかし、その前にエレーヌがリヒテンシュタイン公国にある会社に電話をしたと言ってきた。

あまりお勧めは出来ない。

電話を盗聴される可能性もあるからだ。

ウォルター爺さんも同じようで「しなくて良い」とだけ言った。

エレーヌは雇い主に言われては仕方無いと割り切ったのか案内された部屋に消えた。

俺と相棒も同じだが、一度車に戻りトランクから武器を取り出して置いた。

俺はルガー・ミニ14を。

相棒はウィンチエスターM1300を。

予備弾などもポケットに入れてから部屋へと戻り床に着いた。

第十一章：新たなる刺客

朝の6時に俺達は起きて家を後にした。

相棒は幾らかの金を置き礼の手紙も添えるという気配りをみせた。

それを見てウォルターは褒めて俺も感心した。

さあ、行こうと車に乗り込んだ途端に……

「見た目とは大違いね」

……何であんたはこつも場の雰囲気を壊すんだ？

俺は後部座席でゴロワーズを吸う女に是非とも訊きたかった。

「まだまだ若いな。お嬢ちゃん」

相棒は口端を上げて……悪役が正義の味方を小馬鹿にする笑みを浮かべた。

「その笑い方、止めてくれない？ 苛立つんだけど」

「これは失礼」

相棒は言われた先からまた笑った。

「貴方って学習能力が無いの？」

「無ければ生きていない」

「だったら止めて。ムカつくのよ」

「おい、姉ちゃん。あんたは相棒に恨みでもあるのか？」

俺は我慢して来たが限界を感じていた。

「恨みなんて無いわ。ただムカつくのよ」

「餓鬼みたいな理由で何も言えないぜ」

「あんた達……この私を誰だと思っているの？」

「ただの護衛だろ？」

「だよな」

相棒の言葉に俺は頷きウォルターも頷いた。

「君は彼等を雇った私に怒っているのか？」

「当たり前です。私一人いれば……」

「自惚れるな。小娘が」

ウォルターが地を這うような蛇のように口を開いた。

「君は確かに優秀だ。だが“それだけ”だ。彼等のように我慢強くないし他人との協調性も無い」

我慢強いのは当たり前だが、協調性があるのかと問われたらどうか？

傭兵だけではないがチームワークは何よりも大切だ。

本や映画だと一匹狼が傭兵のイメージだが、実際は違う。

数人の仲間達で仕事をする時もあるし誘われる時もある。

金の切れ目が縁の切れ目なんて薄情な世界ではない。

まあ、時には「寄せ集め」に等しい時もあるが。

話を戻すと金ばかり執着して更に協調性も無い奴はお断りだ。

居るだけで迷惑だからな。

そんな事を俺は思っている間もウォルターは続けた。

「君は自分に絶対的な自信を持っている。自信を持つのは良いが、過剰な自信は身を滅ぼすし周りにも悪害を放つ。もし、今後また彼等と突っ掛かり合うなら今すぐ止めて消える。私が雇ったのは傲慢で我が儘な小娘ではない」

仕事ができる一流のプロだ。

それが出来ないなら要らない。

酷い言葉だが、的を射ている。

しかも、ど真ん中をな。

こつも辛辣に言葉を浴びせられたエレー又は閉口した。

だが、何も言わずにゴロワーズを取り出すと銜えて相棒に火を求めた。

「運転中の俺に求めるな」

相棒は文句を言いながらも、ちゃんとマッチで火を点けてやった。

何処からともなく出したマッチはマジックみたいだ。

「お前、マジシャンにもなれるのか？」

「詐欺師にはなりたくない」

と相棒は言いながらまだ燃えているマッチを自分の煙草に持って行った。

「失礼したね。二人とも」

「いや、あんたとその娘の問題だ。俺らには関係ない」

俺は首をコキコキと鳴らしながら片手を振った。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。で、ムツシュ・ベルトラン。これからリヒテンシュタイン公国までどれ位かな？」

「ちゃんとした道路を通り何も問題なければ大丈夫だ。だが……」

お客様はそうじゃないらしい」

サイド・ミラーから見ると数台の車が猛スピードで追い掛けてきた。

・・・どういう事だ？

俺らがここに居る事は分からない筈だ。

誰が教えた？

あの家族は違う、と思う。

あの場所に居ると教えてやれば済む。

だが相棒なら直ぐに気付くし俺も気付く。

誰だ？

裏切り者が居るのか？

しかし、今は目の前の蠅を叩き落とすのが先決だな。

「相棒。盛大にお出迎えしてもOK？」

「OKだ」

「その言葉を待っていたぜ」

俺は窓を開けて右側から顔を僅かに出した。

そして上半身を出してスターム・ルガー ミニ14を構えた。

奴等の方は車の速度を上げてきた。

俺に撃たせない積りか？

だったら、諦めな。

お前等とじゃキャリアが違うんだよ。

俺はスコープ無しで狙いを定めた。

車は避けもせず突っ込んで来る。

狙いは運転手。

風などを観測し、狙いを捕えて……引き金を引いた。

5.56mmは7.62mmに比べて小型だから風などの強さで逸れてしまうから、そこを計算に入れた狙撃だ。

弾は運転手の窓に命中したが、食い込むだけだった。

防弾ガラスか。

しかし……甘いぜ。

俺はそこを狙って立て続けに撃ち続けた。

如何に防弾ガラスでも何度も同じ所を撃ち続ければ弾は貫通する。

距離は少しずつ縮まるから、自分から当たりに来るようなもので助かったぜ。

お陰で直ぐに弾は貫通して運転手を撃ち抜いた。

フロントガラスを赤く染めるが、それでも車は走り続ける。

それ所か運転席のドアが開くと血に染まった運転手が転げ落ちた。

一瞬だけ運転が狂ったが直ぐに持ち直してみせた。

やるなあ・・・面白しれえ。

どうやら前の奴に比べれば骨があるようだ。

代わりの運転手は狙いを定められないようにジグザグに走り始めた。

馬鹿ではないようだ、所詮は子供だましに過ぎない。

今度はマニューリンMR-73を抜いてガラスの下・・・前方の部分・・・ボンネットを狙い撃った。

弾は357マグナム弾を使用している。

357マグナム弾は車のドアも撃ち破れる威力がある。

俺の愛銃・・・デザート・イーグルならもつと良いんだが、横で運転をしながら煙草を蒸かす相棒に傷付けられて現在入院中。

ちくしょう……やっぱり許せねえ。

マニョーリンは決して悪い銃ではない。

ないんだが……やっぱり使い慣れた物の方が望ましい。

と俺は思いながらMR-73をホルスターに仕舞い元の位置に戻った。

弾は全て命中し、奴等の車はお釈迦となった。

それでも諦め切れないのか車から降りて拳銃を乱射するが、鳥を狙っているのか？と問いたくなるほどの外れな方角に飛んで行く。

射的ゲームをやれば体の良い鴨として店の親父に笑われるだろうな。などと俺は笑みを浮かべながら思った。

「お見事だ。ムツシュ・シヨウ」

「そうでもないさ」

ウォルターの褒め言葉を俺は肩を竦める事で答えた。

「一本どうだい？」

顔の横から魚雷みたいに先端が丸っこい葉巻が出された。

二本だ。

俺と相棒の分、という事か。

「頂く」

相棒は葉巻を取って俺もそれに倣った。

口の部分を歯で噛み千切ってから互いにライターで火を点けた。

と言っても葉巻は俺らが吸うような紙巻き煙草のように雑ではない。

繊細だ。

だから、吸いながら火を点けるなんてのは駄目。

火を点けてから奥まで行くように45均等にやる必要がある。

それ以外にも何かと手間が掛る。

大抵の奴等は葉巻を吸わない。

葉巻は煙草を吸っていた者が最終的に行き着く場所とでも言えば良
いかな？

まあ、そういう事で大抵葉巻を吸うのはウォルターみたいに年老い
た奴等だ。

中には物好きな奴もいるが、葉巻なんてそこら辺の店には売って
ないから手に入れるのも一苦労だ。

だから、俺も相棒も葉巻は吸わない。

金が無いのが一番の理由ではあるが、な。

「まるで“革命家”になった気分だ」

相棒は葉巻の灰を先に溜めながら感想を述べた。

「まあな」

俺はそれに頷いた。

革命家はよく葉巻を吸うが、それには理由がある。

革命家の象徴が葉巻。

そしてあいつ等が居た場所は大抵が密林だ。

葉巻には除虫効果があるから、それで吸っているのも理由だ。

で、肝心の味はどうか？と言えば・・・・・・・・・・

「何だかパツとしないな」

葉巻は味や香が良いのだが、俺達紙巻き煙草を吸う者には分からない。

「そうか。まあ、歳を取ってから再び吸えばその味が分かるよ」

ウォルターは残念と言いながらも自分の葉巻を蒸かした。

その一方でエレエは黙って相棒を見ていた。

ウォルターに怒られて相棒を逆恨みしているというのならお門違いも良い所だ。

何れそのお門違いで痛い思いをするだろうな、と俺は密かに予感した。

第十二章：裏切り者

刺客・・・と言えるのか分からない相手を撃退した俺達はそのま
りヒテンシユタイン公国へと向かった。

その日は何も起こらずに後二日の距離まで進む事が出来た。

ただし、俺と相棒は考えていた。

裏切り者が居る。

手際が良すぎるんだよ・・・

俺らが行くルートを予想したように刺客が来た。

偶然にしては出来すぎている。

裏切り者が居なければこつても上手くはいかない。

では裏切り者は誰か？

相棒の戦友にして弁護士か？

それとも昨夜、泊めてくれた家族か？

弁護士なら向かう場所は分かっている。

だがルートはどうだ？

相棒はルートを教えていない筈だ。

こういう職業に携わっていると誰もが「疑わしい人物」と見えてしまふ。

だから、心を許せる相手にしか・・・いや、そいつにさえ本当の事を言えない時がある。

こいつの場合もそうだろう。

恐らく弁護士にルートは教えていない。

考える事は出来ても正確には分からない筈だ。

となると弁護士は外す方が良い。

あの家族にしても行く場所を教えていないし手掛かりになる物も見せていない。

予想は出来ても確実とは言えない。

なら発信器か？

いや、それも無い。

車を渡された日に予め隅々まで調べたが、それらしき物は発見できなかった。

ウォルター達の方は分からないが仮にも元諜報部員だ。

相手に知られるような初心者のようなへマはしない筈だ。

だったら……一体、どうやって俺らが行くルートを知っているんだ？

俺は考えたが明確な答えを見つけない事は出来なかった。

「相棒。火」

俺は考えるのを止めてジタンを銜えると相棒に火をくれと強請った。

「火ならあいつ等に貰え」

相棒は顎で上を指した。

上？

俺はハツとした。

へりの音だ。

まだ離れているが近づいて来ている。

まさか……

俺は窓から顔を出して上を見た。

1機のへりが近づいて来る。

民間用のベル407だ。

ベル社と言えば相棒が居た陸上自衛隊でも採用した“ベル・ヒューイコブラ”を作り上げた会社として有名だな。

ベル407の色は黒で紋章が描かれていた。

・・・何処かの“人材派遣会社”か？

見た事も無い・・・というか、ヨーロッパは余り知らないから何処の会社かは分からない。

へりのドアが開き、相手が身体を出してきた。

手には・・・ドラグノフSVDが握られていた。

俺の愛銃・・・・・・・・

あんな野郎に持たれて可哀そうに・・・・・・・・

俺はドラグノフを手にしたと思ったが、それ所ではない。

「どうするんだよ？上からじゃ何も出来ないぞ」

へりが来るなんて想定外だ。

言い訳だが。

「まあ、逃げるだけ逃げる」

相棒は平坦な声で答えるとアクセルを踏み込みギアをチェンジした。

「ちよつと後ろからも来たわよ」

セリーヌが後ろを指差した。

後ろからも5台の車が猛スピードで突っ込んできた。

数で押して来るか？

馬鹿の一つ覚えが。

だが、空からの攻撃はどうしようもない。

「相棒。この車を捨てて別な車に乗り換えるか？」

ここに車は無いし民家なども無いが、森林はある。

そこへ逃げ込み徒歩で逃げる。

「それも有りだが、行ける所まで行くこうぜ？」

まだパーティーは始まったばかりだ、と相棒は笑った。

「そうだな。しかし、どうしてこうも俺らの行くルートを知っているんだらうな？」

裏切り者が居るのかもな、と俺は言った。

「確かにそれは言えているな」

ウォルターは葉巻を蒸かしながら冷静な口調で頷いた。

何となく察しは付いている口調だった。

「だが、今は裏切り者を探すより逃げるのが先決ではないのかな？」

そう言うウォルターの頬を銃弾が掠めた。

かなり正確な狙いだ。

前の奴より出来る奴だな。

「ん？おい、相棒。“犬”が居るぞ」

俺は先頭の車に乗っている男の名を言った。

自称フランスNO.1の傭兵・・・シャルル・ペスだ。

「何だよ。ご主人様が構ってくれないから自分から来たのか？」

「だろうな。まったくあれだけ躡けたのに・・・駄犬は駄犬だな」

「だな。相棒。頼む」

「了解」

俺はルガー・ミニ14のレシーバーを引き窓から身体を出そうとした。

そこへドラグノフの銃弾が襲い掛かる。

危うく撃たれそうだったので肝を冷やす。

「ちっ。へりをどうにかしないと不味いな」

へりさえなければ1発で終わりに出来るのに……

俺らが手も足も出ない事を良い事に車の奴等は一方的に撃って来やがった。

下手な鉄砲数撃ち当たる、というが……正しくそれだ。

何人かは正確にフロントガラスなどを狙っているが、後の奴等は滅茶苦茶だ。

その中にはシャルル・ペスも居る。

あいつが使っているのはコルトM16のスポッター・モデル。

セミオート限定だが、フルオートに違法改造されている。

M16は命中精度が良いんだが……どうやったら、ここまで外れるんだ？と問いたくなるほど下手くそな腕前だ。

「あれでよくフランスNO.1を語れるな」

「自信だけはNO.1だからな」

「憐れな奴だ。今度、産まれる時は腕もNO.1になりな」

俺は内心でこいつはもう産まれない、と確信していたが言葉では憐れんだ。

車の攻撃は絶えないが、へりからの攻撃は1発だけで今の所は無
い。
どういう事だ？

へりから狙えば、仕留められる可能性は高い。

タイヤを狙えば・・・先回りして運転席を狙えば・・・俺らを仕留められる筈だ。

それなのにそれをしない。

奴等は俺らを獲物と称して楽しんでいるのか？

だとしたら・・・自惚れも体外にしろと言ってやりたい。

俺らは獲物じゃない。

いや、獲物だとしても俺らは手強い獲物だぜ？

知っているか？

狩猟を始めた者達は、最初初めて見る獲物に興奮して引き金を引けないんだ。

その間に襲われる。

お前等・・・興奮しているのか？

しているなら、直ぐに死ぬぜ。

俺はジタンを銜えながら内心で言っただけだ。

しかし……嫌だな。

愛銃は無い。煙草も無い。最悪だ。

最悪過ぎて泣きたいぜ。

「お前のせいで恋人に振られたじゃねえか」

俺は腹いせに相棒に嫌みを言っただけだ。

「俺のせいにするな。それより……不味いぞ」

「不味い？」

「考えろよ。いや、お前の場合は鼻を研ぎ澄ませろ、と言った方が
良いか」

「……」

俺は相棒が言った言葉を考えてみた。

不味い……どういう事だ？

奴等は俺らを獲物と称して遊んでいる。

・・・いや、違う。

あいつ等は犬だ。

狩猟において犬は一番大事だ。

『1に犬、2に足、3に鉄砲』

こんな言葉もある通り犬は大事だ。

何故か？

獲物を狩人の前に誘き出すもとい追い詰めるのが犬の役割だからだ。

あいつ等は駄犬とは言え猟犬。

つまりあいつ等は遊んでいるのではなく・・・俺らを追い詰めてい
る、という事か。

考えてみれば、一台も車が走っていない時点でそう感じるべきだっ
た。

くそつたれ。

鼻が効かなくなったら終わりだ。

「・・・言わんこつちやない」

相棒は目の前に向かって呟いた。

俺もそれに釣られて見ると……居た。

狩人が。

狩人は全員で10人。

しかも、2人は………

「ジャベリン」かよ

ジャベリン……ロッキード・マーチン ジャベリン。

アメリカのロッキード・マーチン社とレイセオン社が共同開発した
携行式の対物火器で装甲車と低空飛行するヘリなどを撃墜できる。

それを2人も持っている。

残りはアサルトライフルとショットガンだ。

しかも、アクセサリーがやたらと豊富で金がふんだんに掛っている。

それほどまでにウォルター爺を殺したいのか。

その標的であるウォルターは葉巻を蒸かし続けている。

歴戦の勇士としてのプライドか？

だとすれば流石はWW2を潜り抜けてきたと褒めたいぜ。

「どっするっ。」

「・・・直ぐ横に道があるだろ」

相棒が左目で指した場所を見ると、僅かに道があるのが見えた。

「そこを通り逃げる」

その前にこいつをお見舞いする、と相棒は言い懐からポテトマッシュ
ヤーを取り出した。

「持って来たのかよ」

「ああ」

簡潔に言つと俺に渡してきた。

「しくじるなよ」

「誰に言つてんだよ」

俺は鼻で嗤いながら紐を指に巻き付けた。

「へりはどつする？」

「後ろのお嬢ちゃんに頼む」

「私にへりを攻撃しろと？」

「ああ。やれ」

「拳銃でへりを倒せる訳ないでしょ？」

アニメの見過ぎと女は言ったが、相棒はこう返した。

「誰も倒せと言ってない。速くしろ」

「人に頼む態度じゃないわよ。ブルドックが」

女は相変わらず毒舌を吐きながらも後部座席の窓からMR-73を出すと闇雲に撃った。

しかし、後ろの駄犬共よりはマシなようだ。

へりが少し遠ざかるのを耳で確認した俺は窓から上半身を出して投げた。

それと同時に紐が切れてポテトマッシャーだけが飛んで行く。

同時にジャベリンが発射された。

相棒は素早くハンドルを切り、狭い道に入った。

後ろから爆発音がして車の急ブレーキの音も聞こえた。

「何とか成功だな」

「どっつやらそつでもないよ」

ウォルター爺が窓を見ながら言った。

「先ほど後ろの者が撃っていたが・・・その流れ弾が当たった」

M16から撃たれた弾。

それでガソリンが漏れ出したらしい。

「ほおう。あの駄犬か。運とは言えよく当てたな」

相棒はまったく気にしない様子で言った。

「ちよつとどうするのよ?」

逆にエレー又は切羽詰まった声で訊ねてきた。

「何処かで車を調達するだけだ。別に問題は無い」

「手に入らなかったら?」

「その時は、何とかする」

「明確な答えになってないわ」

「俺に質問するより自分で考える」

相棒はそれだけ言うと狭くて凸凹した道を黙って走らせ続けた。

第十三章：ワイン畑と伯爵

刺客から何とか逃げ切った俺達だが、ここからが問題だった。

犬の名前を持つ自称フランスNO.1の傭兵シャルル・ペスが持つM16スポッター・モデルの撃った5.56mm弾が偶然にも給油する所に命中した。

お陰でガソリンが漏れ出している。

狭くて凸凹した道は車にとってガソリンを食い易い道だ。

しかも、ガソリンが漏れているというのだから・・・停車するのは時間の問題。

だが、どうにか道を抜けて一般道路に抜け出せたから御の字にしておこつ。

と言っても一般道路なんだが一台も車が走っていない。

まだ時間としては早いから一台くらいは走っていても良い筈なんだが・・・

神に見捨てられたのか？などとらしくない事を考える。

だが・・・何処からともなく葡萄の匂いがする事に気付いた。

ここからは確認できないが近くに葡萄畑でもあるのか？

「さて、車を探すか」

相棒は匂いに気付いていないのか、または敢えて無視しているのかは不明だが俺達に車から降りるように言った。

エレー又は嫌そうな顔をしながらも降りた。

まったくどうしてそう一々人の癪に障るような言動を取るんだ？

ウォルターの方は平気な顔なのに……………

「ムツシュ・ベルトラン。ここは何処だろうか？」

ウォルターは葉巻を蒸かしながら右手にウィンチエスターM1300を持った相棒に訊ねた。

「……………スイス国境にほど近い場所にある“ワイン畑”だ」

相棒は僅かに間をおいてから答えた。

ワイン畑という言葉には何処か思い入れがあるような感じに聞こえた。

「その言葉には思い入れがあるようだね？それにその口ぶりから察するに知っているのかい？」

「まあな。恐らく今の時間なら……………帰って来る途中だ」

ワインの元である葡萄を持って、と相棒は言っているとジタンを銜えて火を点けると黙った。

相棒のジタンの火が目印とばかりに一台のトラックが来た。

しかもこちらを直指しているかのように走って来る。

俺は反射的にミニ14を構えエレノアはウォルターを護るようについで立つと懐に手を伸ばした。

だが、相棒の方は黙って見ていた。

どういう事だ？

俺は首を傾げるしかなかった。

トラックは年代物だが、まだ足腰はしっかりしている老人の印象を受ける。

そのトラックを運転していた中年の男が慌てて降りてきた。

「だ、旦那様じゃないですかっ」

相棒を見るなり男は旦那様っ、と叫んだ。

旦那様？

「久し振りだな」

対して相棒はジタンを吸いながら近づいて来た男に気さくな態度で話し掛けた。

「何時お戻りになられたのですか？」

男は俺達が眼には入ってないのか相棒だけを見て訊ねてきた。

「いや、違う。少し厄介な眼に遭って・・・ここに来てしまった」

相棒は出来るなら通りたくない道だった、と暗に答えたが男はそれを無視したのか別の事を口にした。

「厄介な眼？というところ“最初”のように追われているのですか？」

「ああ・・・お前等に迷惑を掛けたいとは思っていない。だが、車が必要なんだ。用意してくれないか？」

心からすまなそうに謝りながら相棒は車を頼んだ。

「何を言います。貴方様はここ一帯のワイン畑を所有するカリオストロ伯爵家のご主人様ではないですか。私どもに迷惑を掛けたくないなど言わないで下さい」

男は声を荒げて相棒を叱り付ける口調で言い返した。

カリオストロ伯爵家の主人だ？

「おい、相棒。お前は一体何をしたんだ？」

俺は話について行けず相棒に訊ねた。

「そいつは・・・」

「この方は数百年の歴史を誇るカリオストロ伯爵家の婿養子です」

相棒の言葉を遮り男が答えた。

婿養子だと？

数百年の歴史を誇る伯爵家の？

この男が？

「相棒・・・お前、結婚していたのか？」

相棒である俺もこれは知らなかったから啞然とするしかなかった。

「・・・一度だけした事はある」

相棒はこれまた少しの間をおいてから答えた。

した事はある・・・

「その口ぶりから察するに奥さんに振られたの？まあ、その顔と性格じゃ振られても仕方ないけどね」

エレーヌが相棒の弱みを見つけたとばかりに詰って来た。

この牝犬が・・・

俺は一発この女に拳を打ち込もうと思いき拳を握り締めた。

綺麗な顔をボコボコにしてやろうと思いき振り返ろうとした。

だが、それは不発に終わった。

「おい。その阿婆擦れ女つ。あんたは旦那様の何を知っているんだ？！奥様は旦那様を愛していたし旦那様も奥様を愛しておられた。それを振られたなどとはどういう事だ！！」

男は唾を吐きながら女に掴み掛ろうとした。

まるで自分を馬鹿にされて怒ったかのような態度だ。

エレー又は男の態度に驚き身構えたがそれをウォルターが止めた。

「私の秘書が大変失礼な真似を致しました事を深くお詫びします。ムツシユ。尽きましては、貴方様のご主人であるベルトラン殿は、宿を探しているのです。出来るなら今夜の宿などを与えて下さると有り難いのですが・・・・・・・・・・」

「おい」

相棒がウォルターを止めようとしたが男の方はさも当然とばかりにこう言った。

「何を言うんだ。旦那様が帰って来られたのだ。館にお連れするのが当たり前だ！！」

「おい。俺は別に・・・・・・・・・・」

「お言葉ですが旦那様」

男は激怒した顔から一転して平常な……些か冷たい印象を受ける顔つきになった。

「私どもは貴方様の使用人でもありません。ですが、その前に私共は貴方様の亡き奥方様であられたアンナ様の使用人です」

アンナというのか……相棒の亡くなった上さんは。

「奥様は死ぬ間際に私共にこう言いました」

もし、あの人が訊ねて来たら……全力で助けなさい。

「私どもはそれを守る義務があります。それが私どもの忠誠です。それとも旦那様は奥様のお気持ちを、私共の忠誠を踏み躪る積りですか？」

「……分かった。その前に執事長のモーガンに連絡しておけ」

俺が帰って来たと伝えて置いてくれ、と相棒は頼んだ。

それから車は後で回収してくれとも頼んだ。

「かしこまりました。旦那様。それではむさくるしいと思います。荷台の方へ乗って下さい」

「分かった」

そう言って男は運転席に乗り俺達は荷台へと飛び乗った。

中には相棒の言う通りワインの元である葡萄が箱に入っていたから

気を付ける。

俺達が乗ったのを認めたかのようにトラックが走り出した。

「あんたみたいな男が伯爵とは・・・世の中って不思議ね」

エレー又は男が居ない事もあつてか、また人の神経を逆撫でするような言葉を吐いた。

何時もなら相棒は大人の態度で済ませたが今回は違っていた。

「・・・その綺麗な顔を粘土細工にされたくないなら口を閉じていろ」

相棒は珍しく怒気を露わにした口調でエレー又を叱り付けた。

この態度にエレー又は言い知れぬ恐怖でも感じたのか押し黙った。

「ムツシュ・ベルトラン。あまり良い気持ちではなさそうだね？」

「・・・まあな」

相棒は新しいジタンを吸いながら答えた。

「私に対してかい？」

ウォルターは相棒の了承を得ずに勝手に宿を決めた。

怒りたくもなるだろうが、相棒は首を横に振った。

「……………自分の情けない姿に苛立っているだけだ」

それだけ言つと相棒は黙り込んだ。

俺達も何を言えば良いか分からずに沈黙した。

……………過去には触れないのが傭兵の世界では暗黙の了解。

だが……………どうやら、その過去に触れそうだ。

俺としては嫌だが……………仕事となると仕方無いな、と割り切るしかない。

相棒の方もそんな所だろうな……………

などと思ひながら俺はジタンをまた口に銜えた。

何時まで経つても慣れない味だが。

第十四章：薔薇と寝室

葡萄が入った箱と共にトラックに揺られ続けること1時間。

一体どれくらい掛るんだ？と俺は思いながら皆を見た。

相棒は一言も話さずに黙っていた。

黙って煙草を蒸かしながら何を考えているのか分からない顔をしている。

沈黙しているのは俺達も同じだが相棒と違い……一つだけ共通点があった。

相棒の過去が分かる。

これが共通点だった。

出来るなら知りたくないが、知りたいと言つ気持ちもあるから人間と言つのは複雑だと改めて思ってしまう。

トラックが停まった。

そして先ほどの男が来ると、俺達に降りるように言った。

俺達はトラックから降りた。

男は俺達を先導して前へと歩き出す。

周りを見ればワイン畑ばかりが眼に入る。

「相変わらず立派なワイン畑だな」

相棒がポツリと漏らした。

「ありがとうございます。旦那様」

男は顔だけ相棒に向けて笑顔で一礼した。

そして歩く事10分。

目の前には中世の時代を残す館があった。

両端には魔女の帽子みたいな三角形の尖った屋根の塔が見える。

黒く巨大な門の前には紋章があった。

鷹と葡萄だった。

余りにも不似合いな紋章だが妙に惹かれる気がした。

その門が自動的に開くと一人の老人が現れた。

ウォルターより年老いているが、キチンと着こなした燕尾服には歳が感じられない。

老人は相棒の前まで近付くと、背筋を伸ばしたまま一礼した。

「お帰りなさいませ。旦那様」

「・・・久しいな。モーガン」

「はい。旦那様もお元気で何よりです。そちらの方は？」

モーガンと呼ばれた老人は俺達に視線を向けてきたが、決して怪しい人物という眼差しでは無かった。

「相棒と依頼人だ。すまないが、泊めてくれないか？」

「何を言います。旦那様はこの館の主人。主人がそのような言葉を言っただけではありません。所で車は何が宜しいですか？」

「4人乗りで馬力がある奴を頼む。明日までにだ」

「かしこまりました。それから別の車は既に使用人が取りに行っております」

手際が良いな・・・そういう所が正しく執事らしいと俺は思った。

相棒は男に軽く謝った。

「すまない」

「いいえ。ではどうぞ中へ・・・」

執事・・・モーガンは俺達を館の中へと入れた。

中は何処も塵一つないまでに綺麗に磨かれていた。

壁に掛けられている絵画などは、素人の俺でさえ分かるほどどれもこれも高そうな物ばかりだった。

ウォルターなどは「素晴らしい」と感嘆する程だ。

絵画の他にはマスケット銃やサーベルなども飾られていたが写真もあつた。

伯爵家の写真だろう。

白黒の写真が何枚も飾られており、皆笑顔で写っていた。

その写真の中で一枚だけカラーの写真があつた。

相棒と赤みが少し掛った茶色の髪をした娘が写っていた。

娘の年齢はソニア嬢より少し年下だが・・・綺麗な花嫁衣装を着ていた。

相棒の方は黒の燕尾服だった。

美女と野獣・・・と頭に浮かんだが直ぐに消した。

そんな言葉は失礼に値する、と思ったからだ。

「このお嬢さんがお前の奥様か」

俺は相棒に写真を見て訊ねた。

「ああ・・・カリオスト口伯爵家の令嬢アンナだ」

僅か18歳にしてこの世を去った、と相棒は告げた。

「・・・そうか」

俺は相槌を打っただけで止めた。

後ろの2人は何も言わなかった。

「時にモーガン。アンナの“寝室”は大丈夫か？」

「勿論です。毎日ちゃんと手入れしております」

「そうか・・・」

相棒は花瓶に入れられていた赤い薔薇を1本だけ抜き取った。

そしてモーガンに俺達を部屋に案内するように言つと自分は別行動を取った。

「失礼だが相棒は何処に？」

俺はモーガンに訊ねた。

「奥様がお眠りになられている寝室に向かったのです」

寝室・・・墓か。

だが、敢えて寝室と言っているのはまだ生きている、と思いたい願望だろうか。

モーガンは俺達に部屋を案内すると去ろうとした。

俺はそれを止めて寢室に案内してくれ、と頼んだ。

「相棒の妻に自己紹介をしたいんだ」

ウォルターとエレエーヌも一緒に行くと言った。

モーガンは困りもせずに頷いてくれた。

「かしこまりました。では、こちらへ」

俺はそれに頷いて後を追った。

赤い絨毯が敷かれる廊下を歩きながらモーガンは俺達にアンナという娘の事を話した。

前伯爵と夫人の間に産まれた一人娘だったらしいが、母親はアンナを産むと直ぐに死んだらしい。

それからは伯爵が一人で育てたが、仕事などもあり一人にする事が多かったようだ。

「アンナ様はそれに対して不平不満を一つ言いませんでした」

「立派な令嬢ですね」

ウォルターが世辞ではない口調でモーガンに言った。

「ありがとうございます。ですが、アンナ様は幼い頃から身体が弱くて何時も部屋で本を読んでおりました」

両親は忙しくて構って貰えない上に病弱で外に出れないとは・・・酷過ぎる。

本を読みながら空を飛ぶ鳥などを見ては・・・何時か外に出たいと思いはじめたらしい。

よくある話だが、そういう環境で、身体で生きているとなると、強くは言えない。

「ですが、お身体が悪いので出てはいけないと医者から言われました」

だから、ずっと夢だけで見ていたらしい・・・

「所が・・・前旦那様が生きていた時一度だけ外出したんです」
もちろん無断で。

で、右も左も分からないお嬢さんに悪い虫が近づいて来たのは言うまでも無い。

「そこへ現れたのが旦那さまでした」

悪い虫をあっという間に倒した相棒を見て、お嬢さんは白馬に乗った騎士と会ったと思っただけらしい。

ここで何時もなら毒舌女ことエレノアが何かしら言うのだが、何も

言わなかった。

・・・少しは気持ちを組む事が出来るんだな、と俺は心の中で感心した。

「その時の旦那様は、外人部隊に所属しておりましたが休暇を取って来たと話しておりました」

ただし、追われていたというから何かしら揉め事を起こしたんだな、と俺は推測した。

「それもあり旦那様は直ぐに立ち去ろうとしたんですが、運悪くその追手が来たんです」

それで手に手を繋いで逃げたらしい。

映画みたいな話だが本当の話だ。

何とか追手を撒いた相棒はアンナの身の上を聞いて外の世界を案内したらしい。

アンナにとっては全てが新鮮だったらしく何時までもその話をし続けたらしいが、そんな時間は長く無かった。

直ぐに迎えが来て館へと戻る事になった。

それから一度は別れたが、アンナの方は諦め切れなかったらしい。

自分を助け外の世界を案内してくれた相棒に淡い恋心を抱いたようだ。

それで父親のコネを使い相棒を見つけて何度か会いに行ったらしい。相棒も一度は面倒を見た事もあつてか会い続けたらしく・・・何時しか二人は愛し合い・・・結婚した。

「よくアンナさんの父君は許しましたね？」

幾ら娘を助けた男とは言え、外人部隊の男と結婚など許せる訳が無い。

「一人娘の・・・最後の我儘でしたから」

モーガンは悲しそうな顔で答えた。

「・・・・・・・・・・」

相棒と結婚した時のアンナは・・・もう余命が幾ばくも無かったらしい。

そんな娘の願いを父親として叶えたかったのだろう。

花嫁衣装に身を包んだアンナと相棒は記念写真を一枚撮った。

暫くは仲良く暮らしたらしいが・・・やがて深い眠りに落ちたらしい。

その後を追う様に前伯爵も死んでしまった。

「まだ20にもならないのに・・・憐れですね」

ウォルターは心から同情した声で言った。

「いいえ。例え若くして亡くなられても奥様は幸せでしたよ」

父からの深い愛情で育ち、相棒と出会い外の世界を満喫でき結婚も出来た。

不幸などとは思わない。

幸せな人生だった、とモーガンは語った。

僅かに声が震えている……………

俺達はそれを知らない振りでもやり過ごした。

そして相棒の居る奥方が眠る部屋へと向かった。

第十五章：長いお別れ

執事のモーガンに案内されて着いた場所は館の庭だった。

ちょうど夕焼けが葡萄畑に落ちる時だったが・・・綺麗だった。

そしてその庭には小さな墓石があった。

『アンナ・デウ・ゲ克蘭伯爵夫人。ここに眠る』

と墓石には書かれていた。

相棒は婿養子と言っていたが、墓石には相棒の姓が書かれている。

嫁いだんだな・・・

相棒は墓石の前に黙って立っていたが俺たちの気配に気づいたのか声を放った。

「何の用だ？」

「お前の奥様に挨拶をしたい、と思っただけ」

俺は当たり障りのない言葉で返した。

モーガンは一礼して既に去って居ない。

「そこが・・・お前さんが愛した女が眠っている所か」

俺はジタンを燻らせながら改めて片手に1本の赤い薔薇を握り佇む
相棒の背に話し掛けた。

「ああ。ここから見える景色が好きだ、と言っていた」

相棒は薔薇を墓前に添えて答えた。

モーガンからも聞かされたが・・・憐れだな。

まだ20にも満ちていないのにその人生に幕が閉じたんだ。

世の中、それ以下の歳で死ぬ奴等も大勢いるが・・・やるせないんだよな。

『何で若い奴等が死んで年老いた者達が生きるのか？』

なんて昔、道端の老人が言っていたがその通りだ。

あれから数年は経ったが、未だに頭から離れないのも現実が・・・
老人の言う通りだからだろう。

どうして若い奴等が・・・それこそ真面目に生きて来た奴等が早死
にして俺らみたいに人を殺して金を貰う奴や悪行を重ねて私利私欲
を貪る奴等が生きるのか・・・

しかし、それでも目の前で眠る彼女は幸せだったのだろうか。

生前・・・最後に撮った記念撮影を見れば分かる。

自分の人生はもう直ぐ終わる。

だが、精一杯生きて来た。

後悔などしていない。

そう笑顔で答えていた……俺らみたいな男には似合わないし眩し過ぎるが……羨ましく思う。

俺らの人生は後悔の繰り返しだ。

あの時、ああしていればこうしていれば……. 後悔の繰り返し。

俺ら以外の……大抵の奴等もそんな人生だろう。

だが、目の前の彼女はその大半から抜け出した稀有な人物。

もし、神が居たとするなら……最後の最後で願いでも叶えたのか？と問いたくなる。

「アンナ。今日は俺の相棒が居る。自己紹介をするから聞いてくれ」

相棒の言葉に俺は一步前に出て恭しく頭を下げた。

「初めまして。マダム・アンナ。私はショウ・ローランドと言います。貴方の夫であるベルトランの相棒です。この度は貴方様の館に一夜ですが泊らせて頂きます」

眠る彼女は何も言わないが俺は言い続けた。

「アンナ。明日にはまたここを出て行く。次は何時帰って来るか分からない。お前には迷惑ばかり掛けてすまない」

相棒は墓石に語り続ける。

その背中は……とても小さな背中に見えた。

……やっぱり傭兵の過去なんて見ない方が良いな。

こんな過去……誰にだって見られたくないし見たくもない。

俺は少し後悔に襲われた。

「旦那様。夕食の準備ができました……」

モーガンが再び現れると俺達に声を掛けてきた。

「直ぐに行く」

「かしこまりました」

モーガンは一礼して去ろうとしたが、相棒が呼び止めた。

「彼女は……アンナは幸せだったと思うか？」

相棒の質問にモーガンは驚いた顔をしたが直ぐに笑顔になった。

「勿論です。この上ない程に幸せでしたとも。貴方様と言う伴侶と出会った時から短い人生でしたが……その薔薇のように幸福な時間でしたよ」

だが、貴方様はどうですか？とモーガンは訊ねた。

「貴方様はアンナ様と結婚しました。しかし、アンナ様に縛られる必要は無いです」

生前アンナはモーガンにこう語ったらしい。

『あの人には私以上に幸せになって下さい、と伝えて』

「……きつと相棒の性格を考えて言ったんだろっな。

自分の事を想い続けるのは良いが、自分ではない別の女性と結婚して生きてくれ、と言いたかったのだろっ。

「……」

相棒は無言でそれを受け止めた。

「私ごとき老執事が言つのもおこがましいですが、貴方様には幸せになつてもらいたいです」

その薔薇のように「……」

モーガンは墓石に添えられた薔薇を見ながら言った。

「……」

それに相棒は無言で答えたが、モーガンは答えを聞かずに今度こそ立ち去った。

俺達もまた立ち去った。

相棒はまだ移動しないが、放っておく。

暫くは・・・夫婦二人切りで居させようじゃねえか。

じゃないと・・・久し振りの再会で碌な話も出来ないだろうからな。

――
俺はかつての妻が眠る墓石の前に居た。

相棒達は気を遣ってか誰も居ない。

館の庭に彼女は眠っている。

そこは一番景色が良い・・・特に夕焼けが葡萄畑に沈む姿が好きだと彼女は語った。

『私・・・ここから見える夕焼けが好きなんです。夕焼けって昼と夜の中間でしか輝く事を許されない・・・僅かな時間でも必死に自分を見せている・・・そこが好きなんです』

それを言う彼女は、死期が近い自分と夕焼けを重ねているような口調だったのを今でも覚えている。

そんな昔話を俺は思い出した。

ここに来る気は無かった。

彼女が眠ってから一度もここに足を運んだ事は無い。

来た所で何を言えば良いのか・・・分からないし、ここに来ると嫌でも彼女との思い出が閉じ込めていた箱から出て来るから嫌だった。

今まで何度も女とは寝て来たし別れを繰り返した。

だが、あいつ等は生きている。

しかし、彼女は違う。

まだ本の・・・18歳でこの世を去ってしまった。

俗に言う不治の病で・・・

『私、もう直ぐ死ぬんです』

初めて会った時、彼女は俺にそう告げた。

俺はそれを聞いて煙草を落としそうになったが、彼女は笑顔だった。

もう直ぐ死ぬというのに、どうして笑顔になれるのか分からなかった。

『死ぬ前に一度だけ外の世界を見てみたかったです。貴方はそれを叶えてくれた。もう思い残す事はありません』

世の中は理不尽と不平等で出来あがっている、と知ってはいるが・
・やるせないもんだ。

それでもそれに負けず生きようとする彼女は・・・綺麗だった。

誰が見ても美しいと言っだろう。

そんな彼女を僅かな時間だったが妻に娶れた・・・男として光栄と
思うし温かい家庭という物が体験できた。

彼女は俺に沢山くれた。

俺はそんな彼女に恩返しができたのか？と思う時もある。

だから、あいつに・・・モーガンに訊ねた。

あいつは笑顔でこう答えた。

『幸せでしたとも。貴方様と言う伴侶を得て人生を全うしたんです。
幸せで無かった筈がありません』

本当にそうなのか？と自問自答したくなる。

「・・・なあ、アンナ。俺は君を幸せに出来たか？」

俺は質問した。

だが、答えなど返って来ない。

それでも訊ねたかった。

俺は・・・君を幸せに出来たのか？

夕日が葡萄畑に落ち夜になった。

そろそろ行こうと思ひ背を向けた時だ。

『幸せでしたよ。貴方・・・・・・・・』

風に乗る声が聞こえてきた。

振り返ったが誰も居ない。

また風に乗る声が聞こえた。

『私は幸せでしたよ。貴方という男性と結婚した。貴方は私に多くの物を与えてくれた・・・自慢の夫です』

「・・・そうか。君も自慢の妻だよ」

俺は頷いてからアンナに言った。

そして歩き出した。

あの言葉は・・・・・・・・きつとアンナが言ったんだと思う。

錯覚かもしれないが・・・思いたかった。

アンナ・・・今度、産まれて来たらもう一度君に会いたい。

今度は長い時間を掛けて過ごそう。

それまでは・・・“長いお別れ”……………

ロング・グッドバイだ。

第十六章：大佐からの挑戦

相棒が来るまで俺達は食前酒を飲みながら待っていた。

酒はシャンパン。

だが、ウォルターはジン&ビターズを飲んでいる。

19世紀のイギリス海軍将校が好んで飲んでいたカクテルだが……
いやはやアンティークだね。

エレー又はただの水。

俺が2杯目を飲み干した頃に相棒は来た。

俺は何も言わずにシャンパンを飲み続けるが、ウォルターは相棒に
こう訊ねた。

「奥方とは話せたかい？」

「ああ。……最高の夫だと言われた」

最高の夫、か……

男冥利に尽きるな。

「旦那様。ご夕食を運んでも宜しいですか？」

モーガンが影のように現れると相棒に話し掛けた。

「ああ。車は用意できたか？」

「はい。後でお見せします」

頼むと相棒は言いモーガンが引いた椅子に腰を降ろした。

モーガンは俺達に一礼して去って行った。

「で、相棒。これからどうする？」

まだ時間はあるがまたあんな眼に遭うと考えられる。

一体誰が裏切り者なのか……

だが、今はこれからの事を話そう。

「このままスイス国境越しにリヒテンシュタインに行く」

スイス国境越しなら道は複雑だが、逃げ切れると相棒は言った。

「そうか」

「それからシヨウ」

相棒が俺の名を呼んだ。

だが、続きを話さない。

……なるほど。

了解したぜ。

俺は相棒の眼を見て納得した。

俺の伝手を使え、か。

モーガンが綺麗に絵が描かれた食器に料理を載せて運んできた。

「鹿の肉を使った料理です」

料理を並べながらモーガンは言った。

本来なら前菜を出すのが先だが、相棒の事を考えての事だろう。

「執事長。お客様が来ております」

使用人と思われる男がモーガンに話し掛けて来た。

「客？誰だ」

「それが伯爵に会いたいとしか・・・・・・・・・・」

伯爵・・・相棒にか。

「モーガン。客を中に入れる」

「宜しいのですか？」

「ああ。どうせ俺らを追っている“狩人”達だ」

断ると力づくで来る、と相棒は断言した。

狩人・・・ね。

俺はその言葉に眼を細めながらシャンパンをまた飲んだ。

モーガンは一礼して去って行ったが、直ぐに戻って来た。

男を二人連れて。

一人はウォルターよりも歳下だが修羅場を潜り抜けて来た、という事は判る。

もう一人の男は如何にも「私、体育系です」と前面に押し出したタイプだ。

懐の大きさから見て・・・SMGか。

随分と物騒な物を持っているな。

エレー又は水を飲みながらも右手は懐に伸びている。

初老の男は相棒に近付くと灰色のソフト帽を左手で取り一礼した。

「初めまして。ベルトラン・デウ・ゲ克蘭伯爵。私はゴダール。

モーリス・ゴダール。元フランス外人部隊第1落下傘連隊所属の大佐だ」

こちらは部下の軍曹だとゴダール“元”大佐は紹介した。

「“OAS”の指導者が何の用だ？」

相棒は注がれた赤ワインをテイステイングしながら訊ねた。

OAS・・・か。

OAS - - フランスの極右民族主義者の秘密軍事組織。

シャルル・ド・ゴールがアルジェリアの独立を認めた事が発足の原因。

ド・ゴールは元々厚顔無恥とも言える我が道を行くタイプだったから敵は多く、アルジェリアの独立を認めた事から更に多くなった。

一部の政治家と軍人が独立に反対し暗殺からテロなどを起こした。

だが、結局はアルジェリアは独立した。

無駄骨だったと言える。

この元大佐が所属していた第1落下傘連隊も反乱に加わった過度で解体された・・・

そこに所属していたとこの元大佐は言ったが誇らし気だったのが不思議だ。

「私を知っているとは光栄だ」

俺が思考している間にゴダールは皺が多い笑みを浮かべていた。

「質問の答えになっていないぞ」

「貴様。たかが日本人の分際で大佐に……………」

「軍曹。貴様は階級を人種で差別するのか？」

ゴダールが今にもSMG――MAT 49を抜こうとした軍曹を
一声で止めた。

「し、しかし、大佐」

「軍曹。私は階級を人種で差別するのか？と訊いているのだよ」

ゴダールの声は元ではなく現役の大佐の声だった。

「ベルトラン伯爵もそちらのショウ・ローランドも少佐だ。貴様よ
り上だ。その少佐に対して失礼だ。謝れ」

「…………失礼しました」

軍曹は懐から手を出して、深く頭を下げた。

「別に良い。それで質問の答えは？」

「失礼した。答えは簡単。君に…………君とショウ・ローランドに挑
戦したいと言いに来たんだ」

「ほおう。まあ、立ち話も何だ。座りな」

「ありがとう」

ゴダールは礼を述べてからモーガンが引いた椅子に腰を降ろした。ただし、軍曹は直立不動で立っているが。

「お酒は如何ですか？」

「うん。貰おう」

モーガンは怖がりもせずゴダールのグラスにワインを注いだ。

「素晴らしいワインだね。香りも最高だ」

流石は数百年の歴史を誇るカリオストロ伯爵家のワインだ、とゴダールは褒め称えた。

「お褒めに預かり光栄です」

モーガンはそれに礼を述べると相棒の傍に立った。

「それで挑戦と言ったがどういう事だ？」

「君はそちらの2人をリヒテンシュタイン公国まで護衛するのが役目だろ？」

「護衛とは違う。護衛はその小娘一人。俺と相棒は運び屋だ」

「そうか。まあ、それでだ。私はOASが無くなったからビジネスを始めたんだ」

何でも屋を。

「つまりあんたはある人物からこの2人をリヒテンシュタインに入れるな、と依頼された訳か」

「その通り。だが、それを何処から嗅ぎ付けたのか煩い“野良犬”が居てね」

「ペスの事が」

「ペス？ペスと言うのかい？あの男は」

「ああ。シャルル・ペス。フランスNO・1の傭兵だ」

「NO・1・・・か。それが本当ならフランスの傭兵界も先が見えるね」

明らかに馬鹿にした口調でゴダールは語った。

「腕も悪ければ手癖も悪い。その上、交渉も最悪。別の意味ではNO・1だね」

まったくその通りだ、と俺は思った。

「それでそいつがお前さんの依頼を嗅ぎ付けて自分もやらせろと言ってきたか」

「ああ。汚らしくも土足で私の憩いの場に現れてこう言ってきた」

自分も一枚噛ませろ。

断るなら世間に公表する。

「直ぐに軍曹の手で処刑させても良かったが、少し遊びをしようと思つてやらせたよ」

結果は見るまでもないが。

「で、あいつをどうした？」

「どうもしない。恐らくまた君等を狙うだろう。だが、今度は私の方も君達を狙う」

あんな駄犬ではなく本当の“獵犬”を放ち“狩人”を使う……

「それはわざわざありがとう。ちょうど退屈していた所だ。その心遣いは嬉しいぜ」

なあ？相棒。

「ああ。どうも齒ごたえが無くて消化不慮だったんだ。あんた等なら……腹が満杯になる」

「はははははは。流石は不死身の王と獵犬という渾名を持つ傭兵だね。実に素晴らしい返答だ」

ゴダールは声を上げて笑ったが、軍曹は何処までも仏頂面だった。

「では、君等の返答に対してもう一つ教えよう。我々はスイス国境から君等が行くと分かっている」

「依頼人から教えられたのか？」

「ああ。どうも依頼人は私を過小評価しているようだ。腹立たしいが、相手が女性となれば大目に見るさ」

女性、ね………

「紳士だね。あんた」

「君は紳士ではないのかな？」

「生憎と敵となれば容赦しない性質だ」

「それは素晴らしい事だ。敵に情けは無用。隙あらば殺せ。それが我々の掟であり生きる方法なのだから」

「そりゃどうも」

「それはそうと君の奥方であるアンナ殿は若くしてこの世を去ったそうだね……心から悔み申し上げるよ」

ゴダールはワイングラスを高々と掲げた。

「アンナ・デュ・ゲ克蘭伯爵夫人。貴方の夫とその相棒は私にとつて今まで会ってきた男の中でも最高に値する。願わくば天よりこの2人を見守って下さい」

そう言ってワインを飲み干したゴダールは立ち上がった。

「では、ベルトラン伯爵。シヨウ・ローランド。次は・・・“戦場”で」

『ああ。ゴダール大佐』

俺と相棒はグラスを掲げて大佐に返答した。

そして大佐と軍曹は去って行った。

第十七章：操り人形

ゴダール大佐と軍曹が去ってから改めて俺達は食事を始めた。

ウォルターはモーガンが注いだ赤ワインを飲みながら相棒に訊ねた。

「ムツシュ・ベルトラン。あの男を知っていたようだが、会ったのかい？」

「いや。噂では聞いていた」

OASの指導者にしてフランスの裏社会で何でもやる男だ、と。

「何でも言ったが、具体的な例を上げると？」

「麻薬の密売、武器の密売、護衛、運び屋、尾行、暗殺、誘拐……
何でもやる」

最初はOASと似たような仕事が多かったが、やがて独自の伝手などを作り今では表側にも会社を持つようになったらしい。

「それは凄い。と言う事は政界とも繋がりと見て良いね」

OASは元々政治家も一枚噛んでいる。

指導者ともなればそいつらとも未だに繋がりを持っているに違いない。

いや、以前以上に太いパイプを持っている可能性がある。

それを考えると先ほどの一件も何となく納得が行く。

あれだけの事をやったのに警察が来ないしラジオにも出ないのだから。

「それにあいつ自身の腕も良い。面倒見も良いからかつての部下達が来る時もあると聞く」

敵ながら大した大佐だよ。

「で、君はあの男の挑戦を受けるのかい？」

「スイス国境を通ると知っているんだ。何処を通ろうと変わらない。それなら正面突破が一番だ」

「万歳特攻でもする気？」

エレーヌが馬鹿にしたように言ってきた。

「生憎と死ぬつもりは無い。裏切り者が居るんだ。その落とし前は着ける」

「・・・そう。それであの男の実力もとい部下の実力はどれ位分かる？」

「少なくともペスよりは強い」

あの男と比べたら部下が可哀そうだ、と俺は思うが言わないでおいた。

「奴等は資金もあるから恐らくさつき以上の装備で来るかもな」となる」と重機関銃もありえるか。

そうなる」と俺らの手持ちでは不味いな。

さて、どうするか………

しかし、俺の心は何処か昂ぶっていた。

戦う者達の宿命？とも言えば良いかな。

強い奴と戦う。

それだけで嬉しくなる。

これでは戦闘狂と言われても仕方ないかもしれないが、男なら当たり前ともまた思う。

「所で相棒。ワインはどうだ？」

相棒は俺にワインの味を訊ねてきた。

「大佐の言葉を借りる訳じゃないが、流石は数百年の歴史を誇るワインだ」

「それなら良い」

相棒はブルドック顔で笑顔になった。

・・・合図だな。

「ちょっと一服してくる」

俺は断つてから席を外した。

自分の部屋に戻った俺は電話を取り出して番号を入力した。

さあて・・・繋がるかな？

待つ事、数十分。

・・・待たされるのは女だけにして欲しい、などと思っている内にやっと繋がった。

『誰だ？』

電話の相手は少し不機嫌そうな声だった。

耳を澄ませば女の喘ぎ声が聞こえてきた。

「よお、フリッツ。お楽しみ中に悪いな」

俺は古い友人の名を呼び謝罪もした。

『その声は・・・猟犬か！？』

「ああ・・・お楽しみ中に悪いんだが、頼みたい事がある」

『何だ？俺に出来る事なら言ってみろ』

戦場で助けてくれた礼、とフリッツは言ってくれた。

「持つべき者は戦友だな」

『うるせえ。それで何だ？』

「ああ。実はある人物を調べて欲しいんだ」

名前、住所、容姿、性格、資格、家族、会社………全てを。

『分かった。どれ位の時間を貰えるんだ？』

「出来るだけ急いで欲しい」

せいぜい1日って所だ。

『せっかちな男だ。中に出す時もそつなのか？』

「てめえが言うな。それより頼むぞ」

『任せておけ。直ぐにラブ・コールで送ってやる』

電話の向こうで得意気に笑う奴の顔が見える気がした。

「頼む」

俺は通話を終えた。

これで大丈夫だ。

俺はジタンを取り出して銜えるとライターで火を点けながら煙を吐いた。

OASの指導者・・・ゴダール大佐、か。

厄介な相手だと直感で分かったが・・・腹が満たされる相手でもある、と思う。

そんな事を思いながら部屋を出て食事を再開した。

食事の後は風呂に入り、その後でモーガンが用意してくれた車を見に行った。

「お車です」

モーガンが相棒に鍵を差し出した。

車は闇と同化するような黒一色で黒い獣を連想させる。

“フォルクス・ワーゲン　ゴルフ”

新しい車、か。

「ギアはマニュアルでエンジンをフェラーリのエンジンに変えて置きましたし防弾ガラスなどにもしておきました」

モーガンは必要な物は全て用意した上に施してある、と付け加えた。

「相変わらず素晴らしい気配りな。モーガン」

「お褒めの言葉を頂いて恐縮です」

相棒の褒め言葉にモーガンは満面の笑みを浮かべた。

長い間、執事として仕えてきたモーガンだ。

主人である相棒の褒め言葉こそが最高の宝なのだろう、と俺は思いながら相棒と共に車に乗り込み具合を見た。

座り心地も悪くないしガラスも防弾。

エンジンも問題ないしタイヤも大丈夫だ。

しかし、一体どうやって手に入れたんだか……………

その時、携帯が鳴った。

「もしもし？」

『俺だ』

電話の主はフリッツだった。

豪く早い事に感心しながら俺は話すように促した。

『ああ。どうやらとんでもない相手だぞ』

フリッツの説明を聞いて俺は確かにとんでもない、と納得した。

『俺の会社はまだ大丈夫だが・・・気を付けろ』

何か裏がある、とフリッツは真剣な声で俺に告げた。

「ああ。それじゃな」

俺は電話を切り隣で煙草を吸う相棒に電話の内容を伝えた。

「なるほど・・・」

相棒は煙を吐きながらゴルフを背にして俺を見た。

「どうもこいつは臭いな」

「だな。だが、あいつも恐らく踊らされているんだろう」

あいつとは弁護士の事だ。

弁護士は依頼人が不利になるような事は断固として口を割らない。

しかし、この場合は知らされていないようだ。

つまり信用されていない所か利用されているだけ。

相棒はそれを人形に例えて踊らされていると称した。

踊らされた、か・・・

「俺達も操り人形か？」

こんな糞みたいな茶番劇に付き合わされ踊らされる人形なのか？

「今の所はな」

そう・・・今の所は。

「俺らは駒でもなければ狗でもない。自分の意思で戦場を決める兵士だ。それをさも駒みたいにするとは・・・良い度胸だよな？」

「まったくだ。で、お前の方はどうなんだ？」

俺に合図をしたと同時にこいつもまた弁護士に電話をした。

「向こうも薄々は感じていたが、依頼人を信用するように努めた」
依頼人を信頼して信頼されてこそ初めて契約が成立するというのがその弁護士の持論らしい。

素晴らしい持論だ。

だが、それを踏み躪られたのだから依頼人だろうと怒り心頭なのは言うまでもない。

頭に9mmを何十発もお見舞いしたい程にな。

「・・・明日は荒れるぞ」

嵐のように、と相棒は告げた。

「それは楽しみだ」

俺はジタンを吸いながら口端を上げて笑った。

「お二人とも良い笑顔ですね」

モーガンが俺と相棒にコーヒーを差し出してきた。

「モーガン。一服どうだ？」

相棒がジタンを差し出した。

「頂戴します」

断ってからモーガンはジタンを受け取り、俺がそれに火を点けてやった。

「奥様も旦那様のその笑顔が素敵だと言っておられました」

まさか、また見られるとはとモーガンは語った。

「そうか。モーガン。ついでと言っては何だが、明日ここに俺の友人が来ると思う」

「友人？」

「ああ。犬みたいな名前の男だ」

「ああ、お話に出てきた自称フランスNO・1の傭兵ですか」

「ああ。そいつが来たら“丁重に御持て成し”しろ」

「畏まりました。使用人の総力を上げて御持て成しをしましょう」

「頼む。そうすれば少しはあいつも“良い思い”をするだろう」

泣くほどな、と相棒は言いモーガンは笑顔になった。

その笑顔が・・・子供が見たら泣きそうな笑顔だった。

終わったな。

俺はペスに柄にもなく形だけの祈りを捧げながらコーヒーを熱い内に飲んで冷えた身体を温めた。

第十八章：第1落下傘連隊

朝早く――夜明け前に俺達はカリオスト口伯爵家を出た。

見送り人はモーガンだけ……の筈だったが何時の間にか全員が出ていたから驚きだ。

「色々世話になりました」

俺はモーガンに礼を述べた。

「いえいえ。私の方こそアンナ様へ声を掛けて下さり嬉しく思います」

「相棒は奥方とお話中ですか？」

相棒はここには居ない。

先に行けと言われて車に乗っているのだが。

「……待たせたな」

相棒が庭の方角から出てきた。

薔薇の香りが微かにした……奥さんに挨拶してきたか。

薔薇の他にも……百合の香りもした。

百合なんてここには無かった筈……

「奥さんは百合の香水でも着けていたのか？」

「ああ。していた」

なるほど・・・出迎えしに来た訳か。

「良い奥さんだな」

「俺が妻にした女だ。当たり前だろ？」

「そうだな」

俺は苦笑して頷いた。

そしてモーガンに「後の事は頼む」と言い相棒はゴルフにエンジンを掛けて出発した。

「さあて、ここからが正面場だな」

俺はスターム・ルガー ミニ14のレシーバーを引きながら相棒に話し掛けた。

「ああ。まあ、問題ないだろう」

そして裏切り者もといこの下らない茶番劇を主催した者をぶちのめして終わりだ。

スイス国境越しにリヒテンシュタインへ向かう途中で相棒の携帯に電話が鳴った。

「モーガンか？」

相棒は誰なのか見当が付いていた口調で訊ねた。

『はい。ご命令通り“御客様を丁寧に持って成し”ました』

俺らが出て行ってから殆ど時間が経過していないのに・・・犬みたいに鼻が効くようだな。

もつとも俺らが出て行ってからだから落第点物だが。

「で客は？」

『涙を流して帰って行きました。私達としましてはもう少し御持て成ししたかったのですが、ね』

「そう言うな。後は俺達がやる」

『畏まりました。では、ご主人様。またお越し下さい』

「ああ。必ず行く」

そう言って通話を終えたが、また鳴った。

「誰だ？なんて訊くのは野暮というものか？」

『その通りだよ。ムッシュ・ベルトラン』

・・・ゴダール大佐か。

「何の用だ？」

相棒は膝でハンドルを巧みに操りながらジタンを銜えて火を点けた。

『なあに私に代わって小うるさい“蠅”を叩き潰してくれた事に礼を言いたくてね』

ついに犬から蠅に格落ちか。

これ以上、格落ちしようものなら本当にNO・1の傭兵だ、と俺は思う。

「別に。俺としては好い加減、付き合うのに嫌気が差しただけだ」

紫煙を吐きながら相棒はゴダール大佐の言葉に同意した。

『私もだ。ここからは……我が“第1落下傘連隊”の精鋭が御相手しよう』

邪魔者は誰も居ない。

警察の動きを止めた、という事だ。

向こうもやりたい放題だが俺たちの方もやりたい放題という訳だよな？

「それはどうも。お互い手加減は無用だな」

『勿論だ。では……』

「ああ」

相棒は携帯を切った。

「相棒。早速お客様だぞ」

相棒に言われるまでもなく俺はゴルフの窓から身体を出してミニ14に狙いを定めていた。

「中々のカモフラージュだが甘いぜ」

俺は引き金を引き絞りスナイパーを始末した。

もう敵は待ち構えているか。

面白いぜ。

流石は第1落下傘連隊。

相手にとって不足無しだ。

「相棒。後ろからも敵だ」

俺は運転する相棒に後方の敵を任せる事にした。

「了解」

相棒は新しいジタンに火を点けながら頷き、ギアをバックにしてからゴルフを急回転させて後ろにした。

そして走りながら突っ込んで来る車に向かってウィンチェスターM1300から発射された12ゲージを撃ち込んだ。

もちろん防弾だが、それを立て続けに3発も撃ち込まれたら視界が封じられるのは言うまでもない。

ポンプアクション式なのによく3発も撃てるものだ、と俺は感心しながら前から来た敵を撃った。

3発も12ゲージを喰らった車は横転した。

それを確認してから直ぐにギア・チェンジをして前に戻す。

その間に俺は横から来た車に向かって5・56mm弾と357マグナム弾を同時に撃ち込んで撃退した。

車は宙返りを何と2回もして動かなくなった。

「これだけやっても警察が来ないなんて映画みたいだぜ」

らしくない台詞を俺は言った。

実際、宙返りを2回もするなんて映画も良い所だ。

「だな。楽しいか？相棒」

「もち。相手が第1落下傘連隊だ。楽しくて笑いが止まらない」

「俺もだ」

俺と相棒は笑いながら蠅のように襲い掛かって来る敵を撃退し続ける。

その間ウォルターは葉巻を蒸かし続けて一言も発しなかった。

エレエヌに到ってはただ、拳を握り締めたり開いたりを繰り返すだけ。

少しは働け、と言いたい所だが今は楽しいから放っておこう。

スイス国境を越えたのは昼過ぎになってから。

残弾を気にしながら敵を撃退していくが、減らないから些か面倒だ。

「一体どれだけ居るんだか」

「さあな。だが、もう直ぐリヒテンシュタインだ。そこまで行けばゲーム・クリアだ」

確かにその通りだ。

リヒテンシュタイン公国までもう少しという所で村があった。

道はそこしか無い。

畏だ、と警報が鳴っているが正面突破あるのみ。

「掴まってる」

相棒はギアを素早くチェンジさせアクセルをフルに踏み込んで村の中へ入った。

それを数台の車が追い掛けて来る。

だが、村に入った途端に閉じられていた窓やドアが開き、一気に銃弾の嵐が襲い掛かって来る。

大きな銃声と共にフロントガラスに大きな穴が開いた。

「・・・ブローニングM2!!」

俺は左から見えた銃火器に声を荒げた。

窓からブローニングM2を構える・・・軍曹が居た。

あいつが来ているのか・・・

俺が声を発したと同時にまた撃たれた。

相棒は素早く避けたが、完璧とは言えず破片がタイヤに当たった。

更にそこへ銃弾が何発も当たって・・・やられた。

ゴムが引き千切れる音がすると同時にサイド・ミラーから火花が散っているのが確認できた。

出口までもう少しという所で何てこった。

「あの森に行くぞ!!」

相棒は近くに見えた森にゴルフを突っ込ませた。

何とか森の入口まで到着した俺達は直ぐ様ゴルフから降りて走った。

直ぐにゴルフが炎上し爆発した。

後もう少し遅ければ全員お陀仏だった。

肝を冷やすが、流石は精鋭連隊だと感心する。

「ここを抜けて進めばリヒテンシュタインだ。ラスボスはまだまだから・・・中ボスだな」

相棒は今の状況をゲームにして例えた。

「よくこんな時に言えるわね」

エレヌがマニューリンMR73を撃ちながら相棒を詰った。

「“こんな時”だからこそ言えるんだよ。お嬢ちゃん」

「その通り」

俺は同意しながらミニ14のマガジンを交換した。

ウォルターはただ葉巻を蒸かしながら何もしない。

銃弾が頬を掠めようともしない。

流石は飛行機乗り。

この程度はピンチの内にも入らないってか？

「相棒。この森で勝負とするか」

「そうだな。森は・・・俺たちの“狩り場”だ」

向こうも精鋭だろうが、俺らだって負けてはいない。

それに・・・市街戦よりこちらの方が俺らにとっては良い。

「お嬢ちゃん。お前はウォルターを連れて先に行け」

「あんた達2人は足止め役？」

「違うな。狩人さ」

「たった2人で大人数を相手に勝てると思っっているの？」

「勝てるから言っているんだよ。速く行け」

「せいぜい勇ましく戦って足止めして死になさい。そうすれば墓前に花くらいは捧げて上げるわ」

何処までも毒を吐きながらエレー又はウォルターを連れて森の奥へと消えて行った。

「さあて・・・行くか」

「ああ……狩りの始まりだ」

俺と相棒は頷き合い二手に別れた。

「二手に別れたぞ。追え！！」

村の方から軍曹の声が聞こえた。

軍曹が指揮官か。

その喉笛を……食い千切ってやるよ。

第十九章：弁護士登場

俺と相棒は森の中で二手に別れて敵を狩る事にした。

俺は森の中を音も立てずに走りながら適当な場所を見つけて伏せた。

耳を地面に押し当て足音を聞いてみる。

・・・人数は2人か。

足音の重さからしてアサルトライフルにショットガンか。

茂みの中に隠れた俺は足首に隠していたナイフを抜いて口に銜えた。

暫くすると敵が来た。

迷彩服を身に纏いフェイス・ペイントまでしている。

先ずはショットガンを始末するか。

あれで撃たれると不味いからな。

隙を窺うが流石は精鋭。

まるで隙が無い。

片方の死角を片方がカバーし合っており、何時でも撃てる感じた。

さあて、どうするか。

その時、蛇がニユルニユルと地を這い俺の頬に来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は蛇を音も立てずに首を抑えて無造作に投げた。

敵は蛇に驚き一瞬だけ隙が見せた・・・・・・・・

素早く懐に入り相手の喉をナイフで切り裂きもう一人へと移動する。

もう一人は素早くアサルトライフルを俺に向けようとしたが、間に合わないとなるとストックで殴ろうとしてきた。

それを蹴りで阻止して脇腹に拳を数発打ち込んで前屈みにさせた。

そこをナイフで延髄に刺し始末した。

中々の相手だが、まだ満たされないな・・・・・・・・

俺は息を軽く吐いて弾薬を調達した。

そして・・・・やっと巡り会えた“恋人”を抱き締めた。

ああ、やっと会えたぜ。

AK - 47。

やっぱり俺にはお前しか居ない。

弾倉は3つ共頂戴した。

そこから素早く離れて森の中を進む。

進んでいると足音が僅かに聞こえてきた……

「出て来い！日本人！！俺が八つ裂きにしてやる！！」

この声は軍曹か。

しかも声からしてかなり激怒している。

戦いは冷静に物事を運んだ方の勝ちだぞ？

俺は直ぐに木の影に隠れて獲物が来る方角を見た。

木や葉の間から見える大柄な体格。

そして弾丸を左右に掛けて両手でブローニングM2を持っている。

……ランボアの真似事かよ。

何とも呆れ果てて物が言えない。

ベルト給弾式は一人撃ちに向かない。

ベルトリンクを垂れ下げた状態だと直ぐに絡まって撃てなくなる。

精鋭部隊ならそれくらい知っているだろうに……

しかも、あんな風に弾丸を左右に装着していると1発でも当たれば他の弾に引火して爆発するぞ。

軍曹は部下を数人連れてこちらに来る。

俺はAKをセミ・オートにして身体を下げて肩膝を着きAKを構えた。

AKはあまりM16に比べれば命中率は高くない。

だが、この距離で、しかも、あんな風にベルトリンクを巻いていれば当てられる。

「・・・・・・・・・・」

狙いを定めて引き金を引こうとした時だ。

突然、銃弾が襲ってきた。

気配はまるで感じなかったが、見れば敵が音も無く立っていた。

「ちっ・・・・・・・・」

俺は直ぐにその場から離れた。

「居たぞ！撃て！！」

軍曹が大声を上げて一斉射撃が行われた。

幾つもの銃弾が俺の背後を狙って来る。

特にブローニングの弾は細い木を薙ぎ倒していく。

間違っても撃たれたくない銃だ。

逃げながら反撃するが焼け石に水と言った感じだった。

くそつたれが。

口の中で罵りながらも俺はワクワクしている。

やはり消化不慮だった分、鬱憤が溜まっていたようだ。

俺は森の中を走りながら相棒はどうしているのか気になった。

――
俺は後ろから銃を乱射してくる男達に舌打ちした。

「好い加減諦めたらどうだ？犬っころ」

「うるせえ！てめえだけでも血祭りにしねえと俺の気がすまねえんだよ！！」

犬みたいにワンワン吠えて来るのは名前まで犬そっくりな男……
自称フランスNO・1の傭兵シャルル・ペス。

それから名も知らないチンピラ達だ。

相棒の方には第1落下傘連隊が向かった様だが、こちらは犬共が相手。

ペスはM16のスポッター・モデルを撃ちながら俺に怒鳴るがまるで当たらない。

寧ろチンピラ達の方が俺の近くを狙っている。

つくづく傭兵には不向きな男だ。

弾は無駄遣いだし声も大きい態度もだ。

こんな奴は何処に行っても門前払いか射殺。

よく今まで生きて来れたと感心さえするぜ。

俺は森林の中を走りながらどうやってあいつ等を叩きのめすか考えた。

相棒の方は心配ないだろう。

獵犬の名は伊達ではないからな。

「ぎゃあー!」

後ろから悲鳴がして見れば、背後からペス達が撃たれていた。

撃っているのは第1落下傘連隊の者達だ。

「おい、待てっ。俺は味方だ!!」

ペスは木の影に隠れて奴等に吠えたが奴等は無言で攻撃してくる。

「くそったれ・・・撃て撃て! ブツ殺せ!!」

ペスは自分は何もせずにチンピラ達に罵声を混ぜて命令するが、チンピラ達も怖くて出来ないでいた。

上官が上官なら部下も部下だ。

あれでは直ぐに殺されっちまう。

第1落下傘連隊は撃つのを止めて距離を縮めるとペス達を拳や銃底で叩きのめした。

弾の無駄使いと思ったのか?

もし、そうなら良い選択だ。

俺から言えば残念な事だが・・・

あっという間にチンピラどもは叩きのめされ残ったのはペスだけ。

「ひ、ひい!!」

ペスは四つん這いになって逃げようとするが、直ぐに捕まって何度も執拗なまでに殴られた。

憐れだな。

なんて事を形ばかりに思いながら俺はまた走り出した。

奴等は直ぐに俺を追い掛け始めた。

同じ空挺部隊同士で相手の手の内は読めている。

厄介な相手だが、自分の腕がどれだけ通用するかと思うと楽しくて胸が躍る。

葉が一枚落ちた。

直ぐに横に跳ぶとナイフを持った男が落ちてきた。

ウィンチェスターM1300の引き金を引き相手を殺した。

近距離で撃つたから相手は挽肉のように肉片を飛び散らせて死んでしまい、こいつでは撃たれたくないと思えば俺は痛感した。

それから続けざまにコルトを抜き後方の奴等にもお見舞いする。

怯んだ所で直ぐにまた走り出した。

危ない所だったな……

木の上から奇襲……外人部隊に入った頃、教官にやられたな。

しかも、催涙ガスを顔面にぶつけられて泣いたのを思い出す。

余計な事を考えてしまったせいで、肩を掠めた。

だが、軽い。

これなら止血するだけで大丈夫だ。

俺は振り向いて再びM1300の引き金を引きスライドを動かして弾を排出しM24手榴弾の紐を抜いて投げ付けた。

『手榴弾！！』

奴等は急いでその場から離れる。

俺もまた急いで離れ距離を開けて行く。

爆発が後方から聞こえたが、気にせず走る。

木の影に隠れた俺は急いでハンカチで肩を縛った。

それから新たに弾を装填する。

「残弾も残り少ないな」

残りの残弾は数発。

これではとてもじゃないが戦い切れないから敵から分捕るしかない。

敵の気配がまたした。

「さあて・・・分捕るか」

スライドを引き木の影から躍り出た俺だが、既に敵は地面とキスをしていた。

「よお、不死身の王様」

敵を足蹴にする男は俺と同じ年だったが、こんな場所でもスリー・スーツに身を包み革靴を履いていた。

こんな場所にはつくづく不似合いな格好なのだが様になっているから何も言えない。

「お前かよ。ジャン」

俺はこの仕事を紹介してくれた弁護士であり戦友のジャンに笑いかけた。

「間に合って何よりだ。しかし、流石は元同僚。倒すのに苦労したぜ」

見てみる、ネクタイが曲がれたと言って血の付着したナイフを逆手に持ち直し曲がったネクタイを直した。

「相変わらずだな」

細かい所を気にする上にネチネチと何度も突いてくるのがこいつのやり方。

お陰で検事からは「ネチッコイ」とまで言われているから想像できるだろ？

「お前もな。で、依頼人は？」

ネクタイを直し終えたジャンは倒した敵の服でナイフの血を拭いながら訊ねた。

「森を抜けている最中だ。俺と相棒が奴等を狩っている」

「相棒？ああ、猟犬か」

「ああ。噂は聞いているだろ？」

「まあな。しっかし、参ったねー。今回の仕事は」

依頼人に利用された・・・反吐が出る、とジャンは唾を吐きながら言った。

「そう怒るな。後でタップリとお礼をするんだろ？」

「その積りだ。さあて、俺もこの狩猟に参加させてもらっぜ」

ジャンは死体からMAT-49を奪い取った。

「懐かしい代物だな」

俺が入った時は既に倉庫行きになる所だったが、MP5よりも俺にはこちらの方が良い。

あんな繊細な女よりちょっとガサツな女の方が好みだからかもしれないな。

「お前さんはこっちだろ？」

ジャンはもう一人の死体からUZIサブマシンガンを取り上げて俺に渡してきた。

ユダヤ人が建国したイスラエル製であるUZIサブマシンガン。

口径は9mmしかないが、ヨーロッパでは一般的だし砂漠戦などにも通用する上に分解・整備が簡単だから今でも人気がある。

俺もこれを使った事があるから思い入れがある女だ。

「UZIの方が俺は好みなんだ」

グリップの下からはみ出たマガジンを抜いて新しいマガジンに交換した。

そして銃身の上に付いたレバーを引いた。

「さあて、猟犬殿の加勢に行くとしますか？」

MAT-49を両手で持ちジャンは口端を上げて笑ってみせた。

「加勢というよりは援護だろ？」

あいつなら第1落下傘連隊の猛者相手でも引けは取らない。

加勢よりは援護と言った方が正しい程に、な。

「そうだな」

ジャンは俺の指摘に笑いながら俺と共に森の中を走り出した。

最終章・帰り道の会話（前書き）

これにて第一部とでも言えば良いでしょうか？は終わります。

ですが、まだ続きますのでもう少しお付き合い下さい！

最終章：帰り道の会話

俺はブローニングM2をスタローンよろしく的に乱射する軍曹とその部下達の攻撃を木の影に隠れてやり過ごしていた。

「どうした？どうした！貴様らには大和魂があるのだろ？武士道はどうした！敵に背を向けるのは武士の名折れではないのか？なぜ来ない！！！」

よくもまあ、日本の文化を知っているな。

反撃したくてもあれが相手ではまともに太刀打ち出来ない。

くそつたれが……

だが、不意に銃声が止んだ。

チラリと除けば電話をしている最中だった。

よくもまあこの非常事態とも言える時に電話に出れる物だ、と俺は呆れ果てた。

しかもこちらに聞こえるほどの大声だからもう開いた口が塞がらない。

「何故ですか?!今なら奴等を……いえ、そういう訳では……はい……了解しました。大佐」

ゴダール大佐から、か。

反撃できるチャンスでもあるが、ここは止めておこう。

「聞こえるか？ ショウ・ローランド！！」

「ああ、聞こえるぜ。軍曹」

そんなに大声を出さなくても聞こえるのになぜか山を一つ越える勢いの声で喋り掛けて来る軍曹。

「我々は貴様とベルトランを殺す積りだった。だが、命令で引かせてもらおう！！」

命令で引くだと？

「どついう事だ？」

「大佐の命令だ。本当なら貴様をM2で木っ端微塵にしたい所だが引かせてもらう。だが覚えておけ！！必ず貴様を殺す。それは俺だ！！」

馬鹿でかい声で言われても困るし見れば部下達も耳を抑えている。

あれじゃ難聴になっちまうぞ・・・“ヒトラーの電動ノコギリ”じやあるまいし・・・

「ベルトランにも伝えておけ。以上だ！！」

そう言って軍曹達は背中を向けた。

今なら殺せるが・・・まあ、止めておくか。

向こうも俺らの性格を熟知してあんな風に言っただろうしな。

こちららも消化不慮は治まったから良しとするべきか。

奴等が完全に消えたのを確認してから俺は木の影から出た。

「よお、生きてたか？相棒」

右から相棒とスーツ姿の男が現れた。

「誰だ？そいつ」

「弁護士のジャンだ。初めまして。シヨウ・ローランド・・・獵犬と言った方が良いかな？」

ジャンと名乗った男は相棒と同じ歳くらいだが小奇麗で身嗜みも申し分ない。

十分にパリ・ジャンに見えるし欲張らなければ十分に女を物に出来るだろうな。

「どちらでも。何であんたが？」

「なあに今回の依頼に頭きたから来ただけだ」

自分を虚仮にした依頼人を叩きのめす、と意気込むジャン。

「それはそれは・・・それよりゴダール大佐が命令で軍曹達を引

かせたぜ」

「というと依頼人からか」

そう考えるのが妥当と言えるな。

「何が望みなんだ？」

「その事なんだが俺の知り合いに民間軍事会社の奴が居るんだ」

「P M Cの？」

ジャンが訊くと俺は頷いた。

P M C - - - 俗に言う民間軍事会社は冷戦終結後に軍縮が続く中で誕生した。

今では更に需要は高くなり軍に居るよりこちらの方が給料が高いとさえ言われている。

主に特殊部隊が多い会社もあればチンピラ同然の例えばペスみたいな出来そこないの駄犬だけで構成された会社など様々だ。

アメリカは元海軍特殊部隊S E A L Sの隊員が設立した「ブラック・ウォーター社」が有名だしヨーロッパに掛けてもイギリスの警備会社「ハート・セキュリティ」の設立者は元S A Sの隊員だ。

とまあ、こんな感じでP M Cは結構ある。

仕事内容もボディーガードから輸送なんかと手広くやっている。

「そのPMCの友人に今回の依頼人を訊ねたんだ」

「それで？」

「有名人だ」

俺は携帯を取り出し録音していた音声を流した。

『ウォルター・ネモリーズ。元英国空軍においてバトル・オブ・ブリテンに参加。1941年5月に敵機であるメッサーシュミットBf109に撃墜される。そこから諜報部員として活躍し各国に個人的なコンタクトを持つ』

「ここ等辺は説明された通りだな」

相棒はジタンを吸いながら独白し俺は頷いた。

『1950年に諜報部員の働きと空軍での働きを評価され女王陛下より勲章と騎士の称号を与えられ引退し結婚』

そこで息子を1人儲けた。

『息子は英国陸軍へ入隊し3年後にSASへ入隊する。1980年に除隊後、民間軍事会社であるプリンセス・エリザベス社を設立』

「おいおい・・・プリンセス・エリザベスと言ったらイギリス所かヨーロッパでも大手民間軍事会社だぞ」

ジャンが驚き少し説明した。

プリンセス・エリザベス社はヨーロッパの大手民間軍事会社でブラック・ウォーター社のヨーロッパ版と言える。

孤島を買い取りそこで本格の軍事訓練を受けられる程の資金もある。
・ 簡単だが、これを言えばどれくらい凄いのか納得できる筈だ。

『しかし、1989年に交通事故で死亡し社長の座は娘であるエレヌ・ヴィンフリードが継いだ』

「あの爺さんと血縁関係だったか」

「ああ。どうやら顔などは母親似で名字は祖母の物だ」

相棒の言葉に俺は付け足すように言葉を紡いだ。

『エレヌ・ヴィンフリードはスイスの寄宿制学校へ入校し主席で卒業。その後は父親の後を継いでやり手女社長として週刊誌にも取り上げられた』

だが、とここで区切られた。

『まだ若輩でしかも女という事もあり専務を含めた数人が反旗を翻そうとしている。その上他社の株を買い漁り強引に潰し人員を吸収するなどやる事がとにかくエゲツナイ事で周囲からも反感を買っている』

ここで録音は終わりだ。

「つまり今回の依頼はそういう輩を炙り出す為に仕組んだ依頼とい

う訳か」

「ああ。他にも現役の傭兵をスカウトしたいらしい。しかもアジア系を、な」

「・・・俺とお前か」

「どうやらその通りらしい。そしてゴダール大佐とペスは俺らをテストする為の試験者のようだ」

こんな風に俺らを試すとは良い度胸だと思わずにはいられない。

「だから、ジャンを利用して俺らを雇ったという訳か」

「そんな所だろう。まったく甚だ迷惑だぜ」

「俺もだ。まあ、そんな奴等を今から熱い灸を据えるんだ」

ジャンの言葉に俺たちは頷き合い3人で森の中を抜けた。

森を抜けると・・・リヒテンシュタイン公国に到着・・・国境を越えている。

リヒテンシュタイン公国へと到着した俺達をエレーヌ・ヴィンフリードとウォルター・ネモリーズが出迎えてくれた。

「よく生きて来れたわね？」

「どの口でそんな事を言っているんだ」

相棒はジタンを海に投げ入れて答えた。

「海に煙草を捨てるなんて環境破壊よ」

「じゃあ、お前さんらが俺達を騙したのは詐欺だな」

「騙したとは人聞きが悪いわね」

エレー又は自分の目的が達成されたとばかりに笑ってみせたがウォルター爺は無言だった。

「私にあんた達2人を見込んだのよ？ 栄えあるプリンセス・エリザベス社の社長である私が、ね」

「それはどうも。だが、答えはNOだ」

「同じく」

俺と相棒はNOを突き付けた。

「どうして、と訊いても良いかしら？」

『お前が気に入らないから』

口を揃えて俺たちは答えてやった。

「私が気に入らないという安直な理由で高額な職の誘いを断るの？」

理解できないという顔でエレー又は言ってきたが俺たちは平然とした。

「金はジャンから貰う。それで十分だ」

「・・・・・・・・・・」

エレーヌは理解できない顔で無言になっている。

「やれやれ・・・我が孫娘ながらつくづく情けない」

それまで無言だったウォルター爺が初めて口を開いた。

「エレーヌ。私は先に言った筈だぞ？」

プロを懐柔するなど出来ない。

「彼等はプロだ。そして戦士だ。お前は金で懐柔できると思っているだろうが、そんな事なら彼等は当の昔に大金を掴んでいるさ」

それをしないという事は筋金入りだという証拠。

「それに私は会社の筆頭株主だ。わしが株を売ればどうなると思う？」

「お爺様・・・パパが築き上げた会社を捨てる気？」

「息子は会社を造る時に私に言った」

会社としての利益より社員の安全と依頼人の信頼を大事にする。

「それを息子は言って成し遂げてきた。それがお前の代になってか

らどつだ？利益第一の方針で客の信頼まで損なっている」

おまけに他社の怨みまで買ってしまった、色々と面倒な事になるとウォルター爺は言った。

「私は……………」

「言い訳は良い。とにかく彼等の事は諦める。そして専務たちともよく話し合い物事を決める。彼等にも彼らなりの理由があつてお前に反旗を翻したんだ」

「ご立派な説教だな」

相棒は煙草を新たに吸いながらウォルター爺に言った。

「息子が亡くなって引き取りもせずスイスの寄宿学校へ送った負い目だよ」

「そうかい。だが、俺の……俺たちの気は納まらない」

「何を望むんだい？」

「落とし前を着ける」

相棒はエレベーターを見た。

「嬢ちゃん。あんたは俺達を騙したんだ……覚悟は出来ているんだろうかな？」

「覚悟ですって？誰に向かってその口を聞いているのよ。私は英国

人よ。その言葉・・・決闘と受け取るわ」

「ならそれらしくするか」

相棒はマジックのように手袋を取り出してエレーナに投げた。

「エレーナ・ヴィンフリード。貴様に決闘を申し込む」

「その決闘、受けて立つわ。ベルトラン・デュ・ゲ克蘭伯爵」

「何だか変な方向へ行ってないか？」

俺がジャンに話し掛けるとジャンは肩を落とした。

「昔から変な所があるんだよ」

合理主義的な性格だが・・・こんな風に騎士道精神とも言える行動を取ると言っ。

いやはや何とも・・・

「武器は？」

「拳銃で勝負だ」

相棒はウィンチェスターM1300とUZIサブマシンガンを俺に放り投げた。

そしてコートをジャケットの左側を掴み、ホルスターに収めたコルトを見せた。

エレーヌもまたMR・73を見せる。

「では……これが落ちたら勝負だ」

ウォルター爺が金貨を取り出して上に弾いた。

ピンッ

と宙に舞うコイン。

そして一発の乾いた音がした。

エレーヌが両膝を地面に着き手を抑える。

相棒の右手にはコルトが握られており白い煙を出していた……

コインが地面に落ちるのを待ってから相棒は言った。

「……抜けよ」

相棒はルール違反をしたのに平然と言ってみせる。

つくづく……悪役が似合う男だ。

「ひ、卑怯よ！！まだコインは落ちていないわ」

エレーヌは利き手を抑えながら相棒に噛み付いた。

それから直ぐにコインは落ちた。

「決闘をするとは言った。獲物も決めた。だがコインが落ちてからというのは決めていない」

ウォルター爺が勝手に決めた事だ、と相棒は言ってみせる。

「まあ確かにな」

孫娘が撃たれたというのにウォルター爺は冷たい眼で孫娘を見ていた。

「それじゃ俺たちは帰る」

何？

これで終わりなのか？

まだまだ夜はこれからだって言うのに……………

だが、相棒はさっさと立ち去るしジャンも付いて行く。

俺も…………仕方無く付いて行く。

仕事を終え落とし前も着けた俺と相棒は徒歩でリヒテンシュタイン公国を出た。

ジャンは車を取りに行くと言って今は居ない。

夜のためか昼以上に肌寒く…………温もりを求めたい気分だ。

あんな舐めた真似をされたのだからもう少しやっても良いと思ったが……

「このフェミニストが」

「誰がだ」

相棒はジタンを吸いながら俺の独白に訊き返してきた。

「お前だよ。あれならもつと傷めつけても良かっただろ？」

利き腕を1発撃っただけで終わりなんて生温いにも程がある。

「あれで十分さ。肉体より精神的に傷めつけたからな」

確かにあの小娘は傲慢とも言える程の自信家だ。

不意打ちとは言え利き手を撃たれた。

それを考えると肉体より精神的に傷めつけたと言えるな……

前言撤回。

「お前は蛇だな」

ジワジワと獲物を絞め付けて最後に丸呑みする“ミッドガルドの大蛇”だ。

「生憎と犬と鷹だ」

「だったら尾は蛇だな。まったく・・・で土産物はどうする？」

ソニア嬢達に土産を買って来ると約束した筈だ。

「おっと忘れていた」

「お前が女の約束を忘れるとは意外だな」

「女神だから大目に見てくれるのさ」

なるほどね・・・・・・・・・・

「女神に対してだけ膝を着くか」

「かもな。まあ・・・何れ別れるだろう」

その言葉には諦めの色が含まれていた。

ふと時計を見れば・・・・・・・・・・

序章：戦争ジャーナリスト（前書き）

えー今回、作者の友人であり相談相手の作家を出します。

皆さんも知っている方ですので分かると思います。 W W W

序章：戦争ジャーナリスト

「おい、ブレイズ。起きろ」

俺は肩を揺らされて閉じていた瞳を開けた。

「……んだよ。まだ寝て5分も経ってないんだぞ……って編集長!！」

寝ていたソファから転げ落ちながら俺は慌てて立ち上がった。

「まだ寝て5分の所を起こして悪かったね……ブレイズ君」

肥え太った豚みたいな男が俺の上司……編集長は皺をよせながら笑みを浮かべて来る。

「あ、いえ……な、何でもないです。それで何か用ですか？」

俺は出来るだけ言葉を選びながら訊ねた。

「君はパリに来て何年だ？」

「パリに来てから……ですか？」

「ああ」

「そうですね……アメリカから直ぐに来たので……2年、ですね」

「そうか。2年か・・・その2年間で何か我が社に貢献したかね？」

「・・・・・・・・」

確かにここ花の都と謳われ毎年約4、500万人の観光客がここを訪れている。

しかも、その6割は国外からの人々だから凄いだろ？

話を戻すとそんな所へ来て早2年。

俺はその間、特に何もこの会社に貢献していない。

「あまり口酸っぱく言いたくはない。それに君の前歴も考えれば我慢できる」

「・・・・・・・・」

編集長の言葉に俺は無言になった。

俺はここへ来る前アメリカに居た。

職業は戦場ジャーナリスト。

名前から分かる通り戦場を走ってその場の空気や真実を世界に訴えるのが俺らジャーナリストの役目だ。

そんな職業に就いた俺もちろん戦場を走り回った。

主にアジアが多かったが、中東も行った事がある。

中東は宗教と国家絡みのイザコザが多くて実に難しい。

まあ、そこが俺の初陣とも言える場所だったが。

そこで俺は初陣にしてピューリッツァー賞物のネタを手に入れた。

そしてタイプ・ライターで書き上げて後一步という所まで手が届いた。

だが・・・そこで終わった。

ピューリッツァー賞は俺ではなく3ドルの値打ちも無い記事・・・
自国を絶賛するような記事を書いた糞が手に入れ俺は職を追われる
羽目になった。

どういう事か？

考えたが直ぐに止めた。

大体的見当はある。

ピューリッツァー賞を創設した“ジョセフ・ピューリッツァー”はこ
う言った。

『社会的不正義と当局の汚職の摘発こそ、審査を貫く基準である』
今にして思えば・・・俺がジャーナリストを目指したのも彼の言葉
が影響したからだ。

現実なんて理不尽と不平等で成り立っている最低の世界だ。

だが、それでもこういう風な事を言い賞を設立する人が居るんだと幼いながらも感心を覚えた物だ。

そういう事もあって俺は自分の信念を貫く形で紛争を食い物にする国のあり方を記事にした。

それが恐らく“白い家”の奴らには我慢できなかったんだろうな。

そんなこんなでアメリカを俺は追われたが、先輩ジャーナリストの助けでヨーロッパに来た。

そしてまたジャーナリストをしているのだが・・・どうも記事が書けない。

書けるのは書けるが、自分の考える記事が書けない。

そこで2年も碌な記事を書けないのだから編集長が些かお怒りなのも解かる。

「・・・すいません」

「謝るのは弱い証拠と言っただろ？ブレイズ」

編集長は俺を見ながら言うてくる。

「だが、君の誠意は私も理解している。そこで君に仕事を頼みたい」

「仕事？」

「ああ。プリンセス・エリザベスは知っているだろう？」

「はい。ヨーロッパ版ブラック・ウォーター社なんて揶揄されるPMC社ですよな？」

「そつだ。その女社長へインタビューしてくれ」

アポは取ってある、と編集長は言った。

「私の社は君のように“本場”を味わった者は居ない。君なら良い記事が書けるだろう？」

まあ・・・否定はしない。

「それからこれが終わったら少し休め。碌な記事を書いていないが、それでもずっと会社に住み込んで疲れているだろう？」

それも否定できない。

ここ2年間まともな記事は書けない俺だが、それでも何とかしようとやっている。

休みなんて日本のリーマンみたいに返上して、な。

「モンマントルに行け。あそこなら君好みの女も居るだろう」

これは饑別だと言われユーロを幾らか貰った。

「まずは身嗜みを整えてからな。女性と会うんだ」

「ありがとうございます」

俺は編集長に一礼してから社を出た。

だが、俺はまだ知らなかった。

この仕事の原因で俺は・・・2人の傭兵と奇妙な運命を辿る事を。

第一章：インタビュー

「・・・ここがプリンセス・エリザベスのフランス支社か」

俺は目の前にそびえ立つ立派なビル・・・プリンセス・エリザベスのフランス支社を見上げた。

プリンセス・エリザベスはイギリスのPMC・・・民間軍事会社だ。

アメリカのブラック・ウォーターのヨーロッパ版と揶揄される程の資産と人材を誇る。

今の社長は二代目。

前社長は元SASだが交通事故で呆気なく死亡。

その娘が後を継いだ・・・ここまでが事前に知った内容。

後はインタビューでのお楽しみだ。

服装を改めて確認する。

スーツは目立ち過ぎず地味過ぎずな紺色。

ネクタイは濃紺色でYシャツ薄青色だ。

持って行く物は手帳、ボールペン、テープ・レコーダー、カメラ・・・この4つがあればジャーナリストは十分だ。

「さて行くか」

俺は腕時計……ロレックスのサブマリーナを見た。

本来ならデジタルを使っているが、この場合はそれなりに見栄えする物の方が良いだろうと判断しロレックスにした。

時間は午前10:00ジャスト。

時間だ。

俺は自動ドアを潜った。

そして真っ直ぐに受付嬢の所へと足を向ける。

頭上から監視カメラがこちらを見ているが問題ない筈だ。

アポは取ってあるしな。

受付嬢の所へ行こうとした俺だが……………

「邪魔だ。東洋人が」

ドンツ、と左肩を押されて俺は横へと移動する羽目になった。

誰だ?と思い見てみる。

フランス人らしい容姿をしているが、それだけと言ってしまえる容姿だ。

服装はそれなりだがあの顔と声を見て聞けば直ぐに中身は判る。

「シャルル・ペスだ。社長のエレヌ・ヴィンフリードに会いた
んだが」

受付嬢の前に乱暴にも腕を出してナンパでもしに来たのか？と問い
たくなるような態度……………

ハッキリ言つて門前払い確実だ。

「少々お待ち下さい」

受付嬢は顔色一つ変えずに一度席を外してエレベータに乗り込むと
上へと向かった。

俺は取り敢えず待つ事にした。

煙草を吸う場所はあるが、今は止めておこう。

「おい、東洋人」

犬みたいな男……シャルル・ペスが俺に話し掛けて来た。

「生憎と東洋人という名前じゃありません」

こんな人種差別を前面に出すような野郎とは口も聞きたくないが、
俺は敢えて言つてやった。

「俺から言わせれば東洋人に名前なんて要らねえ」

「別に貴方の意見は求めていません・・・それより私に何か用ですか？」

ああ、会社の中で無ければ・・・インタビューをしなければ・・・彼女直伝の上段回し蹴りで顔を粉碎しているのに・・・口惜しい。

「ここは俺の会社だ。東洋人はお断りだ」

「俺の会社？冗談を言わないで下さい。ここはエレエヌ・ヴィンフリードさんの会社だ。貴方は社員か何かですか？」

「社員だ。それも上層部の・・・な」

嘘を吐くならもう少しマシな嘘を吐け。

社員なら・・・上層部の人間なら受付嬢に言わなくても直ぐに顔パスで行ける筈だ。

それなのにわざわざ受付嬢に行くのだから社員ではない。

まして上層部の者でもない。

それを自分でバラしているのだからお笑い草だ。

「東洋人はさっさと出て行け。ここは俺の会社だ」

「二度も同じ事を言わないで下さい。それに人種差別なんて人としてどうかと思いますよ？」

「アメリカみたいな国に負けた国民がほざくな」

俺の国は一度も戦争で負けた事が無い、どこいつは偉そうにほざきやがった。

俺が知る限りフランスは負けた事がある。

百年戦争ではイギリスにコテンパンにされ第二次世界大戦ではナチス第三帝国に北アフリカで惨敗を期した。

その上で首都を占領されてあまつさえまともに抵抗できたのはレジスタンスのみで首都解放を連合軍に任せきりだったのは何処の国だ？

フランス人はプライドが高いと言うが・・・こいつの場合はプライドなんて言葉は勿体ない。

ただの傲岸不遜な男だ。

「何を考えているかしらねえがさっさと出て行け」

ああもう・・・我慢の限界だ。

もうこの糞つたれを路地裏にでも連れて行って叩きのめしてやる。

そう思い歩もうとした時だ。

受付嬢が現れたのは。

受付嬢の左右には・・・屈強な男を2人ほど従えている。

あーあ・・・終わったな。

「ブレイズ様ですね？」

受付嬢は俺の方を見て話し掛けてきた。

「はい。パリ編集社から来ましたブレイズです」

俺は名刺入れから名刺を出して受付嬢に手渡した。

「社長がお会いになるそうです。どうぞ、こちらへ」

「ありがとうございます」

受付嬢に促されて俺はエレベータへと向かう。

その一方で……

「おいこら。何すんだよ……痛っ！！何で俺を追い払うんだよ？
！あっちの東洋人の方を……グゲー！！」

犬のように吠え立てるペスを2人は力任せに取り抑えて自動ドアから出て……裏へと連れて行った。

「申し訳ございません。お見苦しい所を……」

「いいえ。ああいう輩には見慣れていきますから」

後もう少し遅ければ俺自身があいつをああしていたが。

「所で社長は何故ここへ？」

本社はイギリス。

なのに何故フランス支社に居るのだ？

「それは社長から聞かされると思いますが一種の“修行”です」

修行？

「本社は専務たちに任せてありますので問題ありません」

そこまで言い受付嬢は黙った。

後は社長本人にインタビューで訊くしかないな。

エレベータは最上階で停まった。

自動的にドアが開き、重厚なドアが目の前にある。

受付嬢は控え目にドアノブを叩いた。

「ブレイズ様をお連れしました」

『入って』

ドア越しにハスキーな声が返って来る。

重厚なドアを受付嬢が開け俺だけが中に入った。

ガラスが張られた壁を見つめていた女性が振り返る。

年齢は二十代前半。

社長としては若すぎるくらいがある。

まあ、前社長が若くして死んで後を継いだんだから仕方無いのかも
しれない。

金系の髪は肩の所で綺麗に切られており・・・些か男前な気がする。

「初めまして。ブレイズさん。プリンセス・エリザベス社長のエレ
ーヌ・ヴィンフリードよ」

「初めまして。パリ編集社から参りましたブレイズと言います」

俺は一步前に出て名乗った。

「先ずは掛けて」

俺はヴィン・フリードに勧められるまま柔らかそうなソファに腰
を下ろした。

彼女もまた座る。

そこへ受付嬢がコーヒーを持って来る。

「コーヒーはブラックで宜しかった？」

「はい」

コトリ、とソーサーごと置かれたコーヒーからは心地よい香りが漂ってくる。

「良い香りですね……………」

「ブルーマウンテンだからね」

コーヒー豆の中でも最高級な代物だ。

カフェイン中毒である俺にとっては嬉しい限りだが。

「では、インタビューをしても宜しいですか？」

俺はテープ・レコーダーを出して彼女に訊ねる。

「ええ」

彼女はコーヒーの香りを楽しみながら頷いた。

「先ずどうして父君の後を継ごうとしたのですか？」

彼女の父は元SAS。

特殊部隊の元祖とも呼ばれ未だに「最強」とも言われるSASに彼女の父は所属し除隊後ここを立ち上げた。

だが、彼女はスイス女学校を主席で卒業したが別に特殊部隊に居た訳ではない。

それなのにどうして会社を継ぐ気になったのか？

「そうね・・・父の形見だからね」

彼女はコーヒを一口のんでから答えた。

父の形見、か。

「他に形見も無かったし他人に父の会社を取られなくなかったの」
それが理由と彼女は答えた。

「でも、祖父にも言われたわ・・・父の名を汚した、とね」

「父の名を汚した？」

何となく分かってはいた。

しかし、敢えて疑問を投げ付ける。

「父はここを起こす時にこう言ったの」

会社の利益よりも顧客の信頼と従業員の安全を第一に考える。

「良い社長ですね」

民間軍事会社でなくてもそうだが、大抵は会社の利益を第一に考えて動く。

建て前は顧客の信頼だ、従業員の安全だ、と言ってはいるが根底には必ず根を張っている。

特にこんな会社はそれが顕著と言えるほど前面に押し出される。

だが、従業員もそれは理解している。

危険だが高額。

それを覚悟で仕事に就いているんだ。

それをここの前社長は真っ向から否定し、顧客の信頼と従業員の安全を第一に考えるとしている。

そこが違う所だ。

「でも、私の代になってからは利益第一になったと言われたの」

確かに以前はそうだ。

調べた限りこの女社長になってからは利益第一が出ている。

そのため長い付き合いの顧客達も離れて行ったと聞いているが・・・

「今は持ち直しているのではないですか？」

今は前社長の時代と同じような働きをしており信頼も回復している筈だ。

「ええ・・・色々と遭ってね」

そう言って彼女はカップとソーサーを置いた。

その時・・・右手に大きな傷があるのを俺は見た。

「その傷は・・・・・・・・」

訊いてはいけないのだが、無意識に訊いてしまった。

「これはある男に付けられたの」

「ある男？」

「ええ。貴方と同じ日本人で傭兵よ」

「日本人の傭兵、ですか？」

戦闘ジャーナリストの俺は傭兵と会った事は何度かある。

よく漫画とかでは平気で裏切り金にガメツイとイメージするが、現実はそのうじゃない。

給料は安いし危険な場所へ放り込まれる。

そのうえ拷問に掛けられても文句は言えない。

何一つ取っても最悪だ。

だが、それでも彼等は勇敢に戦うし下手な正規軍より統率が取れている。

例外はあるにしても、だ。

そして日本人の傭兵は何人が居る。

特に外人部隊出身だ。

外人部隊出身の傭兵は多く居るし伝手となり傭兵になる者は多い。

だから日本人の傭兵が居たとしても可笑しくない。

「その日本人の傭兵はなぜ貴方にそんな傷を？」

「決闘を申し込まれたのよ」

革手袋を片方投げ付けられて・・・古風だな。

だが、コインが落ちる前にその男は拳銃を抜き彼女は利き腕を撃たれたという。

そしてこう言ったらしい。

『・・・抜けよ』

古風な奴と思ったが・・・どこの悪役だよ。

「話が逸れたわね」

彼女は右手を撫でながら話を戻し始める。

「そうですね。では・・・・・・・・・・」

俺もまた気持ちを切り替えてインタビューを続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7197r/>

深夜に咲く可憐な花

2011年10月9日22時09分発行